平成３０年３月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、前回の番組審議会での答申を受け「平成３０年度東北地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「平成３０年度東北地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。

続いて、「東日本大震災から７年」関連の番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、４月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜「東日本大震災から７年」関連の放送番組について＞

○ ３月２日(金)クローズアップ東北「津波ピアノ～坂本龍一と東北の７年～」は、番組のねらいがよく分からなかった。宮城県農業高校の津波で水没した泥だらけのピアノを弾いた坂本さんが、調子の外れた音を「ああ、いい音だ」、「自然が調律した」と表現していたが、その発想に被災者は違和感を持ったのではないかと感じた。番組全体がプロモーションビデオを見ているようで、坂本さんの新しいＣＤの宣伝のような印象も受けて、あまり感情移入できな

かった。また、当時、坂本さんを案内した音楽教師の持田敦子先生と吹奏楽部の部長だった武藤まいさんが、被災ピアノを展示している東京に見に行くという場面はわざとらしく感じられた。番組で何を訴えたかったのか疑問が残った。

○　３月２日(金)「クローズアップ東北」で、名取の宮城県農業高校の体育館のステージの上で、被災したピアノを坂本さんが弾いたとき、坂本さんは「いい音だ」と表現していたが、何か物悲しく、重苦しい音に聞こえ、心を打つものがあった。東京に展示してある津波ピアノを、武藤さんが見に行った時に言っていた言葉が心に残った。「被災地が観光地化しているのが嫌だった。でも、このピアノを見て、残すことも悪いことじゃないと初めて思えた気がする」。被災者の方々の心の動きが、この言葉に表れていると感じた。また、最後に坂本さんが「今回の震災で受けたショック、文明やテクノロジーが自然の猛威にさらされたということの意味をもっと考えていきたい」と言っていた。それがこれからの震災の風化を防ぐためにできることにつながっていくのではないかと感じた。

○　３月２日(金)「クローズアップ東北」について、坂本さんががんになったことで、音の聞こえ方が変わったと言っていたが、生死を見つめて感じ方が変わったのかなど、もう少しその意味を深く知りたかった。坂本さんが被災したピアノを使ったということだけではなく、持田先生や武藤さんの物語が絡められたことで伝わるものがあった。武藤さんが語った、「震災当初は人間らしい感情が出せなかったが、7年たって被災したピアノを残してくれたことを本当によかったと言えるようになった」という言葉に共感でき涙が出てきた。とてもすばらしい番組だった。

○　３月２日(金)「クローズアップ東北」は、世界的に有名な坂本さんが、東北のピアノとどう関わっているのか全く知らなかったので、興味を持って見た。坂本さんの言葉の中で「死んだピアノ」という表現が強く残っている。その背景には坂本さん自身の病気、自分に重ね合わせた部分があったのではないかとさまざまなことを考えることができた。坂本さんが、被災したピアノに命を吹き込み、その音が世界中でどんな反響があるのかこれからも注目したいと思った。

○　３月２日(金)綾瀬はるかのふくしまに恋して・選「いろんなとこ見てくなんしょスペシャル」(総合 後 8:00～8:35)は非常におもしろかった。綾瀬さんは、いるだけで周囲をぱっと明るくする華やかな雰囲気と、自然と笑顔を引き出す不思議な魅力のある人だと思った。大河ドラマ「八重の桜」以来、綾瀬さんは福島にとってなくてはならない人だと思う。今回は、「酒造り」「田植え」「織物」などに挑戦していた。ぜひ福島に行ってみたいと思わせるような内容になっていたし、福島に今住んでいる人、他県に避難している人を元気づけてくれる内容だったと思う。さらに、この番組を見て福島を応援したいと思う人は多くいるのではないかと思った。

○　３月４日(日)のＮＨＫスペシャル「“河川津波”～震災７年　知られざる脅威～」では、川をさかのぼる津波の脅威が非常によくわかる内容だった。川がカーブしているところでは遠心力で外側に多くの水が入り込むという説明があり、特に石巻の北上川の上流は、山に阻まれて海が見えないようなところで、川からさかのぼってくる津波でかなり大きな被害があった。津波を予想していなかった地区の人たちの恐怖はどれほどだっただろうかと考えてしまった。また、二方向から津波がきた例や大きな建物や工場の間を縫うようにくる津波の怖さも非常によくわかった。今後大きな地震が予測されている地域にとって、重要な示唆に富んだ番組だったと思う。

○　３月４日(日)の「ＮＨＫスペシャル」を見た。東日本大震災は想定をはるかに超えた災害で、震災前には考えられなかった事象が数多く発生した。河川津波もその一つだと思う。津波が内陸深くまで川を遡上(そじょう)し、多くの被害をもたらすことを誰が想定しただろうか。河川の存在は、市町村や地域、さらに企業の防災計画の策定において欠くことのできない要素。津波は、海の近くだけではない、多賀城市のように海の反対側から迫ってくることもあるという点を検証する内容だった。当時の映像や地図での解析などわかりやすく説明していた。震災前は想定外だったことも、今や想定外とはならない。この経験をいかに世間に知らしめるか、その役割は報道機関が担う仕事だと思う。このような番組は、東日本大震災のあった３月１１日前後に集中せざるを得ないという事情もあると思うが、世の中に広く知らしめるということから、時期に関

わらず多くの視聴者の注意を引くような工夫をしてもらいたい。防災、減災、風化防止等に非常にいい番組だった。

○　３月７日(水）ＮＨＫスペシャル「被曝(ばく)の森２０１８～見えてきた“汚染循環”～」(総合 後10:25～11:15)が非常に強烈な内容だった。福島県は森林面積が広いので、今後どうなっていくのか関心が高い。ＮＨＫでは継続的に取り上げて紹介し続けているので大変ありがたい。セシウム137は、半減期が３０年で、今植えた木が大きくなるまでは除染できないという事実を突きつけられた。ただ救いだったのは、土壌がセシウムを吸着してくれるので、水は汚染されていないということ。森が私たちを守ってくれていることを改めて教えてくれたすばらしい番組だった。

○　３月７日(水）「ＮＨＫスペシャル」では、セシウムが土の中にとどまっているので、川にセシウムが流れず非常に水がきれいだという説明があり衝撃を受けた。しかし、土の中に吸着されたセシウムは、植物が吸収し、実や花、葉っぱに貯まっていく。蜂が花の蜜と共に蜂の巣に持って行くことで巣のセシウムが高濃度になる。セシウムが含まれた実などを虫や鳥が食べると、それを動物が食べるという食物連鎖の中で循環していくことがよくわかった。一旦外に出たセシウムはなくならない、汚染が循環するだけ、これから動物の中に蓄積したものがどういう影響を引き起こすのか、心配になった。

○　３月８日(木)クローズアップ現代＋「大震災をつづった子どもたち　それぞれの７年」では、震災直後、自らの体験を作文に書いた８０人の子どもたちがいたことを知り驚いた。人生で最も多感な時期に被災した子どもたちがどんな思いをしてきたのかということを、自分の子どもの年齢も近いこともあり、重ね合わせて引き込まれるように番組を見た。子どもたちそれぞれの葛藤、人生に対するもがき、あるいは希望、そういったものがダイレクトに伝わってきた。ゲストで作家の重松清さんが「子どもたちの今の思いの出発点に大きな悲しみや諦めがある。それを忘れてはいけない。だからこそ、これから前に向かって頑張ろうとすることにたくましさを感じる」とコメントしていて心に残った。震災を経験した子どもたちの今の思い、気持ちをうまく引き出すように取材をしてきた担当者に敬意を表したい。

○　３月９日(金)「てれまさむね」の「三陸の海に舞え　新しい漁船彩る大漁旗」という特集について、非常にいい内容だった。漁師は寡黙で打ち解けてくれないというイメージがあるが、この特集では、カメラの前でいろいろな表情を見せていたし、胸の内の思いを含蓄のある言葉で語っていたと思う。恐らく何回も取材スタッフが通って相手と気持ちを通じ合わせたからできたことだと推察する。震災で船や漁具を全部失った漁師が、新造船に合わせて大漁旗を注文。大漁旗を作る様子も丹念に映像におさめてあり非常に興味深く見た。「漁師にとって新造船は夢だ」という話をして、新しい大漁旗を掲げて漁に出かけていく風景が非常に頼もしく、前向きな明るい気分にしてくれた。

○　３月１０日(土)こころフォトスペシャル「子どもたちと歩んだ７年」(総合 前10:55～11:38)で、亡くなった赤ちゃんが最後までつけていたものや亡くなった方の私物が紹介され、それ以上番組を見られないと感じるほどつらいと思った。番組に対しての感想などなかなか言いづらくて、放送に心を寄せるしかない。私たちに何かできることはないか、というところまで踏み込んで番組で発信してもらいたいと感じた。

○　３月１０日(土)ＮＨＫスペシャル「誰にも言えなかった～震災の心の傷　母と子の対話～」を見た。釜石で被災した当時３歳の女の子が、体調不良を訴えて不登校になり、心の治療を受ける中でつらい気持ちを語り始めるのだが、その言葉の重みに涙が止まらなかった。今、岩手県にはこういうトラウマを抱えた子どもが1万4,000人もいるという現状を私たちは知る必要があると思う。そしてその親も心の傷を抱えていて同じようにカウンセラーなどの力を必要としている。番組の中で母親が「すごく悲しいとき、誰かに一緒に泣いてもらえることで救われた」と言っていた。東日本大震災で起きたあの恐怖や悲しみを忘れてはならないと強く感じた。

○　３月１０日(土)「ＮＨＫスペシャル」では、心の底に眠っている恐怖心が数年たって出てくるため、子どものケアが大切だということを改めて感じた。よく子どもにはトラウマが残ると言われているが、このように番組で説明してもらうと非常にわかりやすかった。ナレーションは有名な女性声優を起用してい

ると思うが、どこにポイントを置いて話しているのかが分からず、映像やカメラワーク、音楽も効果的だったが、ナレーションだけ受け入れることができなかった。どうやってナレーターを決めたのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

心という非常に繊細なテーマなので、主人公の少女やその母親に寄り添い、しかも邪魔にならないような透き通った声の女性ということで人選をした。ふだんあまり震災に関心のない方、特に若者にも番組を見てもらえるように、著名な方にしたいという点もあった。

○　３月１０日(土)「ＮＨＫスペシャル」は、一組の母子に焦点を合わせた番組だった。親子とも震災で心に深い傷を負い、それでも何とか立ち直らせようとする母親と、トラウマから抜け出せない子ども。その関係性や心の葛藤まで丁寧に取材し、映し出されていたと思う。震災当時３歳だった子どもの心にも震災の悲惨さ、怖さはまざまざと刷り込まれていた。小さかったから覚えていないだろうというのは大人の勝手な思い込みで、子どもたちの心にもその光景はしっかりと残り、トラウマとなっていた。単に成長過程の反抗期だと思ってしまうような子どもの行動に深い意味があることを思い知らされた。心のケアが必要な子どもはまだ１万4,000人いるという事実に驚いた。番組では、スクールカウンセラーの取り組みについて紹介していたが、今やっている対応だけで本当に大丈夫なのだろうかという不安さえ覚えた。震災７年の番組で、ＮＨＫは子どもを焦点とした番組が多かったように感じた。震災復興は、土地や建物などのハード面だけではなく、やはり心のケアも非常に大切だと感じた。

○　３月１１日(日)目撃！にっぽん選「私たちの物語～歳月が紡ぐ震災７年～」は、昨年「クローズアップ東北」でも取り上げた仙台短編文学賞の話題だった。全国から600近い数の作品が寄せられたということで、それだけ震災に対する思いがいろいろな人の中に残っているのだと感じた。震災を忘れない、風化させないようにと、いろいろなイベントが開催されたり番組も放送されたりしているが、一方で震災を忘れたいという人もいると思う。これからの震災との向き合い方を考えなければならないと感じた。

○　３月１１日(日)「てれまさむね　東日本大震災７年～生活再建は　震災の記憶・教訓の伝承は～」(総合 後6:05～7:00 宮城県域)を見た。ヘリコプターで名取の閖上地区を上空から紹介するコーナーがあり、上空から見える建物や場所について詳しくリポートしていてとても分かりやすかった。水産加工場にさしかかったときには、手を振っている男性が見え、「あの男性はこの工場の社長さんです。今電話がつながっています」と言ってインタビューを始めたのには驚いた。斬新な演出もあり、とてもよかったと思う。

○　３月１１日(日)「はまなかあいづＴｏｄａｙ」(総合 後6:00～7:00 福島県域)を見た。まだ行方不明者が196人いるということが何よりも衝撃的だった。数字だけ196というと命の重さというか実感が湧かないが、番組では196分の１の我が息子が見つからないというお父さんを取り上げて、その後、生まれた娘に対しての思いと、亡くなってしまった我が子に対する思いで引き裂かれるような父親の気持ちが見事に描かれていた。とても共感できる命の物語だった。

○　３月１１日(日)ＮＨＫスペシャル「めざした“復興”はいま…～震災７年　被災地からの問いかけ～」では、飯舘村の菅野典雄村長のさまざまな試みが紹介されていて応援していきたいと感じた。ただ、区画整理事業や災害公営住宅の課題など、復興という概念は一体何なのかというのを突きつけられ、そこをしっかり考えなければいけないと感じた。大越健介キャスターが「楽しいと思える生活というものが復興であって、心の傷を乗り越えて新たな一歩を踏み出すプロセスに移ることが大切だ」と話していて、感銘を受けた。

○　３月１１日(日)「大切なものは何ですか」(総合 後11:20～12日(日)前0:20)は、視聴者からの投稿動画をもとに、一般の人々の自然な日常が紹介され、気持ちがほんわかした。１１日に放送する最後の番組ということもあり救われたような気がした。日常にこそかけがえのない大切なものがあるということがしみじみと感じられる番組だった。まず、生放送で見て、その後録画したものを見たが、見返したときは、ゲストの会話は全て飛ばして見ていた。ゲストのコメントは余り必要のない番組だった気がする。ただ、「プロが撮ろうと思ってもこういう場面は絶対に撮れない。それほど自然な場面でよかった」とゲストが話していたのは印象的だった。自然な日常を切り取った映像は何物にも勝るも

ので、特に３月１１日に放送するからこそのよさがあったと思う。

○　３月１１日(日)「大切なものは何ですか」は、実際に動画を投稿しながら見た。午後２時４６分に黙とうをするだけでなく、何かできないかと考えていたので番組に参加することも意義があると思い試してみた。番組では、投稿された映像をジャンル別に分け、投稿数の多いものをランキングで紹介していた。ランキングで紹介することに対して疑問を感じたが、ゲストの映画監督の山戸結希さんが「カテゴリーに分けるのには余り意味がない。その背景に、目の前にいるあなたに伝えたいという心のうちが入っている」というコメントをしていて納得した。山戸さんが、全ての投稿を見て、自分なりに一つのＶＴＲにまとめて最後に紹介していたが、とてもよい内容で涙が出てきた。番組の中で紹介した動画の中にスマートフォンで撮影したとは思えないほどきれいなものがあった。全てスマートフォンで撮影したものなのか。また１回３０秒の動画しか投稿できないシステムだったと思うが、３０秒以上の動画もあり、どうやって投稿していたのか知りたい。参加型の番組はとてもいいなと思った。

（ＮＨＫ側）

全てスマートフォンで撮影したもので、映像の違いは機種や性能によるものだと思う。また、１回に投稿できる動画はシステム上３０秒なので、長い動画の方は何回も投稿していただいたものをつなぎ合わせている。

＜放送番組一般について＞

○　２月１７日(土)ＥＴＶ特集「Ｒｅｂｏｒｎ～再生を描く～」は、脳損傷をきっかけに絵の才能が開花し戸惑うディジュリドゥ奏者・画家ＧＯＭＡの再生の日々を描いた番組で非常に興味深く見た。事故前の自分と今の自分との間を揺れ動く人間の葛藤が伝わってきた。アメリカを旅し、サヴァン症候群の研究者や脳損傷を機に音楽や数学の才能が目覚めた人を訪ねて、新しい生活を受け入れていく姿に感動を覚えた。

○　３月２日(金)きんよる秋田「あきた鉄道出会い旅～秋田内陸鉄道編～」(総合

後 7:30～8:00 秋田県域)は、中川安奈アナウンサーと秋田生まれのディレクターと２人で秋田内陸線沿線を旅する番組だった。くじを引いて、次に行く場所を決めていたが、路線図の表記がなかったためどこにいるのか分からなくなってしまった。ロケに４日間かかっていたようだが、行ったり来たりしている様子が分かれば、頑張って旅していることが伝わったのではないか。また、番組のキャラクターも登場し番組を盛り上げていたので、今後に期待したい。

○　３月３日(土)ＦＭシアター「風のち、りんご晴れ」は、青森県立藤崎高校りんご科の女子高校生の成長を描いた話だった。久しぶりに青春ドラマを聞いた気がした。今、最後までどんな展開が待っているのか分からないドラマが多い中、今回の番組は単純な内容になっていて、心が洗われた思いがした。

○　３月３日(土)のＮＨＫスペシャル「ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン　第２回働き方」を見た。働き方改革について、国会でも議論されていたので、タイミングのよい放送だったと思う。ＮＨＫが開発した社会問題解決型のＡＩ(人工知能)がはじき出した４つの切り口を元に、ゲストの専門家がかみ砕いてコメントしていた。ただ、出発点から答えまでの距離が長く、ストーリーが見えにくかった。もっと物語に仕立てて紹介した方が納得できたのではないか。最後に、司会のマツコ・デラックスさんが「働き方を考えることは、生きるということとは何か、人間とは何かということを考えることだ」とコメントしていたが、この番組で言いたいことをうまく表現していたと思う。

○　３月３日(土)の「ＮＨＫスペシャル」は、一見関係のない事象が高い相関関係があるということを、具体的な解決策も提示しつつ紹介していて面白く見た。「夜７時以降のメールは２３文字以内」という切り口について、これは効率的でぜひ実現したいと思える提案だった。全体的に示唆に富んだアイデアが多く興味深かった。

○　３月４日(日)日曜美術館「イレーヌ　ルノワールの名画がたどった１４０年」は、ルノワールの代表作「イレーヌ・カーン・ダンヴェール嬢」という、１枚の絵についてゲストと司会５人が語り尽くし、資料と映像で紹介するというかなり難しい試みだったと思うが、非常におもしろく拝見した。モデルのイレー

ヌは裕福なユダヤ人富豪の令嬢で、その家族を襲ったホロコーストの悲劇、ナチスドイツによる肖像画の略奪、そして戦後、奇跡的な肖像との再会など、１枚の絵に２０世紀の歴史が秘められていた。悲劇的な物語を知れば知るほど、絵を見る目が変わってくるので、ルノワールという画家の意図をはるかに超えて絵が訴えかけてくるものを感じさせるいい内容だった思う。

○　３月１２日(月)プロフェッショナル　仕事の流儀「どんな時も、そばにいる～地域医療　医師・長純一～」は、死期が迫った患者に寄り添う長さんに密着して取材をしていて、心に迫るものがあった。あと数日でこの世を去っていく患者やその家族、そこに寄り添う医師、人間の尊厳に関わる場面でずっと取材を続けられたというのは、ＮＨＫならではだと思う。ＮＨＫのこれまでの歴史と信頼、その重みをしっかり意識して今後もいい番組作りをして欲しい。

○　３月１２日(月)「プロフェッショナル　仕事の流儀」は、非常にすばらしい番組だった。人の体も心も地域も壊れた被災地での地域医療、地元の自治会にも参加し住民の暮らしを支える仕組み作りも行う、心の強さと温かさを兼ね備えた医師の姿が描かれていた。死期が迫る患者だけでなく、それを介護する家族の心のケアも考えて行動する医師の姿、日常の診療の様子や思いを丁寧に伝えていた。人の死にもカメラを向け、取材陣と家族との信頼関係、担当した方の真摯(しんし)な取り組みがあったから、ここまで映像で描くことができたのではないか。さらに、長医師の診察や日常の行動や働きを通し、今被災地が抱えている医療の問題や地域の問題も視聴者には十分伝えられていたと思う。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成３０年２月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、「ＮＨＫ経営計画　2018-2020 年度」の概要についての説明、「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「平成３０年度東北地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

委 員 長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

（主な発言）

＜「平成３０年度 東北地方向け地域放送番組編集計画(案)」について＞

○　東北の魅力を全国に発信という点はもちろんお願いしたいが、インバウンドにつながる取り組みにより力を入れて欲しい。講演会などで、外国人を受け入れるとき、外国人に好かれるような対応をしなければリピーターにならないという話を聞いた。東北はまだ受け入れ体制や仕掛けが整っていないと感じている。全国の中では、四国や北海道でインバウンドが増えているそうなので、そ

の地域の成功例を取材して番組で紹介してもらいたい。インバウンドでの経済効果は、年間４兆４千億円と大きい金額なので、東北のインバウンド増加につながるような事例を取り上げて欲しい。

また、減反政策の廃止で、東北の米農家にとって大変な年になる。昨年、クローズアップ東北「減反廃止で変わるコメの世界」でも取り上げていた話題だ。番組内で解決策を提示する際、成功して目立っている人を取り上げることが多い。それも必要なことだが、普通の農家がすぐにまねできる解決策ではない。普通の農家にもすぐに役立つ解決策を取り上げるという目線も忘れないで番組制作をしていただきたい。

○　各局が各県のために情報発信することも大切だが、もう少し隣県同士でのつながりを意識して番組作りをしていただきたいと思っている。東北地方は、青森と福島以外は３つの県と隣接しているので、その隣県同士でのミニブロックの番組を作り、両県で放送し、最終的に東北ブロックでの放送につなげる。県民の意識が県内にとどまっているというところに東北の一番大きな問題があると思うので、それが東北全体の意識に広がるような番組をＮＨＫには作っていただきたい。そうすることで、観光やそれぞれの地域の理解にも役立つのではないだろうか。

○　災害時などラジオ放送の重要性が高まる中で、地方局でのラジオ番組がまだまだ足りないのではないかと感じている。アナウンサーの伝える技術の習得はラジオでの経験が大きいと考える。ニュースを上手に読めるだけではなく、視聴者との対話する力をつけるためにももっとラジオの活用をしていただきたい。また、地域の言葉、いわゆる方言を伝承していくこともラジオの役割だと思う。

今、全国の文化ホール、文化会館では、市民参加と市民協働がテーマになっている。市民が参加し、市民の視点で番組をつくるというものがあってもいいのではないか。インバウンドにつなげる番組制作を考えているのであれば、地域のよさ、地域の課題をしっかりとつかむ必要があるので、地域の人と一緒に考えることでよりよい番組につなげられるのではないだろうか。

特に震災後、東北では自然や文化がどんどん失われてきていると実感している。スーパーハイビジョンできちんと撮って番組として残していく取り組みもお願いしたい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２０日(日)ＥＴＶ特集「カキと森と長靴と」は、映像の美しさ、音楽、音声の巧みさに感動した。カモメの鳴き声、セミの声など、自然そのままに何げなく聞こえてくる演出はすばらしかった。気仙沼でカキ養殖業を営む、畠山重篤さんの素朴さや芯の強さ、たくましさをうまく表現していた。できる限りナレーションを抑え、畠山さん自身の声、話を中心にストーリーが進む演出もすばらしかった。森にある腐葉土は、カキを育てるために非常に大切なもので、「自分も誰かにとって腐葉土になるような人生を送りたい」と言った畠山さんの言葉に非常に共鳴した。

○　１月２５日（木）英雄たちの選択　秀吉ＶＳ山城スペシャル第２夜「天下統一最後の戦い“奥州再仕置き」は、番組の流れが非常にわかりやすく、親しみやすい視点で描かれていたので、歴史好きでない人でも楽しめる内容だったと思う。今年は明治維新150年。もう一度東北の歴史というものを捉え直す番組を期待したい。

○　１月２６日（金）ドキュメント７２時間「津軽海峡　年越しフェリー」を見た。冬の津軽海峡を渡る船の旅にはやはり寂しさがあり、さまざまな人生が描かれていた。制作者の意図なのか、寂しげな雰囲気を醸し出す人が多く登場し、人生の問題を抱えて冬の津軽海峡を渡る人の印象がより強くなった。あえて明るさを求める必要はないと思うが、最終的にはもの悲しさが残るドキュメント番組だった。

○　１月２７日(土)お宝を掘り当てろ！！「イタリアアンティーク鑑定旅」(ＢＳプレミアム 後9:00～10:29)は、クイズ番組のような意外性、旅行番組のような魅力、工芸品の歴史や物づくりの現場を見て学ぶカルチャー番組の要素もあり、非常におもしろく拝見した。２人の出演者が、自分の感性で自分が欲しいと思うもの、これから大事に使いたいと思うものに目を輝かせながら探している様子に好感を持った。視聴者を伸びやかな気分にさせてくれる買い物の情景で、くつろぎながら見ることができた。ただ、番組が９０分と長かったので、２～

３回に分けて、もう少し短くし、現地の観光案内も入れて放送してもよかったのではないか。

○　１月２７日(土)ＮＨＫスペシャル　未解決事件Ｆｉｌｅ．０６「赤報隊事件」(総合 後7:30～8:43)と２８日（日）の同番組「赤報隊事件　戦慄の銃弾　知られざる闇」を見た。朝日新聞阪神支局の襲撃事件から３１年、事件を知らない人も増えてきた中で、第１夜はドラマ仕立てで、実際のニュース映像も織り込んで、事件を知らない人にとっても事件の全体像を容易に把握できる番組だった。第２夜は、犯人像に迫るドキュメンタリーで、非常にリアルな説得力があった。新聞・テレビの記者にとってあの事件は本当に衝撃的で、記憶が今も鮮明に残っているが、一般の人は記憶が薄れているのではないか。そういう風化にあらがうように今回のような番組がつくられたことをまず称賛したい。被害者の関係者の無念や歯がゆさを丁寧にすくい上げていた。制作者の熱意や事件への怒りがストレートに伝わってきた。報道の役割は何か、言論の自由とは何か、あの事件を生み出した背景、社会の成熟度、いろいろな問題を視聴者に真正面から問いかけるような非常に重い内容の番組であった。

○　１月２８日(日)目撃！にっぽん「おにぎりで革命を起こせ～減反廃止・農家はいま～」を見た。自分で育てた米で作るおにぎり専門店を次々にオープンさせて注目を集める秋田の農家、鈴木貴之さんの活動が、地道に取材されてとてもよくまとまっていた。地元の農家の方たちと信頼関係を築き上げて、減反政策の廃止で減収になろうとしている米農家をどう励ましていくか、自分がどうやってなりわいを立てていくかという点をきちんと描いていた。印象的だったのは、東京ドームで、鈴木さんが売るごはんを農家の佐藤賢司郎さんが「おいしい」と言って食べるシーン。次の世代に米づくりがバトンリレーされているということが伝わり感動した。

○　１月２８日(日)「目撃！にっぽん」は、農業を家業ではなく職業として考える、もうかる農家の先駆者として立ち上がる鈴木さんの独自の考え方がよく伝わった番組だった。農家の佐藤さんが鈴木さんを全面的にバックアップする様子が描かれ、鈴木さんが成功していく背景がよく分かった。同じ農業に携わる人間としては、こういうやり方があったのかと、参考になる部分と悔しく思う

部分があった。鈴木さんのように成功した例を取り上げていくことも大切だが、普通の農家や高齢の農家が、減反政策の廃止後も安心して米作りができるように、さまざまな角度からの番組作りをお願いしたい。

○　１月３１日(水)偉人たちの健康診断「天下人はなぜキレるのか？豊臣秀吉」は、最近の医学的見地から、脳内物質のセレトニンの不足で怒りっぽい秀吉へと変貌したことやビタミンＢ１不足で脚気になったことが死因になったことが紹介され、興味深く見た。秀吉が若いときに食べていたのは、雑穀や田んぼで獲ったドジョウ、そういうものが陽気で前向きな性格と生活をつくり出していたという推論は、今の栄養学から見ても非常に説得力があるし、天下人になるにつれて不健康になっていったという過程を見ると、番組の狙いとは別に、秀吉という人物の悲哀をも感じさせるような内容になっていた。歴史上の有名な人物の病気を素材にしているので、現代の私たちが見ても印象深く、非常に記憶に残りやすいいい番組だった。

○　２月１日(木)のクローズアップ現代＋「思いがけない退去通知　あなたも住宅を追われる!?」は、身近でもう一刻の猶予もない課題だと実感させられた。「もう宿無しは嫌だ」「長生きしたのが悪かったとつくづく思う」「連帯保証人がいなくて首でも吊ろうかと思った」など、インタビューにインパクトがあった。対応策としてＮＰＯの事例が紹介されたが、限定的なことであり、国の政策として住宅政策をきちんとやっていくことが大切だと感じた。

○　２月２日(金)「ものほん～ウワサの東北見聞録～」(総合 後7:30～8:43)を見た。番組冒頭に仙台局の新放送会館の夜の様子が映し出され、白と黒の市松模様がくっきり浮かび上がりとてもきれいで、シンボリックな会館の雰囲気が伝わってきた。黄金のセットが豪華な作りで、わくわくしながら見ることができた。ただ、いすだけが普通だったので統一感を出してもよかったのではないか。福島の黒沼神社で行われる羽山ごもりという祭りは、このような祭りがまだあったのかという驚きと興奮と興味を持って見た。裸参りの紹介の際、テロップが「４８手参り」となっていたが「四十八手参り」とした方が雰囲気に合っていたと思う。祭りのクライマックスで、平成３０年の託宣を受けるという言葉が出てきた後に、ナレーションでは「2018年の村の運命はどうでしょう」と

なっていたが、平成３０年に統一した方が良かったと感じた。ＶＴＲのナレーションが独特の語り口の女性で、神秘的な効果があったと思う。スタジオの進行はサンドウィッチマンの二人が中心で、女性アナウンサーがあまり目立たなかった。もう少し存在感を出す演出にするなど工夫があってもよかったのではないか。

○　２月２日(金)「ものほん～ウワサの東北見聞録～」は、サンドウィッチマンなど､東北ゆかりのタレントが出演したバラエティー番組で非常に楽しかった。興味深かったのは、壇蜜さんが弘前のカミサマに出会い、口寄せが成功し、壇蜜さんが死んだ祖父と対話する内容だった。メインスタジオの他に、８Ｋスーパーハイビジョンの大型モニターの前から、あばれる君が各地のお祭りを紹介するなど楽しい演出がたくさんあった。ＶＴＲのナレーションが重々しい語り口で番組の演出に合っていた。担当したのは仙台局のアナウンサーだったのだろうか。全体的にとても面白かったので、次回作にも期待したい。

（ＮＨＫ側）

ナレーションは、東京にある声優のプロダクションに所属する横尾まりさんという方にお願いした。

○　２月２日(金)「ものほん～ウワサの東北見聞録～」は、新会館から生放送ということで、興味も持って見た。司会がサンドウィッチマンで、笑いの中に安定感が出ていた。パンサーの尾形貴弘さんが羽山ごもりでマイナス５度の中で裸になってお参りする姿が好印象だった。インバウンドということで、外国人に東北の良さを伝えることは大切だが、今回の番組は、我々にも新たな東北の魅力を発見させてくれた｡まだ東北には知られていない魅力があると思うので、今後も期待したい。

○　２月４日(日)ＢＳ１スペシャル「ブラックリスト～韓国の“言論弾圧”は何を意味するのか～」(ＢＳ１　後10:00～10:49)を見た。イ・ミョンバク政権のときには８０人程度だったブラックリストが、パク・クネ政権のときに１万人以上にまで増えたということに対する検証がなかったと思う。なぜそんなに増えたのか、はっきりした理由は描かれていなかった。また、ブラックリスト作成

の直接的なきっかけが韓国のテレビ局の誤報だったという内容について、誤報問題の責任、なぜ誤報が起きたのかという点はあまり追及されていなかった。マスコミの責任も大きな要因になっていると思う。ＮＨＫもマスコミとしてそういう切り口で検証して欲しいと感じた。

○　２月４日(日)釣りびと万歳・選「海底を歩く魚！？ホウボウを追え！～おののののか　愛知・田原へ」を面白く拝見した。もともと釣りに全く興味はないが、魚の生態もよくわかった。荒波の中で２日間撮影していて、苦労が感じられた。ＮＨＫならではの番組だと思った。

○　２月８日(木)クローズアップ現代＋「ピョンチャン五輪　極限への挑戦　スピードスケート小平奈緒」を見た。５位に終わったソチオリンピック後、オランダでの修行の様子など、自分の弱点を克服する小平選手を丁寧に取材していた。ソチオリンピックの敗北から取材を続けていたＮＨＫの懐の深さを感じた。

○　２月８日(木)ＳＯＮＧＳ「冬の熱戦を盛り上げた歌」は、オリンピックの感動シーンとその背景を歌と共に紹介していてとてもいい番組だった。中でも1971年の「虹と雪のバラード」は、中学生の時の合唱コンクールで歌った曲だったので、その頃を思い出しながら聞くことができた。ただ、それ以外の冬のオリンピックをイメージした曲が私の心にあまり残っていなかった。ピョンチャンオリンピックのテーマ曲も私の中ではインパクトが薄く、心に残らならないのではないかと感じている。

○　２月９日(金)「ひるはぴ」(総合 前11:30～11:54)を見た。仙台局新会館のスタジオからの放送で、スタジオの外が見えるように作られており、とても明るくて雰囲気がいいと感じた。番組内で新会館の外観を仙台市内の様子と一緒に撮影して紹介していたが、とてもきれいだった。どこから撮影しているのか聞きたい。「とうほく観光キャラバン」というコーナーでは、休暇村の情報を伝えていてどれも行ってみたいと思わせる内容だった。しかしスタジオに食事を並べて紹介する演出があったが、どれも冷めていておいしそうに見えなかったのが残念だった。ＶＴＲの中で紹介したほうがよかったのではないか。「とうほく観光キャラバン」のロゴの文字の中に桃やりんご、サクランボなどがデザイン

されていた。その中にある黄色いものが何なのか分からなかったので、ぜひ教えてほしい。また、交通情報を交通情報センターの方が伝えていたが、職員の顔を映すよりは、画面でぱっと見てわかるような地図、渋滞情報などを映した方がいいと感じた。

（ＮＨＫ側）

「とうほく観光キャラバン」のロゴに入っている黄色いものは、松島の月をイメージしている。

（ＮＨＫ側）

仙台局の外観を映していたカメラは、臨時で仙台局のそばにあるケーブルテレビ局のビルの上に設置したものだ。

○　２月８日(木)「明日へ１ｍｉｎ．君に見せたい東北がある～冬　福島・猪苗代　裏磐梯編～」(総合　前4:10～4:11)を見た。東北だけで放送するのはもったいない。もっとたくさん全国放送し、東北に遊びにおいでというメッセージを伝えてほしいと思った。

また、少子高齢化や人口減少などの課題を今後ぜひ番組で取り上げていただきたい。

○　ラジオ第１の「ラジオ文芸館」と「音楽の泉」をよく聞いているが、とてもいい番組だ。今、活字離れが言われている中で、子どもたちに名作を味わってもらえるような番組を夜の７時台、８時台にラジオで放送してほしい。番組で興味を持ち、本を読んでみようというきっかけになると思う。

○　連続テレビ小説「わろてんか」を見た。ヒロインのメークが年を重ねても若いままで、非常に違和感がある。メークにも時代の流れ、時の流れを感じられるようにしてほしいと思った。

○　大河ドラマ「西郷どん」を見た。方言が多用されていて何を言っているのか分からないことがある。主人公を演じている鈴木亮平さんが役のイメージに合わせて体重をコントロールしているとのことですばらしいと感じている。西郷

隆盛があそこまで真っすぐで単純な人間だったのか、少しやり過ぎではないかと思うこともある。島津斉彬役で渡辺謙さんが出てきたときに、大河ドラマ「独眼竜政宗」を思い出した。ぜひまた伊達政宗を題材にしたドラマをお願いしたい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成３０年１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、クローズアップ東北「災害復興　新しい街は問いかける～三陸　津波被災地からの報告～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、２月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発(株)　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)

(主な発言)

＜クローズアップ東北

「災害復興　新しい街は問いかける～三陸津波被災地からの報告～」

(総合　１月１２日(金))について＞

○　もともとあの地域には、過疎と高齢化という問題があって、そういう地域の課題に加えて震災復興と新しいまちづくりをしなくてはいけないという問題が重なってしまったために錯そうして原因が見えにくい。限られた時間で、大槌町の場合は平均２．２メートルのかさ上げをして中心地区を新しく建設したという。その自治体の苦労と努力は認めていいと思った。中心市街地をゼロから作り直すというのはかなり難しい事業で、しかも人口減少という厳しい現実が

背景にある。先月事業が完了して、やっとスタート地点に立ったと捉えたうえで､いろんなアイデアを募って紹介する方法もあったのではないか｡その上で、今後とるべき空き地対策について提案があると、番組が少し明るく前向きな印象になったのかなと思った。

○　この番組を見て２つ考えることがあった。１つは、土地を持つということはどういうことなのか。この小さな国土の中で、私たちが子供に引き継いでいくのは、土地を守り、家を守るという使命感。戦後、農地改革で自分の土地を苦労して手に入れた世代がいなくなり次の時代に移ってきた。そうした中で、土地を使って社会にどういう貢献をするのか、そういう意識が少なくなってきたと思う。２つ目は、法律のこと。番組にも出ていたが、今の法律は平時を前提に決められている。今後３０年で大規模災害が起こり得る可能性大ということもあり、有事の時に適用されることを想定した法改正を急ぐ必要がある。土地の価格というのが年に１回発表されて、今年は銀座が１平米当たりいくらというようなことが騒ぎになるが、例えば災害時にはこれだけの価格になるなどを決められれば、今後どう使っていけばいいのかなど、参考にできるのではないかと思った。

○　建設関係でいうと、復興はもう一段落していると言われていたが、この番組で、現実として土地の課題が多いということを知ることができた。震災復興の課題の一面を浮き彫りにしてくれた、いい番組だったと思う。今回のテーマである空き地の問題には、番組ではいくつか原因があったと言っていた。まず土地区画整理事業を使ったこと、かさ上げ工事が遅れたこと、そして、人口減少・過疎化の問題。人口減少については、大槌町長のインタビューで、震災後すぐに人口減少が進んでいたという話があり非常にわかりやすかった。一方、かさ上げ工事が、なぜ遅れたのか。土地区画整理事業に伴う遅れなのか、建設業界的な遅れなのか、あるいは住民問題の遅れなのかが、少しぼんやりしていた。記者のコメントに少し後ろ向きの言葉があったが、前向きにやりましょうという内容で閉めたほうが被災地を応援しようという気持ちになれるのではないか。前向きになれる提言的な番組をこれからも作っていただきたい。

○　率直な感想として、大槌町の中心市街地のかさ上げ工事が必要だというのは

よくわかった。国が 159 億円も支出しているにもかかわらず、被災した当事者の苦しみとか、小さな町自体が翻弄されているというような現実に驚きや矛盾を感じ、ちょっとむなしい感じがした。番組は一般の人が１回見ただけでは非常にわかりにくい。ちょっと詰め込み過ぎの感じもした。６割の土地が残っているという事実はあるが、根本の原因と対策が描けずに終わってしまっている。報告だから仕方がないのかなと思ったが、ＮＨＫの番組で国の制度への疑問を投げかけたり、国民に訴える、というのはとても大事なことだと思う。空き地になった原因について、金野智代美さんという女性の方の土地買い取り制度の期限の問題、それから長期に及んで花巻で自宅をつくった太田佑一さんの２人の例を通じて方がわかりやすく代弁してくれたことは私たちの胸に届いた。

○　１回目に見た時は、住んでいた人たちはどこに行ったのか本当によくわからなかった。もう一回見て、結局戻りたくても戻れなかったことがよくわかった。６年が経てば０歳の子が小学校に行くし、小学校の子は中学生だし、小学校３年生の子は高校生になる。それぐらい生活基盤が移ってしまうと、自分がかつて住んでいた土地でも、もう戻れなくなるのだと考えた時に、全く同じ現象が福島県内のあちらこちらで起きていることに気づかされた。確かに復興支援予算の巨額な資金が投じられているが、そこで暮らしていた人たちにしてみれば元に戻してほしいというのが最大の願いだと思うし、それはもうお金では代えられない復興支援ではないかなと思った。159 億円のむなしい投資や、あるいは６割が空き地になっているという現実を、私たちに忘れさせないようにと伝えた貴重な番組だった。

○　この番組を見て、私は２度被災したという印象を受けた。一度はもちろん東日本大震災の被災。それからもう一つは、乱暴な言い方で申し訳ないが、復興という名の被災。区画整理事業という制度を使って、町長がいみじくも「もう動いてしまったのだから止められない」という表現をしていたが、なぜ止められないとおっしゃったのか。止められなかったということの中身まで伝えるのは、３０分の番組では非常に難しいとは思うが、出演していた記者はこの切なさを抱えながら番組を作ったんだなと感じた。復興という名で暮らしを収奪されていく、被災地の暮らしを収奪されていく。お金を使うために収奪されていくという矛盾点というのを、この番組は提起したかったのではないかなと思った。

○　すごく難しいテーマだなと思い番組を拝見した。個人の土地の約６割で土地利用のめどが立っていないという課題の説明はとてもわかりやすかったが、大槌町の中心市街地の図については、ちょっと分かりにくく入ってこなかった。土地区画整理事業の説明がアニメーションでわかりやすかったが、手順の説明は漢字が並んでいる状態で、見ていて抵抗感があった。災害復興というのは、スピード感を重要視するということだが、肉親を亡くされてなかなか決められない方などもいらっしゃって、そのジレンマについて難しさがよく伝わってくる内容になっていた。東大の教授のお話で、平時の制度を災害時に適用していること自体に無理があると言っていたが、ではどうしたらいいのかというところまで聞きたかった。しかし恐らくその解決策は、まだないと思う。しかし、ないならないで、ないということをきちんと伝えるべきだった。後半、アナウンサーと記者が話す場面で、２人で同じアングルのままずっと話している時間が長く、気になって内容がつかめなかった。

○　復興は被災地の人にとって早く元の生活に戻りたい、戻してあげるということが大事だと考えていたので、その陰でこうした問題があるということを知らなかった。真面目に３度見たが、しっかり見るとちゃんとストーリーになっていて、組み立て、構成がしっかりと描けており、問題提起など非常にわかりやすかったと思う。ただ、全体的に内面まで掘り下げているわけではなく、失敗例や事例が並んでいて、住民の方の本心まで伝わる言葉が余りなかったように感じた。戻りたいが戻れない方の理由はお金なのか、気持ちなのか。その辺が曖昧だった。そして、実際に戻ってきている住民の方たちはどんな思いで戻ってきたのか、よくわからなかった。最後に東日本大震災復興基本法がでてきた。締めの言葉に、「単なる復興にとどまらない活力ある日本の再生を視野に入れた対策」という内容で締めくくられていたが、問題提起の一方で最後は法律で締めるという、何か矛盾みたいなものを感じた。

○　津波被災地の復興には、高台移転や土地のかさ上げなど、大規模土木工事が必要不可欠だ。そのため住宅再建には長い年月が必要になってしまう。いまだ仮設住宅に住む方々も少なくなく、これが現実だと思う。多額の税金を投入して完成した新しい土地だが、人間の人生において６、７年の時間はあまりにも長い。そ

の間、当然のようにさまざまなことが各個人には起き、最初はこの土地に家を建てたいと思っても、さまざまな理由で気持ちが変わるというのは仕方ないことだと思いながら番組を見た。　今回は大槌町をメインにしていたが、同じような問題は岩手に限らず、三陸沿岸のどこにでもある問題だと思った。宮城の女川町に私もよく行くが、女川はどうなっているのかと思って聞いたところ、空き地は全体の恐らく１割から２割ということだった。復興計画を何度も見直し必要とされる宅地を造成してきた結果だという。うまくいった事例もあるので、情報交換、情報の共有がうまくできなかったのかな、という思いで見た。最後に、番組では何か暗く終わってしまった印象も受けたので、その辺にも踏み込んでもらうとよかったと感じた。

○　都市の再開発に用いられる「土地区画整理事業」を使わざるを得ず、土地のかさ上げに時間がかかるうちに住民が町外へ出て行ってしまった。計画変更には更に時間がかかるため空き地が増えることがわかっていても進めざるを得なかったという状況にある、ということがこの番組で初めてわかった。震災後、人口減少が更に加速することが予想されている中で、なぜ時間とお金をかけて大規模なかさ上げ工事をするのだろうかと思っていた。この番組で町役場は人口減少のスピードとかさ上げ工事のスピードとの競争になり、空き地ができても工事を進めざるを得なかったという現実が良く分かった。今回の津波被害の復興に合ったやり方はなかったのか、国は何らかの手をもっと早く打てなかったのか、という思いが残った。最後のナレーションで、東日本大震災復興基本法を紹介した中で、「単なる災害復旧にとどまらない活力ある日本の再生を視野に入れた抜本的な対策」という内容が大変むなしく感じられた。このナレーションによって暗に国の政策を批判していると思われたが、もっと明確に言及すべきではなかったか。どうしてこのようなことになったのか、誰に責任があるのかの指摘が番組内では「やんわり」「何となく」「遠まわしに」言われているようなすっきりしない感じが残った。

（ＮＨＫ側）

今回、盛岡で記者やディレクターやいろんな部署と共同して制作した。指摘があったように、問題提起はできたと思うが、具体的な対策までは、暗中模索しながらもなかなか見えなかった。ただ、実際に

まだ復興の途上であり、今年になって大槌と陸前高田で意向調査の結果、利用予定のない土地が６割近くに上るということが見えたということをきっかけに取材を始めたので、その現状と、なぜそうなったのかということ、さらに、対策として空き地バンクが今後どう見えてくるのかという点に焦点を絞らざるを得なかった。具体的にどういう形で復興を考えていったらいいのかという点は、次への宿題と思っている。委員から指摘があったように、国が159億円を投入したということについて、やはり国民の税金を使って取り組むことなので、その使われ方や結果について、事実をしっかり伝えて、今後の対策や次の災害への備えを考えるうえでの一つの題材となるのではないかという思いで制作した。今後も取材を進めていくので、災害時における土地造成のあり方など、取材を続けていろいろと提示していければと考えている。大槌の場合は、早く工事を進めたいということで、計画の策定を急いだ。この部分で非常に難しい判断があったという意味で、今後私たちも各地の事例など取材を進め、比較検討しながら伝えて行きたいと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　１月５日(金)のクローズアップ東北「ふるさと～開拓に生きた百歳のメッセージ～」は、しぶとく取材された番組だと感じた。岩手県にも戦後開拓で入植された方は多く、ブランド牛乳を生産するなど活躍している。番組では、昨年100歳で亡くなった山上忠治さんを中心に、多くの脱落者を出した集落と、優れたリーダーシップで脱落者が少なかった集落を対比的に描いていた点がよかった。開拓とは何かを知らない人もいるので、その全体像まで踏み込んでいればより分かりやすかったのではないか。

○　平成２８年１１月１１日(金)のクローズアップ東北「おらほのリンゴをオリンピックへ」では、グローバルＧＡＰ取得に取り組む高校生が紹介されたが、この番組をきっかけに、自分も指導員の資格を取得した。身近な話題であり影響される方も多いと思うので、今後も積極的に紹介してほしい。

１２月２０日(水)の「ＷＡＮＩＭＡ　１８祭　１０００人のシグナル」（総合

後10:00～11:15)は感動的な番組だった。大人でもあり子どもでもある1,000人の若者たちが悩んだり迷ったりしながら一つの音楽を作り上げた経験は、彼らが大人になってからも胸に残り続けることだろう。構成に関してだが、本番に至るプロセスがやや長いと感じた。リハーサルや当日の表情、終わった後の若者たちのことばをもっと見たかった。

○　１２月３１日(日)の第６８回ＮＨＫ紅白歌合戦「夢を歌おう」は今年もすばらしかった。オープニングが斬新で、総合司会の内村光良さんは安定感があった。全体的に温かい気持ちで安心して見ることができた。歌手の中では特に安室奈美恵さん、竹原ピストルさん、石川さゆりさん、ゆずのみなさんが真剣に気持ちを込めて歌っているのが見ている側にも伝わってきた。１年を家族そろって振り返る番組として、話題となった人やドラマを織り交ぜた演出で親しみやすく伝えている。価値観や好みも変化しており、他局の番組に流れる視聴者がいてもそれはやむをえないのではないか。

○　１月１日(月)の「正月時代劇　風雲児たち～蘭学革命篇(らんがくれぼりゅうしへん)～」(総合 後7:20～8:49)は、「解体新書」を出版するまでの、杉田玄白や前野良沢らの苦労が、コミカルな雰囲気の中にも緊張感を持って描かれ、ひきつけられた。完璧主義の前野と、世に早く出したい杉田の対立はスリリングではあったが、最後の抱擁シーンでは互いを尊重し合っていたことが分かり感動的だった。杉田はオランダ語がほとんど分からずにほとんど前野が翻訳したエピソードや、平賀源内や林子平、田沼意次など歴史上の有名人が多く登場したことで、歴史にもっと興味を持つことができた。子どもの頃、漫画を入り口として歴史を知ったように、こうした番組のシリーズ化を期待したい。「真田丸」に出演していた俳優が多く出演しており、当時を思い出しながら見た。

　１月１日(月)のＮＨＫスペシャル「平成タイムトラベラー～あなたと私の３０年～」(総合 後9:00～9:59)を見た。これから平成を振り返る番組が多くなると思うが、先んじてこうした番組を制作し元日に放送した企画力と機動力に感心した。芦田愛菜さんとロバート・キャンベルさんが都内をバスで巡る演出はリラックスして見ることができたし、芦田さんの明るく立派なコメントには、次世代への希望を感じることができた。１時間の中に多くの出来事が詰め込まれており、平成は大変な時代だったと再確認できた。政治の話題ではＰＫＯやイラク派兵の

話題に時間を多く割いていたが、拉致被害者問題やミサイルなど北朝鮮を巡る動きもより取り上げてほしかった。また前向きな話題についても、次回以降でもっと触れてほしい。「ＮＨＫスペシャル」が平成元年に始まり、これまで3,000本以上放送してきたことも紹介されたが、平成の記録映像として大きな役割を担っていると思う。

○　１月１日(月)の激動の世界をゆく「北朝鮮」（ＢＳ１　後9:00～9:50、10:00～10:49)は、インタビューを通じて北朝鮮の実態を浮き彫りにしていた。各国で捉え方が異なり、ロシアでは北朝鮮は脅威ではないとされていた点に強く興味を持った。制裁圧力を高めることは国民の団結力を高める結果を招くとして賛同できないという意見はなるほどと思う。アメリカにはトランプ大統領を支える優秀なブレーンが複数いることが分かったし、日本にもアメリカへの追従にとどまることなく、もっと期待される役割があるはずだとの声が印象的だった。金正恩委員長はしていることは悪いがそれほど愚かではないとの指摘は鋭かった。

○　１月１日(月)の大人のピタゴラスイッチ「想像力としかくい穴」（Ｅテレ　後11:00～11:30)は、夜の放送だったが、録画して家族で見た。身近な材料を使った実験では、どんな動きになるかを想像して家族がそれぞれ意見を言いながら見ることができ、正月に合った番組だった。大人向けということで、説明も遠回りになり過ぎず理解しやすかった。「ビーすけと黒玉王子の大脱出」は、完成度が高く見入ってしまった。

○　１月５日(金)のドキュメント７２時間・選「駄菓子屋・子どもたちの小さな宇宙」はよくできた番組だ。ＳＮＳやゲームに没頭する子どもたちが増える中、駄菓子屋に集う人々の姿を見ると、現代社会に欠けているものがここにあるかもしれないと感じた。番組は３年前に放送されたものだが、すぐれた番組は何度放送してもいいと思う。

○　１月７日(日)に始まったプレミアムドラマ「平成細雪」は、照明と撮影の技術によるものだと思うが、ロケ地の古いホテルや室内の調度品、蒔岡家の四姉妹の和服が、まるで映画フィルムを思わせるような質感で映し出され、画面に見入った。その一方で、演出や音楽がなぜかコメディタッチのシーンが多くあり、原作

や映画、舞台に親しんだ人には違和感があったかもしれない。時代設定がバブル崩壊後の平成になっているが、１回目と２回目を見た限りでは、その設定に説得的な理由がないように感じた。力の入ったけんらん豪華なドラマであれば、むしろ奇をてらわずに原作を忠実に再現する方向性がよかったのかもしれない。年末に脚本家の早坂暁さんが亡くなり、追悼の意味で「夢千代日記」が今月再放送されたが、このドラマを演出した深町幸男さんが「細雪」を手掛けたらどうなっただろうかと考えながら見た。

○　１月８日(月)の「ぽかぽか家族に福きたる！平野レミの早わざレシピ　第５弾」(総合 前8:15～9:24)を、慌ただしくも楽しく見た。調味料が入っていた容器をだし汁の入った鍋の中でゆすぐなどの独特な調理法を実際に試してみる方はいるのだろうか。

○　１月８日(月)のあの日　あのとき　あの番組「もう一度見たい！荒川静香　感動の金メダル」(総合 後1:50～3:00)では、彼女の苦労や裏話を知り、金メダルの重さをより実感した。中でも、オリンピックの２か月前に曲やコーチを変更したエピソードには、彼女の強い覚悟が感じられた。番組では、ピョンチャンオリンピックで活躍が期待される日本人選手や注目競技についての紹介も充実しており、オリンピックに向けた盛り上げをはかる番組になっていた。

○　１月８日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「いつだって、人生は楽しい～ワイン醸造家・仲田晃司～」は、小説のようなドラマチックな展開で番組に引き込まれた。フランスが誇るブルゴーニュのワインを日本人が現地で作ろうという仲田さんの挑戦には、嫌がらせなどの大きな困難が伴ったが、陽気な性格で乗り越えていく姿に声援を送りたくなった。ブルゴーニュは名醸地と呼ばれる地域の中でも決して恵まれた土地ではなく、努力を積み重ねて今の地位を築いたとのことだが、仲田さんの情熱を見ていると、それも分かる気がする。

○　１月１０日(水)の「４００年後の真実　慶長遣欧使節の謎に迫る」(ＢＳプレミアム 後9:00～10:29)は、渡欧したことは知っていたが帰国していたことは知らなかったので、勉強になる内容だった。謎というより悲劇に迫る番組だったと思う。ナレーションを担当された俳優の方は、強調したい言葉がよく伝わってこ

なかった印象があったので、より上手な語りがあれば視聴者により迫る番組になったのではないか。

○　１月１３日(土)のアスリートの魂「崖っぷちからの挑戦～スケルトン　笹原友希～」は、冬季オリンピックを前にしたタイムリーな放送で、アスリートの言葉の重みや番組の構成が感動的だった。中でも「オリンピック選手でなければただのおっさん」だと自分を追い詰める姿が印象的だった。笹原選手は代表に選ばれず残念だったが、秋田市で一人競技を続ける姿に勇気づけられた人も多いことだろう。競技人生を幸せで悔いはないと振り返っていたのが救いであり、今後を応援したい。

○　１月１３日(土)の「駅伝のオールスターゲーム　全国女子駅伝・男子駅伝スペシャル」(総合 後5:00～6:00、6:05～6:43)は大会を盛り上げるいい番組だった。この季節には多くの大会が開催されるが、２つの大会の歴史と伝統がよく分かった。タレントと元選手の組み合わせによるスタジオの進行も楽しかった。中継地点でのハプニングや選手に双子が多いといったエピソードも取り上げられ、長い番組だったが飽きずに見られたし、大会をより楽しむことができた。

○　１月１４日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク　第４集「万病撃退！“腸”が免疫の鍵だった」は、腸に集まる免疫細胞の働きが分かりやすく映像化されており、教材としても使える内容だ。海藻などの食物繊維を消化する酵素を日本人が持っていることや、食生活が欧米化したことでアトピーが広まったとする研究成果は興味深い。このシリーズは「“腎臓”が寿命を決める」「“脂肪と筋肉”が命を守る」など、コピーがキャッチーで思わず引き込まれるし、使われるＣＧも分かりやすく、実際に身体の中を見ているようだ。

○　１月１６日(火)の「大相撲初場所」の放送中に行われた、元幕内の双大竜の引退会見で、同じ福島出身の三瓶宏志アナウンサーがふるさとや震災に対する思いを泣きながら尋ねた部分では、自分も思わずもらい泣きしてしまった。お二人の思いがよく伝わってきた。

○　１月１６日(火)に再放送されたハートネットＴＶ「まいどさんが待っている」は感動的な番組だった。限界集落における移動販売は食料補給のまさに命綱だ。施設に入っている夫のためにバレンタインデーのチョコレートを求める妻の願いに応えるエピソードには胸を打たれた。家族の歴史や思いが詰まった家を出ることがどれほど大変かと考えさせられた。震災のときに一時帰宅した福島の住民が持ち帰ったのはアルバムや位はい、賞状など、お金で買えない物が多かったとも聞く。便利さはお金で買えるものだが、その結果、人との付き合いを避けたいと考える人が増えてきたら、人情や他者の愛を感じられない世の中になってしまうのではないか。地味な番組だったが、市井の人間の声に耳を傾け、社会の風潮に警鐘を鳴らすＮＨＫだからこそ制作できる番組だった。

○　１月１６日(火)のクローズアップ現代＋「現金が捨てられる！？～“忘れもの”急増の謎～」では、遺品整理の現場で見つかる多額の現金が取り上げられた。番組は、いわゆる終活の大切さを訴えるとともに、遺品整理を業者に任せきりにせず自分でしようと考える人が増えるきっかけになるのではないか。

○　１月１７日(水)のＮＨＫスペシャル「遺児たちのいま　阪神・淡路大震災２３年」(総合 後10:25～11:15)は、同年代の方が取り上げられたこともあり、当時を思い出しながら見た。東日本大震災の時もそうだが、遺児は災害が起こった場所から離れた所にいる祖父母や親戚に引き取られるため、一人で悩みを抱えてしまう。彼らの苦しさがよく伝わってきたし、アンケート結果を用いたところも説得力があった。震災を経験したことや生きる意味を考えながら日々を過ごす彼らの姿を見て、親世代への防災教育も今後より必要になってくると感じた。阪神・淡路大震災は、心のケアの必要性が強く叫ばれた災害でもあったので、これからも彼らの人生を追いかけ、紹介してほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「遺児たちのいま　阪神・淡路大震災２３年」を見た。東日本大震災では、多くの遺児が親戚に引き取られる中で、個々の状況が見えづらくなった。頼る親戚がおらず里親のもとに身を寄せた例も含めて、災害遺児の全体像を知りたいと思った。

○　「西郷どん」は、番組としてはおもしろかったが、これまでに西郷隆盛が登場

した大河ドラマと比べて、歴史上のできごとをここまで脚色していいのだろうかと思う部分もあった。演出の問題かもしれないが、島津斉興の存在感が期待より薄かったことや、島津斉彬が立派過ぎる点は気になった。

○　原作の林真理子さん、脚本の中園ミホさんの女性同士のコンビで「西郷どん」をどう作り上げていくのか、期待と不安がある。極端な作り話にならないよう、歴史考証を踏まえてフィクションをどの程度取り入れるか判断してほしい。東北では、会津藩や奥羽越列藩同盟といった歴史的な経緯から、西郷隆盛に対する意識が他の地域と異なる部分もあり、このドラマがどう受け入れられるのか心配する気持ちもある。１月１２日(金)の「歴史秘話ヒストリア」は大久保利通を取り上げたが、大河ドラマと連動したいいタイミングの放送だった。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成２９年１２月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、クローズアップ東北「減反廃止で変わるコメの世界」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、１月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜クローズアップ東北「減反廃止で変わるコメの世界」
(総合　１２月８日(金))について＞

○　番組の収録場所が山形にある廃校を利用した施設で、ゲストも山形出身の若い女性２人だったので、山形を全面に出した構成になっていた。ゲストの２人ともに、初々しい感じだったが、司会のアナウンサーが上手にコメントを引き出していたと思う。ゲスト２人が減反を知らないことに驚いたが、減反について丁寧に説明されていて良かった。

ブランド米が減反廃止に関係していることを私はこの番組で初めて知った。番組の中で「米がしこう品になってきている」ということや味や食感の分布を示す図の解説があり、そのような観点で食べ比べてみたいと感じた。ただ、それぞれの米に合う料理についての説明が、もう少し一般家庭を意識したものであればより良かったと

思う。

西川町の農家が、消費者のニーズを捉えてお客さんが欲しいものを提供していくと話していたのが印象に残った。農家も作るだけではなく、どう販売するか工夫しなければいけない時代。年々、米の消費量が少なくなっていく中、減反廃止が日本の米市場にさまざまな営業努力を生む、そして米の魅力の再発見につながり消費向上につながることを願う。

○　山形県内の話が中心だったので、他県の農業関係者や一般の視聴者はどう思ったのか気になった。

番組の構成については、廃校を利用した施設で黒板も使い授業に仕立て、ゲストも若い女性２人だったので、硬くなりすぎず非常に見やすかった。また専門家ではなく記者が解説していたこともよかったと思う。しかし、記者の紹介で趣味がラーメン店巡りという部分はいらなかったのではないかと感じた。内容は、減反が何で廃止されるのか、その影響について分かりやすく説明されていて、若い人にも見やすい番組になっていた。米がしこう品になってきたという言葉が印象深かった。味や食感の分布を示す図もとても分かりやすくかった。この番組を見た人が米をしこう品というよりも主食として食べていくようになってほしいと期待しながら見終わった。

○　スタジオではなく廃校を利用した施設での収録、山形出身の若い女性２人をゲストにして授業のような設定で番組を進行していたので、難しい問題をやさしく、軟らかく伝えようという演出側の意図が感じられた。内容は、山形県で平日の午後６時１０分に放送している「やまます」の中で何回かに分けて特集した企画を一つにまとめたという印象だった。

近年のブランド米の流行と販売方法の多様化というものが相まって、米がしこう品になってきたというフレーズが非常に興味深かった。その中で、東京のデパート地下にある米売り場が紹介されていたが、もっと庶民的な店での取材も含め東京の一般的な消費者がどういう購買行動で米を買っているのか知りたかった。

若い人たちは知らないと思うので、反、町など田んぼの広さの単位についても紹介があってもよかったのではないか。

○　クローズアップ東北という番組であるのに、山形の話題ばかりにクローズアップしていいのかと率直に思った。

味と食感の分布を示す図を見て、東北はバリエーション豊かな米作りがされている

地域だということを改めて感じた。図には値段も入れてもらえると消費者にとって大きな判断材料になったのではないだろうか。

番組の進行は教室での授業という設定で、先生役にアナウンサーと記者、生徒役に若い女性の２人という構図。無知な２人の女性によく分かっている男性２人が仁王立ちになって説明しているように見えてしまった。もう少し考えて設定を立てた方がよかったのではないだろうか。ただ、内容は具体的で分かりやすかった。

○　山形県の話題ばかりではなく、他の地域の情報も交えて伝えて欲しいと感じた。また、どのような年代の視聴者をターゲットにしていたのか、ゲストに若い女性が出てきて軽い雰囲気で進行されてがっかりした。ゲストが２人とも山形出身で、しかも同年齢。どこであの２人を差別化しようと思ったのか分からなかった。先生役の記者は必要だったのか、司会のアナウンサーだけで十分だったのではないかと感じた。

減反政策が廃止されたらどうなるかという視点については、分かりやすく描かれていた。流通の問題についても描いてもらえるとより深い内容になったのではないか。また、ブランド米の開発で失敗例があれば紹介して欲しかった。

○　導入部がバラエティタッチだったので、入りやすく、楽しんで見ることができた。内容も、米農家、卸売業者、販売業者、行政まで取材対象が幅広く、多くの消費者の関心を引く内容だったと思う。

ただ、山形の新しいブランド米の「雪若丸」の紹介、産地間競争の激化についての紹介が大半を占め、番組のタイトルの「減反廃止で変わるコメの世界」と内容がそぐわない感じもした。国の減反廃止とブランド米競争とがどのように結びつくのか、もっと丁寧に説明してもよかったのではないか。

農業関係者が、今一番心配しているのは米価の問題だと思う。今後どうなるのか、農業を続けていけるのか、そういった点も取り上げるとよりよい番組になったのではないか。

お米マイスターの澁谷梨絵さんが「お米は今やしこう品です」という一言が印象的だった。米は主食という常識がひっくり返された。そういう視点で農業問題を見直すと、これからの米農家のありようがはっきり見えてくるのではないかと感じた。

○　若い人の米離れが進むと言われているが、番組の中で若い人たちにもっと米を食べてもらうためにどうしたらいいのか、そこまで踏み込んだ取材があったらよかったのではないか。コンビニエンスストアで少量の米をもっと買えるようにしたり、米を身近に感じてもらう工夫を提示するなど、さらに内容を深め特集番組にして欲しいと

思った。

○　学校の教室で授業をするような設定は面白かった。二人の女性ゲストが自然で試食時のリアクションなどがとてもよかった。先生役の記者も話が硬すぎず分かりやすかった。

作りすぎると赤字になるから制限して作らない、ではなく自由競争で作る、そのために消費者ニーズを捉えて、種類を多くする、県をあげて広報活動をするという考え方は、製造業の世界では普通の考え方。商売をする以上、いかに売れるものを作るかということは基本だと思う。農業と他の業界の仕組みの違いや今後の海外展開なども、ぜひ取材して番組にして欲しい。

ブランド米が高価格帯のお米であり、全国各地で力を入れているという現状、米はしこう品になっていて、その時の好みや料理に合わせて選ぶようになってきているという紹介には驚いた。

米の味と食感の分布を示す図は大変興味深かった。あのパネルにそれぞれの米にあった料理も入れて冊子にして欲しいくらいだ。

○　重みのあるタイトルだったが、学校の授業という設定で、生徒が若い女性タレントで、軽いのりだったので少し残念な印象だった。

山形県は米の販売戦略が上手で、知事や県職員がはっぴを着て営業する姿など、他の県にも応用できることがあるのではないかと感じた。山形県の新しいブランド米の米袋のデザインにも力を入れていて、デザインの力の重要性が伝わってきた。

味や食感の分布を示す図は分かりやすくとてもよかったが、秋田のブランド米の紹介がなかったのが残念だった。

デパート地下の米売り場の様子が紹介されたが、東京の一般消費者がどういう志向で米を選んでいるのか分かるように、別の店を取材するなどもう少し工夫が欲しかった。

減反廃止や米の置かれた現状をあまり知らない視聴者にとっては、米を知るきっかけになる内容だったと思う。

○　様々な地域でブランド米が作られてきている背景に減反政策があるということを、一般視聴者が見ても分かるように示してくれた番組だったと思う。東北にとって非常に大切な米の問題を明るくソフトな印象の構成でまとめていたと思う。

農家が自ら営業をするというのは、得意な人もいると思うがなかなか現実的には難しい。農家と流通業者を結びつける、行政が働きかけるなど仕組みが必要だと思う。高齢化した農家は今後どのように生計を立てていけばいいのか、その点も紹介して欲しかった。

（ＮＨＫ側）

東北にとって米はとても大事な問題で、８月頃から取材してきた。委員の皆さんから頂いた意見を真摯（しんし）に受け止め、今後の番組制作に生かしていきたい。

味と食感の分布を示す図は、お米マイスターの澁谷さんが元々作っていたものに今の東北のブランド米を組み合わせて考えてもらった。配布前提で作ったものではないが、視聴者からも問い合わせをもらった。ブランド米に合う料理については、メニュー選びは澁谷さんの分析を参考にした。複数のお米マイスターや専門家にも取材して、その米に合うメニューは何かもっと取材するべきだったと思う。パネルに秋田のブランド米が入っていなかった点については、今から６年前まででデビューしたブランド米を中心に並べたためだ。

記者の出演については、専門家のゲストを呼ぶと、東北共通の課題だということもあって、まんべんなく言ってもらえない、もしくは広く浅くなってしまう。それよりは取材した記者が実感を持って伝えた方がいいと考えた。

東京のデパートの取材については、あの場所で買い物をする消費者はある程度限られた人なので、澁谷さんの感想だけで東京、首都圏の消費者の行動を代表しているかと言われれば、難しい点はあったと思う。別の店の様子も紹介するなど、一般的な消費行動をもっと提示できればよかった。

視聴者のターゲットについては、なるべく若い人に見てもらいたいと考えていた。ゲストは独身であっても自分でお米を買いに行く人と家族のために米を買う人の代表として２人を選んだ。若い人が少しでも多く番組を見てくれればいいと思っている。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１７日(金)のクローズアップ東北「コメで未来を切り開け！～ポスト減反時代・新潮流を追う～」は、大潟村干拓博物館で収録が行われたが、大潟村は減反政策を象徴する存在で収録場所としてふさわしく、番組を機会に興味を持つ人が増えればいい。農家の方が、補助金に頼っているのが現状だと話していたが、経営状況を人に話すのは勇気のいることで、よく取材できたと思う。補助金がなくなる現実に立ち向かえない高齢の農家や、競争の中で伸びる農家、潰れる農家を見てきたが、３０分では語り尽くせない内容の濃い番組だった。番組では新たな取り組みで成果を上げる農

家を「スター農家」と呼んでいたが、あまり聞き慣れた言葉ではなく、その基準は何なのか疑問に感じた。今月の課題番組と比べると、こちらの方が深い内容で分かりやすく、農家の心に迫るものがあった。

○　１１月１７日(金)のクローズアップ東北「コメで未来を切り開け！」で、年配の農家の方が「自分の田んぼを自分で作る時代は終わった、あとは若者に託す」と話していたのが印象に残った。後継者がいない農地では農業法人が作業する時代になっていくのだろう。業務用米へのシフトや、収穫時期の異なる品種を作付けして作業を均等化させる取り組みなど、農業も今後一層先端技術を取り入れないと立ち行かなくなる。番組の中で、高齢者の農家が参考にできる事例を多く示して、道筋を示すことができれば、なおよかった。

○　１２月１５日(金)のやまがたリアル「迫る減反廃止～生き残りかけた模索～」を見た。山形では視聴番組の「クローズアップ東北」と合わせて２週続けて減反廃止を扱った番組が放送されたが、業務用米や米粉の活用などに触れられたこの番組の方が「クローズアップ東北」としてよりふさわしいテーマだったのではないかと感じた。２つの番組はどちらも農業者側の取り組みに主眼が置かれていたが、それとは別の目線に立った番組も見てみたい。減反廃止が消費者にもたらすメリットや、政策を維持するために多額の税金を投入してきた経緯、米の販売促進に力を注ぐ県の取り組みを納税者がどう見ているのかなど、もっと多彩な切り口があってもいい。米は身近かつ安価な作物と言われており、ぜひ消費者の目線からこの問題を扱ってほしい。

○　１２月１５日(金)のクローズアップ東北「直下型地震にどう備えるか～仙台平野に潜む活断層～」を見た。１８日(月)には政府の地震調査委員会が、北海道東方の沖合でマグニチュード８．８程度以上の巨大地震が起きるおそれがあると公表したが、タイムリーな放送だった。熊本地震との類似性を指摘し、リスクが高まっていると考える研究者もいたが、危険性をしっかり伝えることが大切だ。オンサイト地震計を活用することで、エレベーターのドアをすぐに開けて閉じ込めを防ぐといった例も紹介されたが、そうした取り組みをニュースや番組でもっと取り上げてほしい。地震が起きるたびに建物にダメージが蓄積するが、自己回復は絶対にないということを、東北だけでなく、全国で共有し、防災に役立てていってほしい。

○　１２月１５日(金)のクローズアップ東北「直下型地震にどう備えるか」は、地元でもあまり知られていない長町－利府線断層帯について詳しく紹介されていてよかった。海溝型の地震と断層による直下型地震の違いについて分かりやすく説明され、実際の街の映像やＣＧを用いたことで、視聴者が自分のこととして被害をイメージする

ことができたのではないか。東北大学の岡田真介助教が研究している、名取市愛島で新しく見つかった断層についても多くの方に知ってもらいたい。番組全体を通して、脅しだけで終わらせず、耐震補強工事やオンサイト地震計を詳しく取り上げ、今できる備えを示していた点がよかった。一方で、岩手・宮城内陸地震もそうだが、まだ知られていない断層は至るところにあり、今回の番組で紹介された断層だけを避ければ大丈夫というイメージを抱きかねない点は残念だった。

○　１２月１５日(金)のクローズアップ東北「直下型地震にどう備えるか」は、地元の注意を喚起するいい番組だった。東日本大震災は1000年に一度の地震と呼ばれることもあるが、地震は海溝型だけではないので、被災地の人間も注意を怠ってはいけない。過去の地震に耐えた建物でもダメージは蓄積しており、いつまでも大丈夫ではないと再認識した。番組は不安感ばかりをあおった側面が強く、例えば地震が起きたときに住民がどう逃げるかといった対処法をより踏み込んで示してほしかった。

○　１１月１８日(土)の「もうすぐ「精霊の守り人～最終章～」みどころ満載スペシャル」(総合 後8:15～8:43、9:00～9:48)を見た。スケールの大きいファンタジーで、見始めると夢中にさせる魅力にあふれている。この番組では、ドラマの制作の舞台裏、手の内を惜しげもなく紹介しており、単なる事前の宣伝にとどまらず、興味を持ってもらうためのいい番組だった。仙台文学館で開催されていた特別展を見た直後だったこともあり、より楽しめた。中でも、音響デザインの担当者が効果音収録スタジオでさまざまな道具を使って場面に合った効果音を作成している様子が興味深かった。映像と異なり音声の世界はまだアナログ的な技法が残っていると感じ、熟練した職人技が受け継がれているのだと感心した。技術の継承とともに新たな技法や工夫も絶えず生まれていることだろう。

○　１１月１９日(日)の日曜美術館「漱石先生　この絵はお嫌いですか～孤高の画家 木島櫻谷～」を見た。前日に再放送された「４人のモナリザ～『謎の微笑』モデルの真実～」(BSﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後6:30～7:59)を見ていたこともあり、最先端科学というこれまでにない美術鑑賞のツールを今の私たちは手にしていることを実感した。「４人のモナリザ」では、２億４千万画素のマルチスペクトルカメラで絵を撮影・分析して現れた３つの女性像から推理を重ね、説得力ある結論に達していた。「孤高の画家」でも、最新技術を使った研究で、群青色の顔料を自ら焼いて作った特殊な黒色を塗り重ねて、油絵に似た質感の日本画を創作したことがわかった。こうした美術番組は、画家の生涯をたどって、専門家の話を聞くのが定番だったが、技術の進歩により今までわからなかった事実が改めて次々に明らかになる展開は、美術鑑賞の新しい方向性なので、こうした番組はありがたい。

○　１１月１９日(日)のＮＨＫスペシャル「ドラマ　龍馬　最後の３０日」は、これまでの仮説を覆す推理ドラマだった。新井浩文さん演じる龍馬は少し泥臭い部分があり、「竜馬がゆく」や「龍馬伝」の格好いいイメージからすると新鮮だった。東北人独特の感覚かもしれないが、幕末から明治維新にかけての時代観は、明治政府による広報や司馬遼太郎の作品が影響している部分が大きいと感じている。このドラマのような定説と異なるアプローチは大変興味深い。

○　１１月２３日(木)の「安室奈美恵「告白」」(総合 後10:00～10:59)は、懐かしい映像が多くあり楽しめた。自身のことについて語ることが少ない方なので、当時の状況や思いを聞けたことは貴重で、歌っている姿とはまた違う魅力を引き出していた。「目の前にある単純なことを高い壁にしてしまう」との言葉に共感した視聴者も多いのではないか。苦手だと思う部分を認めた上で、新しい道を探す彼女の姿には勇気をもらえた。

○　１１月２６日(日)のＮＨＫスペシャル「あなたの家電が狙われている～インターネットの新たな脅威～」には驚かされた。ＩｏＴが進む中で、パソコンやスマートフォンではなく家電がサイバー攻撃に悪用される事案が増えている。安価のウェブカメラに侵入されたり、防犯カメラがサイバー攻撃の発信源になったりする身近な事例も示された。東京オリンピックを控え、日本人はリスクに対する感性が低いとも指摘されているので、こうした番組を通じて警鐘を鳴らし続けることは大切だ。

○　１２月４日(月)から始まった、まる得マガジン「こだわりの一杯　おうちで楽しむ極上コーヒー」は、インスタントコーヒーをおいしく飲む方法を丁寧に解説され参考になるし、自宅でもできるコーヒーのいれ方、飲み方が紹介され、楽しかった。

○　１２月４日(月)のクローズアップ現代＋「中国“再エネ”が日本を飲み込む！？」を見た。国内でも太陽光発電が急速に増えているが、より恐ろしいと感じたのは、国の固定価格買取制度を中国企業がビジネスチャンスと捉えて今後参入を強めることだ。番組がこの視点を示した意義は大きい。土地や水だけでなく、私たちの納める税金のようなものさえも中国に持っていかれる時代になったのかと危機感を覚える。

○　大相撲の暴行問題に関して、問題の本質が何か考えるためにＮＨＫの番組を見た。１２月６日(水)のクローズアップ現代＋「横綱の“品格”その果てに～日馬富士暴行問題～」は、横綱の品性や相撲協会の組織論に関する話題が中心で、「クローズアップ現代＋」らしい内容だったが、問題の本質がどこにあるのか納得するには至らなかっ

た。別の側面から、１２月８日(金)のにっぽんの芸能「阿吽（あうん）の相撲問答」を見た。相撲は単に力を競うスポーツではなく、民衆の悩みや妬み、あるいは人の強さへの憧れや悔しさを含めて、阿吽の呼吸で戦いの中に凝縮している踊りだったと紹介され、相撲は文化だとする視点があるのだと思った。文化であれば、暴力は起こりえないのではないか。金剛力士像を演じた若柳寿延さんと藤間蘭黄さんの演技は本当に素晴らしかった。

○　１２月７日(木)の超入門！落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ「たいこ腹」「尻餅」を見た。はなし家が手をたたいて擬音を表現する部分がリアルで、落語は、想像力をかき立て、あたかも実物を体感できるかのような話芸なのだと再認識した。「わろてんか」でも寄席のシーンがよくあるので、ぜひ一度寄席を実際に訪れてみたい。

○　１２月８日(金)の歴史秘話ヒストリア「北の大地に夢をひらけ！お殿さまの北海道開拓史」は、北海道伊達市が舞台だった。名前から仙台藩との関わりを想像していたが、戊辰戦争の後、領地を減らされた亘理の領主伊達邦成が家臣を食べさせていくために政府に願い出て北海道に渡ったこと、苦難を乗り越えて一つの目標に向かっていったことがよく分かった。北海道の当別町は同じく仙台藩に連なる岩出山の領主が礎を築き、現在も交流が続いている。教科書だけでは知ることができない隠れた歴史を知ることができるのがこの番組の良さで、見ながら知識を整理できた。

○　１２月９日（土）のＢＳ１スペシャル「仲代達矢　命と向き合う」(BS1　後8:00～8:49)では、ベルトルト・ブレヒトの名作「肝っ玉おっ母と子供たち」の上演にかける彼の姿に感動した。亡くなった奥様をしのぶ心や命の尊さ、戦争の悲惨さ、演劇を追求する姿が、彼の言う「人間は一体何だろう」にすべて通じているように思えた。きちんと命と向き合う彼の姿を通じて、プロパガンダやアジテーションになることなく、平和を求める思いが伝わってきた。

○　１２月１３日(水)の探検バクモン「食べもの革命！最先端植物工場」は、当てる光の色によって野菜の色や味が変わる点にまず驚いた。スーパーに並ぶ野菜も工場で作られたものが増えていると分かった。露地や自然で栽培された野菜の格が上だとこれまでは思っていたが、工場で生産されるものの品質が高まっていることを実感した。海水を使わずに海の魚介類を育てる施設で、自然界では希少な巨大化したニジマスが紹介されたが、こうした技術が将来の食料不足対策の一つとして役立つのではないか。

○　１２月１３日(水)のクローズアップ現代＋「夫婦げんかで子どもの脳が危ない！？」はぜひ学生に見せたい内容だった。夫婦は他人だが、それぞれのＤＮＡを半分ずつ受

け継いでいる子どもの目の前では、絶対に夫婦げんかしてはいけない。脳の萎縮が起こる割合も、言葉の暴力の方が身体的暴力の６倍も高いといった科学的な説明もあり、見事な映像化に感心した。「自分もついけんかしてしまう」といった武田真一アナウンサーのコメントにも共感できた。

○　１２月１４日(木)のクローズアップ現代＋「アラフォー・クライシス」は、初めて耳にした言葉だが、ショックを受けた。自分の周りのアラフォー世代で結婚していない人がいるが、同世代がそうした苦境に立っている姿も影響しているのかもしれない。東京都が行う就労支援プログラムは、日当を出してまで行う必要はないのではないかと初めは疑問に思ったが、長い目で見たときに生活保護や年金制度に影響を及ぼすことを考えると、早い段階から手を打つことも大切だと納得した。日本全体にとって大きな問題だ。

○　１２月１７日(日)のおんな城主　直虎「石を継ぐ者」には泣かされた。映像もとてもきれいだったし、主人公が亡くなった後の展開を、時間を取って描いていたのも感動的だった。

○　１２月１８日(月)の「第３回明石家紅白！」(総合 後7:30～8:42)は、テンポよくリラックスして楽しめる番組だ。出演する歌手のみなさんの歌もとてもよい。大竹しのぶさんとの夫婦漫才さながらの会話や、高橋優さんが作詞作曲した歌を最後に披露した姿には、アットホームな印象がありよかった。

○　「旅するイタリア語」は旅行と語学がマッチした楽しめる番組だ。１２月１９日(火)の第１２課「アマルフィ復習編」では、長い石段を登って訪ねた石造りの家で、古澤巌さんがバイオリンを披露したが、青い空と青い海と白い石壁の美しい景色の中での演奏はすばらしく、その家のおばあさんのみならず同行したスタッフも泣きながら聞いていたというエピソードを聞き、実際にその場で聞いてみたいと思った。

○　１２月１９日(火)の漫才先生～ビジネス基礎〇〇講座～「サンドウィッチマン」(総合 後10:50～11:15)では、２人が営業マンを前に講義をする番組だった。例としてプレゼンをした社員は勇気があると思ったし、彼の悪い点だけではなく、優れた点を指摘するサンドウィッチマンの優しさや、彼を擁護する周りの社員の雰囲気がよかった。漫才のノウハウを生かしてプレゼンが改善されたことに感心するとともに、悪い例で終わらせない番組構成は誠実だと思った。

○　１２月２０日(水)のファミリーヒストリー「桂歌丸～遊郭に生まれて　女傑と呼ば

れた祖母～」(総合 後7:30～8:42)、この番組は家族のルーツを探す推理小説のようなおもしろさと同時に、家族の歴史に明治・大正・昭和の激動の歴史が重なり、歴史ドラマを見るような静かな感動を呼び起こす。時代の困難を乗り越え先祖が懸命に生きてきた事実を出演者自身が初めて知り、感動している様子を見ると見ている側も心を動かされる。取り上げる人によっては、放送しにくい取材結果もあるかもしれないが、うまく処理していると推察する。こうした番組を考えついた制作者のアイデアは賞賛されるべきだ。今回は、歌丸さんが食い入るように映像を見ている様子が印象的で、久しぶりに彼の落語を聞きたくなった。

○　日本海側では、北朝鮮からと見られる漁船の漂流や漂着が相次いでいる。また、地上配備型の迎撃ミサイルシステムを秋田県に配備するといった報道もある。日々の暮らしのすぐそばに不安が迫っている。食の安全も大切だがまず身の安全だ。日本海側に住んでいない人や遠くに暮らす人はどのような意識を持っているだろうか。ニュースでは取り上げられているが、深く掘り下げる番組を今後放送してほしいと思う。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成２９年１１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１６日(木)、パレス宮城野において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、各県のニュース番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１２月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役人事部長)
副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜各県のニュース番組について＞

○　宮城県で放送している「てれまさむね」は、県内各地の話題や町の声が紹介され、地元に密着している印象を受けるし、明るくほのぼのとした雰囲気がある。「とるまさむね」のコーナーで紹介される視聴者から投稿された写真の中には、興味を引くものもあり楽しみだ。毎週金曜日に週末の行楽情報を伝えている点もよい。

番組の冒頭でその日の項目が紹介されるが、必ずしもその順番で放送されるわけではなく、途中で特集や天気予報が入るなど、必ずしもまとまりのある構成とはなっていなかった。天気予報を番組の中盤と終盤で２回放送するのは、見逃した方への配慮だろうか。キャスターのスーツのサイズが合っていなかったり、女性キャスター２人の洋服の色が似通っていたりした点もよく見ると気になった。１０月２７日(金)

には、ライトアップされた円通院からの中継が放送された。リポーターの女性が境内を巡りながら説明したが、歩きながら考えているようにも見え、聞きづらい部分があった。

「おはよう宮城」に出演しているアナウンサーと気象予報士が爽やかでよい。朝と夕方で同じニュース項目が放送されていることも今回初めて分かった。東北の他の県の様子も紹介されるが、東北が一つになっている感じがして好ましい。

○　「てれまさむね」は５０分の放送時間で、時間をたっぷり使った見やすい番組だ。民放の番組はコマーシャルが多いことに加え、掛け合いもどこか軽薄で、落ち着いてニュースや情報を見られないと感じている。一方で、この時間の主な視聴者層である女性や高齢者がゆったりした番組構成をどのように感じているのかについても興味がある。

番組の冒頭で出演している一般の方が「てれまさむね、スタート」と言って元気よく始まる点がよい。当日のニュースを前半と後半の２回に分けて放送していたが、視聴者を飽きさせない工夫が感じられる。冒頭でそれぞれの項目の放送時間の目安を示していた点も新設でよい。「カメラマンリポート」や「東北ピックアップ」のコーナーで、東北全体の話題を意識的に散りばめている点もよかった。気象情報は、前半と後半の２度放送されたが、前半は局の前でぬいぐるみのキャラクターが子どもたちとふれあいながら短く簡単に伝え、後半は時間をとってしっかり伝える明確な使い分けがあった。

街頭などで一般市民の方のインタビューが放送されるが、１人あたりの放送時間が長く感じられ、個人の意見が長々と語られる点が気にかかった。

○　１０月２３日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」では、前日に投開票が行われた衆院選の結果と、接近する台風の情報を中心に伝えていた。全国ニュースの部分では、画面の下に常時表示される開票状況に加えて、いくつものスーパーが出ており、情報量が多すぎてやや見づらく感じたが、仙台からの放送に切り替わってからは、すっきりと見やすくなった。特に台風の映像は撮り方を工夫することで、画面を見やすくする配慮が感じられた。

Ｌ字型画面の中では、「避難準備情報」という用語が使われていたが、昨年１２月に、「避難準備・高齢者等避難開始」に名称が変更されている。長くて使いづらいのかもしれないが、この名称を使わなくては、変更の意義が薄れるのではないか。選挙結果を伝える部分では、新たな議席獲得の際に、与野党の勢力を示すグラフが、毎回

ゼロから延びていく映像効果が使われていたが、絶えず動いているようにも見えて集中できないとも感じた。数字だけを変える表示方法でもよかったのではないか。

１０月２３日の「てれまさむね」では、台風２１号の被害と選挙の結果、それに楽天の日本シリーズ進出ならずという項目を中心に盛りだくさんの内容だった。特に選挙については、解説の井口記者が宮城１区の３人を例に出しながら、なぜ自民党が圧勝する結果になったのかを分かりやすく伝えていた。台風２１号については、各地の被害をわかりやすくまとめていた。阿武隈川の上空から撮影した映像に流れの方向を示す矢印を入れたのは親切だった。山元町の朝や昼頃の映像も使われていたが、県道の通行規制やＪＲの運転見合わせが放送の時点でどうなっているのかについて補足してほしかった。今回の台風では、死者が出なかったことがとても大事な情報だ。どのような対策を行ったのかを検証することで、次なる災害に備えるヒントにもつながる。今後も被害がなかったという情報は積極的に伝えてほしい。

「おはよう宮城」の末尾で「てれまさむね」の予告が出るようになったが、興味のある項目が出ると、番組を見てみようと思うことが多くなったので、これからもぜひ続けてほしい。

○　「てれまさむね」は番組全体を通して、被災地の復興のプロセスを丁寧にすくい取っていこうとする姿勢が見てとれ、共感する。例えば１１月１０日(金)には、水戸市の旅行会社が格安の料金でボランティアを乗せて被災地までバスを運行する水戸局のリポートがあった。震災から６年８か月が過ぎたが、こうしたボランティアが今なお続き、しかも若い人が増えている点に力づけられた視聴者も多いのではないか。１０月３０日(月)には、石巻市でホタテの生産量が半減しているというニュースがあったが、地域を支える水産業が危機に瀕していることに驚いた。原因は不明とのことだったが、専門家の分析や考えられる要素を盛り込み、今後の対策につながる情報を伝えてもよかったのではないか。

「あの日を胸に」「大好き東北」「スポまさむね」など多くのコーナーがあり、見ていて飽きないが、特に気に入っているのはニュースの合間に流れる季節の映像だ。ごく短い時間だが紅葉の風景など季節感のある映像は、ほっと一息つかせてくれるし、行楽の情報にもなる。また、キャスターが着る衣装の色合いのバランスがとてもよい。男性キャスターのネクタイやポケットチーフの色と女性キャスターのスカートや上着の色が同系色でまとめられており、いい色使いで落ち着いて見られる。

○　「てれまさむね」は番組の冒頭で、その日登場する人をうまく活用して明るくスタートしている点が印象的だ。キャスターが立って動きを交えて話しているのが他

局との違いで、明るくソフトな印象を受ける。番組が終わるまで立ち続けるのは負担だと思うが、大変さを見せることなく明るく振る舞っている点がすばらしい。当日のラインナップが表示されるが、地元のニュースをバランスよく伝えていることがわかる。日がわりでさまざまなコーナーを配し、変化をつけている点もよい。

東北６県の話題を伝えている点は、ＮＨＫならではのネットワークが生かされている。「ようこそ！ＮＨＫ」では、子どもたちを出演させることで、地域との関わり合いを強めていることに加え、彼らがニュースへの関心を持つきっかけになるかもしれない。視聴者の投稿写真は手づくり感があり、話題が身近に感じられる。１１月７日(火)には登米市の観光ＰＲ動画が紹介されたが、とても興味深く、地元ならではの話題をうまくＰＲしていた。「あの日を胸に」では女川町で脱サラして大判焼きの移動販売を始めた男性が取り上げられたが、伝えられる側の気持ちを大切にしながら報道しようとする意図が感じられてよかった。

○　岩手県で放送している「おばんですいわて」は、今年度になって気象情報のコーナーがよくなったと感じている。一方で、同じ番組の前半と後半の２回に分けて伝えるねらいについてお尋ねしたい。１回にまとめた方が整理され、他の話題を伝えられるのではないか。また、東北各県のニュースが取り上げられるが、季節の話題に関する話題が多いと感じている。いわゆる「硬め」の話題をもっと取り上げてほしい。ＮＨＫの夕方のニュースは、転勤によりキャスターが交代する頻度が民放各局と比べても高く、長く地域に勤めている民放のキャスターと、地域への密着度の部分でハンデがあると感じている。より積極的に地域の人材を活用してほしい。また、キャスターが時事問題についてコメントする場面が少なく、見ていて物足りなさを感じるときがある。

１０月３１日(火)に、西和賀町でダムにたまった流木を無償で提供し、まきやアートとして活用するニュースがあったが、よい着眼点だった。

１１月１４日(火)には、文化財の修復で急速に需要が高まっている国産漆について取り上げられたが、より多くの時間をとって伝えてほしかった。中国産ではなく国産が求められる理由が、日本特有の風土によるものなのか、漆の成分によるものなのかについて詳しく解説してほしかった。また、生活文化を支えてきた漆の役割が、いつしか文化財のためのものへと変化していること、需要の高まりが価格を安定させる一方で、手頃な価格で多くの人々が身近に使う機会が減ってしまうことなど、この産業全体が抱える課題を、特集番組などを通じてより深く掘り下げてほしい。

１０月３０日(月)の「おはよう岩手」で、災害公営住宅の家賃について、一定の収入がある人は入居から３年で家賃が見直され、高額な家賃のため退去した人もいると報じられショックを受けた。これまでは災害公営住宅に入れてよかったという見方しか持っていなかったが、私たちが知らないこのような問題点を伝える報道はすばらし

い。国の法律や制度が及ばない部分にいっそう切り込んでいってもらいたい。

○　青森県で放送している「あっぷるワイド」では、函館地方の話題を毎週紹介している「つながる道南ワイド」のコーナーが青森ならではだと思って見ている。

１０月３０日(月)の放送では、列車の踏切内トラブルに対する訓練のニュースが報じられた。踏切内で車が立ち往生してしまった場合、そのまま遮断機を押し上げて通過するという説明があったが、最近の乗用車には誤発進抑制制御機能が装備されており、遮断機を障害物と認識して動けなくなる場合もあると聞く。時代に合わせて注意喚起の呼びかけも変わっていくのだろう。

１１月１３日(月)の放送では、新郷村で地元の食材に親しんでもらうために、学校給食で干ししいたけや飲むヨーグルトを地産地消で提供している話題が取り上げられた。食育は専門家の少ない分野ではあるが、大切な教育の一環だ。こうした地域の取り組みをニュースで積極的に取り上げることで、普及を図ってほしい。

１０月２０日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」では、奥州市で留置場に出す弁当を作り続ける夫婦が取り上げられた。３０年以上休まずに続けていることに驚くとともに、凶器にされないために魚の骨を抜いたり、曜日感覚を維持するために日曜日はカレーライスにしたりする工夫に感心させられた。夫婦のこれまでの苦労を思うと感動を覚えた。

１０月３１日(火)の「ひるはぴ」は、東北大学邦楽部の学生が登場し琴と尺八の演奏を披露していた。先輩が後輩に技術を伝えていく方法はなかなか興味深かった。「邦楽」を「法学」と誤解されないよう、字幕などをより適切に用いて紹介してほしかった。

ＮＨＫのアナウンサーはおおむね３年で異動してしまう点が民放と比較したデメリットだと感じているが、番組の中でアナウンサーの人柄をかいま見ると親近感を覚える。例えば、青森市内の私立学校の弁論大会を取材したアナウンサーが、取材の中で流ちょうな英語を話していた場面では、こうした顔もあるのだと新たな発見があった。ニュースを原稿のまま読むのではなく、そこから一歩踏み込んで自分の感情やメッセージを表すことがもっとあっていいのかもしれない。

○　福島県で放送している「はまなかあいづＴｏｄａｙ」は、午後６時台の放送で、多くの視聴者はまだ職場にいる時間帯なので、番組の主なターゲットは高齢者ではないかと理解している。そのためか、歳時記のようにゆったりとした番組構成になっている。「Ｆのモト」では若者に焦点を当てているが、高齢の方は彼らが頑張っている姿を頼もしく思うことだろう。

「おはよう福島」は家事をしながら見ることが多いが、知っているアナウンサーが出演していると、安心した気持ちになる。

１０月２２日(日)は台風が接近していたが、台風の進路や天気の変化が詳しく伝えられ、生活者の立場ではＮＨＫが最も頼りになった。選挙に関しては、選挙権年齢が１８歳に引き下げられて初めての衆院選だったが、１８歳、１９歳ともに全体の投票率を下回る結果となった。若者の投票率を上げるためには、彼らが自分たちの問題だと捉える意識を高める必要があり、大学では立候補者討論会を企画するといった試みもある。そういった動きもニュースで積極的に取り上げ、意識の醸成に努めてほしい。

福島県向けのニュースでは、県内の放射線量値が伝えられている。例えば 0.01 マイクロシーベルトから 0.25 マイクロシーベルトのように、伝えられる値の幅が広いので、伝える意味があるのだろうかと感じることもある。また、これを見る視聴者に何を感じ取ってほしいのか、そしていつまで続けるのか、疑問に思う。

民放のニュース番組の中には、見ていて気分が悪くなる内容もあるが、ＮＨＫのニュース番組は、子どもたちに安心して見せることができ、子育て中に家族で見られる番組だと改めて感じた。

○　山形県で放送している「やままる」は、民放と競合する放送時間であることや、その後に「ＮＨＫニュース７」が控えていることもあり、リラックスした雰囲気の番組を作ろうとしている意図が見てとれる。山形放送局への親しみを高める効果もあるのではないか。一方で、番組全体に不思議と軽い雰囲気が感じられることがあり、ＮＨＫに安定感や安心感を求める視聴者の期待に対して十分には応えられていないのではないかと思うことがある。硬さと柔らかさの兼ね合いをどう取るかは難しい部分だ。これからより高い完成度となるよう期待している。

１１月９日(水)には、県内の外国人登録申請に関する記者特集が放送されたが、企業を丁寧に取材するとともに、全国の事例や専門家のコメントも盛り込んだ丁寧な作りになっており、取材力の高さに感心した。

出演者については、民放にベテランの女性アナウンサーがおり、比較する視点で見てしまうのかもしれないが、女性キャスターの言い間違いや早口が気にかかるときがある。またスタジオのパートについては、キャスターの手元にある原稿が見えてしまい画面に集中できないことや、モニターの前に立った時に人が画面の文字に重なってしまい見ていて窮屈に感じる場面があるので、工夫してほしい。気象情報を時計代わりに使っている視聴者もおり、日によって前半の開始時刻が変わる場合は、丁寧に案内してほしい。

１０月２９日(日)の「ニュース６４５」で、未舗装の悪路を自転車で走るシクロクロスの競技会について取り上げられ、ＶＴＲの最後がスタートする場面で終わっていた。演出効果をねらったものかもしれないが、違和感を覚えた。

ニュースや番組で企業名を扱う基準について、コメントをしなくてもテロップを出す場合や、インタビュー映像の後方に企業名が映っている場合など、さまざまなケー

スを目にしたことがあり、それぞれ使い分けの基準があるのか知りたい。

○　秋田県で放送している「ニュースこまち」には、秋田放送局が力を入れていることがよく分かった。今年の４月から内容をリニューアルしたと聞いているが、地元の保育園・幼稚園の子どもたちを紹介するコーナーは見ていてほっとするし、秋田駅前など外の風景をバックにニュース項目を紹介する場面も見やすくてよい。金曜日には週末のイベント情報を紹介しているが、便利なので続けてほしい。今月から始まった「つかはらくんがいく」のコーナーでは、アナウンサーが蝶ネクタイを付けて登場し川連漆器の箸を持ち歩くなど、随所に工夫がうかがえる。

気象コーナーの村木予報士は、優しい物腰が好ましく、女性キャスターとのかけ合いの中に時折混じる秋田弁も、地元密着らしさが出ていると感じる。今後も期待して見たい。

１０月の衆院選に関する一連のＮＨＫの報道は、開票速報も含め、新たに選挙権を得た１８歳にも安心して見せることのできる内容だった。

（ＮＨＫ側）

５０分の番組を飽きずに見続けてもらうための工夫に各局が取り組んでいる。その日のニュースが番組の基本だが、当日に制作を始めるニュースだけで時間は埋まらないので、視聴者を飽きさせないように、中継や生活情報、スポーツ情報などをあらかじめ準備し、ニュースとの組み合わせを工夫しながら制作している。

構成に関してだが、ニュースを前半と後半に分けるのがいいのか、固めて放送するのがいいのかなど、最もふさわしい構成を日々探りながら放送している。「てれまさむね」冒頭のタイトルコールも、視聴者に親しみを感じてもらうために最近始めた試みだ。

東北各県のニュースについては、当日の話題を送ってもらうことにしているが、ほかの局と重ならないものや地域色が強いものを各局で選んでいる。その日のトップニュースになるようないわゆる「硬め」のニュースを集めると、日によっては似た内容が各局で並ぶことになるので避ける傾向がある。

気象情報を前半と後半の二度放送するのは、主婦の方が家事をしながら見る時間帯であることや、視聴者の関心の高さを踏まえたものだ。前後のニュースの分量によって開始時刻が変動するので、必ずしも決まった時刻に放送しているわけではない。

企業名の放送についての基準に関して、放送法でＮＨＫは広告放送が禁止されていることから、宣伝に寄与する放送は行わない。ただし企業名そ

のものがニュースになっている場合や、視聴者の理解の助けになる場合などでは、個別に判断して使用している。その場合でも、繰り返しを避けるなど抑制的に使用している。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２２日(日)のサイエンスＺＥＲＯ「奇想天外！笑って考える科学　イグ・ノーベル賞２０１７」を見た。日本人が受賞した生物学賞や物理学賞の「猫は液体？」、流体力学賞の「コーヒーをこぼさないカップの持ち方」など、研究内容が詳しく解説されていた。イグ・ノーベル賞は身近なテーマを扱っているが、科学の基礎研究がしっかりなされているという点を分かりやすく紹介していて、とてもおもしろかった。

○　１０月２３日(月)プレミアムカフェ選「上京 故郷に背を向けて」(ＢＳプレミアム前9:03～10:52)は、青森県津軽を本拠地とする弘前劇場と演出家・長谷川孝治に密着した番組で、夢を追って東京に行くということと、ふるさとで文化活動を続けるということの意義が丁寧に描かれていた。映像も美しく見応えがあった。

○　１０月２４日(火)クローズアップ現代＋「家電が突然発火する！？～知られざる“サイレントチェンジ”～」は、タイムリーな話題でとても参考になった。最後にゲストの方が「安全にはお金がかかることの理解が必要。安全は価値。価値に対するお金を払いましょう」とまとめていて大いに納得した。今後も最新の現場の状況を取材して、番組で紹介してほしい。

○　１０月２８日(土)明日へ1min.「みちのくモノがたり　エレキギターがつなぐ千年の技～岩手　陸前高田～」(総合 前4:59～5:00)や１１月８日(水)明日へ1min.「おいで東北　君に見せたい東北がある　～秋田・湯沢編～」(総合　前 4:10～4:11)を見た。それぞれ短い番組なのに内容が濃く心に残るものがある。東北のよさを端的にまとめたミニ番組が豊富にあり、全国に東北を発信するいい機会になっているので、今後も続けてほしい。

○　１０月２９日(日)競馬「第１５６回天皇賞」(総合 後3:00～4:00)を見た。競馬や大相撲、野球などスポーツ中継は、見るだけではなく、アナウンサーの実況を聞くことも楽しみの一つだ。アナウンサーは事前にレース展開を何度もシミュレーションして本番に臨んでいるのだと思う。描写が的確で表現が巧みだと感心する。スポーツ中継の与えてくれる感動の鍵、それは実況が担っていると言っても過言ではない。来年のピョンチャンオリンピックも期待している。

○　１０月２９日(日)ダーウィンが来た！「高速道路に５０００羽！？サギ大集結」は、都市開発や住民とのあつれきによって住みかを追われたサギが名古屋市近郊のインターチェンジの敷地内に巣を作り日本最大級の繁殖地を作っているという話だった。高速道路周辺に広がる豊かな自然も利用しながら、高速道路という新天地でたくましく生きるサギの姿が印象的だった。

○　１１月１日(水)ひるブラ「城下町へタイムトラベル！～秋田・仙北市～」を見た。２５分の生中継をテンポよく展開させるために、事前の打ち合わせやリハーサルを何度も行っていると推測する。その真摯(しんし)な番組作りに感心した。ただ、多くの情報が詰め込まれているため慌ただしくも感じた。また、画面の右下の小さな画面にゲストが登場し感想などを話す演出については、アクセントにもなるが、必要性をあまり感じなかった。放送時間は、もっと多くの人が視聴できる時間を選んでもいいのではないか。

○　１１月２日(木)クローズアップ現代＋「ひらがなも書けない若者たち～見過ごされてきた”学びの貧困”～」について、ショッキングな内容だった。2010年の国勢調査で、義務教育の小学校を終えていない人は１２万人、このうち４０歳未満の人はおよそ２万人いるという結果。それまで日本に読み書きができない人はほとんどいないという見解だったが、実態は全く違った。その現実をＮＨＫならではの幅広い取材力で描き出し、とてもいい内容だった。最後にゲストが「今までは学校は通ってくる子どもに教育を施すことが前提だったが、何らかの理由で通えない子どももいる中で、今後は出向いて教育を提供するという考え方も必要だ」とコメントしたのが印象的だった。

○　１１月３日(金)インタビューここから「シンガーソングライター　高橋優」(総合前6:30～6:53)を見た。人口減少、少子高齢化などの問題を抱える秋田を盛り上げようと活動している高橋優の思いがしっかりと伝わる番組だったと思う。聞き手は、秋田局のアナウンサーだったが、秋田出身のアナウンサーが秋田弁を交えながらインタビューしたほうがよりいいコメントを引き出せたのではないかと思った。また、インタビュー場所が、高橋さんが通った中学校の体育館だったが、初めてステージで歌った場所でもあり自分の原点だと話していたので、そこで歌う場面があればもっとよかったと思う。秋田を出ていく若者、戻って来たいと考えている若者にも見てほしい内容だったので、早朝ではなくもっと見やすい時間に放送してほしかった。

○　１１月３日(金)今日なにして遊ぶ？くうねるあそぶ こども応援宣言(総合　前

9:00～9:45)を見た。子どもに「何して遊びたい？」というインタビューをしていたが、サッカーや鬼ごっこという意見が多く、人と関わって遊ぶことが好きだと分かったが、今の子どもたちは思いつく遊びに幅がないとも感じられた。もっとたくさんの子どもの意見を聞きたかった。「渋谷はるのおがわプレーパーク」の場面では、大人はその場に応じた子どもとの関わり方が必要だということを映像で分かりやすく提示していた。プレーリーダーの方が「効果が目的にならないために、大人が子どもの主体性を理解することが大事だ」と話していたのが印象的だった。また、子どものゲーム時間短縮法はとても斬新な内容だった。ゲームを悪者にする親、ゲームに子守をさせる親と二極化している中で、ゲームとうまくつき合う方法が求められていると感じた。

○　１１月３日(金)歴史秘話ヒストリア「沖ノ島 日本はじまりの物語」(総合 後8:00～8:43)を見た。３つのエピソードにわけて非常にわかりやすくまとまっていて、おもしろい番組だった。今回、倭の様式の前方後円墳があること、日本書紀に出てくる武寧王のひつぎに日本のこうやまきが使われているなど、初めて知ることも多く勉強になった。平安時代に石で作った舟形がささげられなくなり沖ノ島の国家的な祭しは終わったというコメントがあったが、なぜ平安時代に終わったのかという説明がなかったのが残念だった。

○　１１月３日(金)ＢＳ時代劇　赤ひげ(１)「新人医師来たる」を見た。小石川養生所は、江戸時代に町医者が目安箱に投書をして設立された貧困者を対象にした無料の診療所で、江戸時代に既にそのような福祉施設があったことは歴史的な事実として意外な驚きがあると思う。全８回が終わったところで、小石川植物園に残る養生所の遺跡・遺構などを紹介する短いコーナーがあってもいいのではないかと思った。視聴者の歴史観は、テレビドラマや映画に大きな影響を受けると思う。時代考証がしっかりした歴史ドラマはこれからますます大きな役割を担うと思うので今後も期待したい。

○　１１月４日(土)ＥＴＶ特集「こいのぼりとしゃぼん玉～悲しみでつながる遺族たち～」は、東日本大震災で家族を亡くした人たちと３２年前に起きた日航機墜落事故の遺族の交流を描いていた。震災復興が進む中でも悲しみは消えることはないということがきちんと描かれていてとてもよかった。

○　１１月５日(日)ダーウィンが来た！生き物新伝説「大人気！チンアナゴ〇珍生活」は、映像がとてもきれいだった。内視鏡カメラで撮影した巣穴の中の映像や透明ビーズを入れた水槽で巣穴の掘り方を見せる映像など驚きの連続だった。世界で初めて撮影に成功したという産卵の映像もあり、番組の制作過程で新たな発見をしていることに感心した。

○　１１月８日(水)クローズアップ現代＋「マラソン大会ウォーズ～激化する市民ランナー獲得競争～」は、年間数千を超えるマラソンイベントがあり、ランナーの獲得のために”おもてなし合戦”が激化しているという内容だった。ゲストの方が、「記録への挑戦をするエリートランナーと記憶を大切にする一般市民ランナーの二極化が起こっている」と解説していたのが印象的だった。また海外からのランナーも増えていてマラソンが観光資源にもなっているという事例紹介もあり、さまざまな観点からマラソン大会を紹介していて見応えがあった。

○　１１月１２日(日)被災地からの声「若者子ども編・福島県」で飯舘村の今を紹介していた。福島市に仮校舎のある飯舘中学校の生徒の「震災当時はモノクロだったけど、今は人が戻ってきて色がついてきたと村の人たちが言っていて、私たちも未来を向いてスタートしようとしている」というインタビューが心に残った。次世代が生まれ育った村に対して希望を語れるようになり、少しずつだが復興へ向かっているということが伝わってきた。また、避難区域に指定され、移転を余儀なくされた喫茶店については、元の場所の店を閉じることや従業員を解雇せざるを得なかった苦しみ、再開するときの苦労などがよく伝わってきた。さらに、飯舘村には放射性物質が含まれる廃棄物が町のあちこちに仮置きされていて、その現実も紹介することで、飯舘村の今とこれからをより深く語ることができたのではないかと感じた。

○　１１月９日(木)超入門！落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ「茶漬間男」「松山鏡」を見た。落語家の語るはなしに合わせて当て振りを映像化するという演出が新しく、おもしろい番組だと感じた。当て振りの映像とシンクロすることで、落語家の話術の巧みさがより際立っていた。演じる役者のキャスティングが絶妙でとてもおもしろい。今後もぜひ続けてほしい。

○　１１月１３日(月)プロフェッショナル 仕事の流儀「ドクターヘリ出動！地域を守り抜け」を見た。ヘリコプターの中で手術をしてそのまま治療室に運ぶという救急医療の現場を緊迫感のある映像で伝えていてインパクトのある内容だった。救急医の小林さんの仕事のやり方に感銘を受けた。「地域の“歯車”たれ」「命ある限りフルスイングする」など言葉も印象深かった。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成２９年１０月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、クローズアップ東北「“コンパクトで元気な街”は可能か～検証・人口減少時代の都市再編～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１１月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役人事部長)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜クローズアップ東北
「“コンパクトで元気な街”は可能か～検証・人口減少時代の都市再編～」
（１０月６日(金)放送）について＞

○　青森市の場合は、第三セクターの商業ビルの破綻、コンパクトシティ構想の挫折、中心商店街の衰退、人口減少などさまざまな問題があった。その解決策を探るのは大変だったと思うが、視聴者に考える材料とヒントを与えてくれる問題提起型の番組として非常にいい内容だった。ただ１点、新幹線の駅が郊外にできたことも青森市のまちづくりとしては痛手だったと思うので、そのことにも少し触れてほしかった。
番組の中で注目したいと思ったのは秋田市のエリアリノベーションの事例だ。デザイン会社が主導して南通地区を活性化していた。町のにぎわいは、行政主導ではなくて民間のアイデアと行動力の中から生まれるのだと思う。行政はそれを支援するだけで十分だと秋田の事例を見て感じた。

○　現代の地方都市が抱える問題を端的に取材した番組で、非常に興味深く見た。地方都市では、人口減少や中心市街地の衰退など共通する問題を抱えている。まちづくりに関わっている多くの人に見てほしい番組だと思った。

コンパクトシティそのものについて、政策ができた背景なども含めてもう少し分かりやすく説明する時間があってもよかったと感じた。

ゲストのコメントが一般的で、もっと具体的な解決に向けた方策の提示がほしかった。

青森市以外にも東北の市町村ではコンパクトシティを推進している。ぜひその動きを取材し、今後も番組で紹介してほしい。

○　青森市のコンパクトシティ構想について、イラストや図を使い、わかりやすく説明していたと思う。

秋田市の事例の中で、「貸し手・借り手をつなぐコーディネーターが必要だ」という説明がとても印象に残った。そこに住んでいる人が主体になることやまちづくりに関わる人たちをつなぐ役目が必要だということがうまく説明されていてよかった。

人口減少が進む地域は、高齢化も同時に進んでいくところが多い。秋田市の成功例は、若者向けという印象だったので、高齢者が生き生きと生活できるまちづくりという視点での成功事例も提示してほしかった。

コンパクトシティについて、視聴者の理解を進める上でとても参考になる番組だったと思う。行政関係者にも改めてまちづくりは住民が主役であるということが伝わる内容になっていたのではないだろうか。

○　現代の課題を取り上げたいい番組だったと思う。コンパクトシティを推進している東北の市町村の紹介の中で、目標をすべて達成しているのは１か所のみで、そのほかはすべて失敗というような説明に感じられた。それぞれに進行具合は違うので、１個でも目標を達成しないと失敗という印象を与えたのは残念だった。

それから、秋田市の事例は、非常に分かりやすかった。エリアリノベーションは町並みやその町の文化が問われると思う。どこにでも応用できるわけではないことを踏まえて考えたほうがいいのではないか。またさまざまな文化と結びつけて考えることでさらによくなるのではないだろうか。

○　青森市の問題提起から始まり、岐阜市や秋田市の成功事例の紹介もあり、コンパクトシティの進め方について大きなヒントがあり、非常に参考になる番組だったと思

う。

秋田市の事例で紹介されたカフェには以前に行ったことがあり、若者の支持があることを肌で感じていた。やはり、若者が集える場所を作ることで、その輪が広がり、まちににぎわいを作ることは可能だと実感した。そういった成功事例をもっとたくさん紹介してもらえるとより参考になると感じた。

○　私が東京から青森に来た時に、駅前の複合施設がちょうどできたので、私の人生に重なる部分があり、非常に興味深く番組を見た。複合施設に入っている図書館の終了時間を延長するなどの工夫もされてきたと聞いている。青森市でコンパクトシティの計画が始まった当初の状況も詳しく取材し、歴史的な背景と共にさらに深く検証してほしかった。

○　青森市の事例については、複合施設の中に、住民目線で本当にお客さんに支持されるようなテナントがどれだけ入っていたのか、中心部への住み替えについても住む人のことを第一に考えた計画になっていたのかなど、やはり住民目線での取り組みになっていなかったので失敗したのだと思う。行政の思惑だけではうまくいかないということを実感させられた。

岐阜の事例については、名古屋から電車で１５分程度なので、岐阜の駅前に一極集中型のまちをつくっても、あまり利便性は感じられないと思う。岐阜市内に複数の拠点をつくり、近くて便利なまちだという部分を強調して成功した事例だと納得できた。

現在も多くの自治体でコンパクトシティに取り組んでいるので、今後どのような点に配慮したらうまくいくのか、もう少し突っ込んだ解決策を示すことができればさらにいい番組になったのではないかと思う。

○　コンパクトシティに取り組む市町村のうち、計画を目標通り達成できているところは少ない。今回の事例紹介はほんの一部であり、現実はもっと深刻ではないかと思った。

青森市の事例を見て、コンパクトシティは、やはり行政側の強制ではなく、住民の意向も十分に反映したものでなければならないことを痛感した。

東北の中では、２１の都市でコンパクトシティを推進していて、そのうち１つの都市だけが目標を達成していると説明があったが、その事例を紹介してほしかった。

秋田市内の取り組みはユニークだと感じた。デザイン会社社長の頑張りと賛同者の広がりに期待したいと思った。

（ＮＨＫ側）

番組を担当したディレクターの父親が駅前の再開発ビルで自営業をしていたが、同様にそのビルもうまくいかず、お父さんも撤退されたということがあった。青森市にも通じる部分があり、全国で共通する問題点を検証することにもつながるということで今回の番組を制作することになった。

ディレクターと記者がタッグを組んで取材をし、まち作りの計画を検証する中で、どの情報をどこまで掘り下げて伝えるべきか何度も議論をしながら進めてきた。しかし、委員のみなさまの意見を伺い、もっと工夫すべき点があったと感じている。

コンパクトシティについては、人口減少の問題とも通じる部分があり、簡単に解決策を提示することが難しかった。大事なテーマだと捉えているので、引き続きいろいろな形で番組を制作していきたいと考えている。

○　青森市のコンパクトシティの計画には、コンサルタントが入っていたのか。

（ＮＨＫ側）

コンサルタントが介在していたかは承知していない。青森市の当時の市長が看板政策として、全国に先駆けて行ってきたと理解している。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１３日(金)のクローズアップ東北「法医学者が見た東日本大震災」は、きわめて重いテーマだったが、初めに「番組では津波の映像や遺体安置所の写真が流れる」とことわったうえで、番組を放送する理由を丁寧に説明し、誤解を招かない配慮がされていた。阪神・淡路大震災の死因では、窒息・圧死が全体の約8割を占めたということが耐震化を進める上で重要な情報となっているが、それがわかったのは法医学者たちの努力によるものだった。遺族の方にとっては見ることがつらい番組だったかもしれないが、一般の方の理解を進めるうえで大切だ。矢島大介医師の「死者の情報が生きている人に役立つか」という言葉が特に心に残った。

○　クローズアップ東北「法医学者が見た東日本大震災」は、暗い雰囲気があったが、よく見ていくと有意義な内容だった。犠牲者の死因を究明することで対策に生かし、次の災害で助かる人を増やそうとする、今回の取り組みは重要だ。津波では、水というよりは大きながれきの塊が迫ってくることや、５０センチの高さでも人が立っていられないほどの力があるという研究の成果が示された。岩瀬博太郎医師が、防災対策

に役立ててほしいと話していた点が印象的だった。

○　９月１８日(月)の特集ドラマ「眩(くらら)～北斎の娘～」(総合 後7:30～8:43)は、ＮＨＫならではの質の高いドラマだった。各地で葛飾北斎の展覧会が開かれて関心が高まっているタイミングでの放送だった。「光と影」をテーマとし、焦点の絞り方や日本特有の色合いなど、映像の面でもうまく表現されていた。親子を演じられた宮﨑あおいさんと長塚京三さんの演技はすばらしかったが、宮﨑さんが６０歳を過ぎた女性を演じたシーンにはやや無理があった。

○　９月２２日(金)の新日本風土記「仙台」を見た。見慣れた風景でもテレビを通すと、新鮮な印象で新しい発見があった。美しい映像で見ると、仙台という町の長い歴史と情緒が一層感じられ、見る人を引きつける。中でも、文具店の娘さんが七夕飾りを手作りするエピソードには心を引かれた。この番組は、地域の魅力を全国に広く伝えるのが大きなねらいだと理解しているが、地元の人にも見てもらうことで、自分たちの町に対する自信を深めてもらう役割も大切だと考える。その点では、事前に放送をもっとＰＲしてもよかったのではないか。また、番組のポスターも訴求力をやや欠いていたように思う。

○　９月３０日(土)に最終回を迎えた連続テレビ小説「ひよっこ」だが、毎日見ることが難しかったので、「『ひよっこ』一週間」を見ていた。こうしたダイジェストの放送はありがたい。ドラマの終わり方はすがすがしかったが、主人公のこれからや、赤坂の街がどうなるかといった余韻もあり、続編を期待させるものだった。記憶喪失の父親役を演じた沢村一樹さんのうつろな表情は好演だった。過去にヒットした映画もあるが、昭和時代の家族ドラマが一つのジャンルとして確立されてきたことが、この番組が成功した背景にあるのではないか。

○　９月３０日(土)と１０月１日(日)の「ＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク」は、イメージしにくい医学の世界が分かりやすく映像化されていた。医学の進歩に加えて、３Ｄ電子顕微鏡や８Ｋ顕微鏡ライブイメージングなど、映像技術の進歩にも驚かされた。子どもたちの理科離れを指摘する声もあるが、こうした番組を見ることで、医学や工学への興味や関心を深めてほしいと期待している。出演者のタモリさんとゲストの会話も楽しく、さらに山中伸弥教授のキャラクターも相まって飽きずに見られた。人体のそれぞれの臓器が脳を介さずに情報を伝え合っていることを初めて知り、「医療界のパラダイムシフト」を実感した。

○　１０月２日(月)から始まった連続テレビ小説「わろてんか」は、毎日気楽に見るこ

とのできる番組だ。キャストも豪華で、女性から支持を受けるのではないか。てんと藤吉が、どのように苦難を乗り越えていくか、このあとの展開に期待している。

○　１０月２日(月)のクローズアップ現代＋「ロヒンギャ危機　“スー・チーのミャンマー”で何が」は、ロヒンギャの人たちが置かれた環境を分かりやすく伝えていた。国家顧問のアウン・サン・スー・チー氏が問題の解決に主導的に取り組むことが期待されている一方、軍と対立せずに政策を進める必要性も指摘され、問題の複雑さが理解できた。ミャンマーとバングラデシュの２国間だけの問題とせず、国際社会が中に入って解決する必要性を感じた。

○　１０月２日(月)の「ザ・ベストテレビ２０１７」(BSﾌﾟﾚﾐｱﾑ後0:45～4:54)の中で放送されたＮＨＫスペシャル「ある文民警察官の死～カンボジアＰＫＯ　２３年目の告白～」は、事件をまざまざと思い起こさせてくれた。当時はカンボジアでの実状があまり伝わってこなかったので、時とともに事件が忘れ去られてしまった印象がある。番組は、危険な地域に警察官がほとんど丸腰で置き去りにされたという驚くべき実情を伝えており、歴史の事実は時間がたってから明らかになるものだと再認識した。これから日本がより国際貢献を求められる中で、どこまで危険を冒して紛争地域での活動に携わるべきか、考える材料を提供してくれた。

○　１０月４日(水)のファミリーヒストリー「西田敏行～二人の母　二人の父～」はとてもおもしろかった。西田さんの養父は会津藩だった郡山市にいるが、その祖先が会津藩と戦った薩摩藩にあり、大河ドラマで西郷隆盛を演じたことや、「西郷だけは嫌いになれない」と話していたことに、不思議なつながりを覚えた。ゲストの歴史が深く調べられていて興味深いし、ここまで調べていただけると羨ましいとさえ思う。

○　１０月７日(土)と１４日(土)のブラタモリ「＃８６　黒部ダム」と「＃８７　黒部の奇跡」を見て、黒部ダムがなぜあの場所に建設されたかがよく分かった。ダムの完成は昭和３８年で工期が７年ということは、昭和２０年代にはすでに計画がされており、日本人の強さに感心した。今回はタモリさんのモチベーションが特に高く感じられ、急な階段を楽しそうに歩く姿がほほえましかった。深い渓谷が生まれた理由を地質の視点から説明していたが、断層も要素の１つとして挙げられるのではないか。専門的な事柄を番組で分かりやすく伝える難しさがうかがえる。タモリさんは博学だが、その対比で女性アナウンサーがもっと予習をしてから臨んでほしいと思う時もある。東北ではまだ番組が訪ねていない県もあるので、ぜひ訪ねてほしい。

（ＮＨＫ側）

アナウンサーには一般の人の目線を番組に加える演出意図から、どこを訪ねるか事前には伝えず、勉強もしないようにしてもらっている。

○　１０月７日(土)のＥＴＶ特集　アンコール「告白～満蒙開拓団の女たち～」は、切ない番組だった。開拓団の女性たちがソビエト兵を接待したという、打ち明けることがためらわれる歴史を告白した彼女たちの勇気に感銘を受けた。このことを番組で取り上げることにも勇気を要したと思うので、取材班に敬意を表したい。Ｅテレだけでなく、総合テレビの「ＮＨＫスペシャル」などでも取り上げてほしいテーマだ。

１０月８日(日)の日曜討論「衆院選１０日公示　党首討論」(総合 前9:00～10:15)は、各党の党首が出演し、衆院選に向けた政策などを訴えたが、午後に放送された「党首討論会」(総合 後1:05～3:12)と、質問が似通っており、内容が重複している印象を受けた。どちらか片方を放送するなり、日曜討論を別の企画に差し替えるなりすることもできたのではないか。

（ＮＨＫ側）

「日曜討論」はＮＨＫ、「党首討論会」は日本記者クラブの主催で、どちらにも８党の党首が出演することからＮＨＫとしては広く公平に伝えるべきと考え、２つの番組を午前と午後に編成した。前回の衆院選の際は、記者クラブの党首討論会が月曜日に行われており、今回は放送日が重なった。国民・視聴者の関心は同じような部分にあり、結果的に似た質問が続いたものだ。

○　１０月９日(月)の「みちのくモノがたりスペシャル～お宝　新発見の旅～」(総合 前10:05～10:50)は、あまり知られていない東北地方のよさが紹介されていた。最初にキーワードが示され、旅を通じてその意味にたどりつく番組の構成も分かりやすかった。ゲストのコメントは、単なる感想で終わらせず、もっと深みのある言葉を聞きたかった。

○　「みちのくモノがたりスペシャル」は、リラックスして視聴できる番組だった。それぞれの地域の人たちが、震災を乗り越えて明るく頑張っているというメッセージが伝わってきた。

○　１０月９日(月)の香川照之の昆虫すごいぜ！「３時間目　オニヤンマ」(Eﾃﾚ 前9:00～9:30)では、Ｅテレらしい自由な番組づくりを楽しめた。虫を拡大して見ることで、オニヤンマの羽の美しさや、空中での羽の複雑な動きなどがよく分かり興味深い。昆

虫の生態だけでなく、香川照之さんの熱い思いや人生観も伝わり、教育的な内容にまで高めている点もこの番組の魅力だ。トンボの速さを車のスタントで体感する企画や、クレーンでつり上げて虫を取る企画の斬新な発想に驚かされた。

○　１０月９日(月)に再放送された岩合光昭の世界ネコ歩きスペシャル「京都の四季」(BSﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後4:00～5:29)は、ネコの魅力が詰まった番組だった。語りの宮﨑あおいさんも優しい感じでよかった。ネコが撮影場所にやって来ると信じて、ずっと待つカメラマンの努力に頭が下がるし、ネコのいい表情や関係性もよく描かれていた。

○　１０月１２日(木)のメディアタイムズ「思いを届ける新聞づくり」を見た。情報をテレビや新聞からだけではなく、自分が見たいポイントだけを選んで見る機会が増えていることから、子どものメディアリテラシーがより大切だと考えており、興味深く番組を見た。身近な学校新聞を導入としたのは分かりやすかった。全国紙は情報量が多く、全てを把握するのは難しいので、一面すべてが同じネタで書かれていた地方紙を題材に選んだのも適切だった。「インパクトだけを求めると誤解を生むこともある」一方で、「ただ詳しいだけでは伝わらない」と問いかける形で終わっていたが、メディアの影響力ゆえの危険について考えさせられた。教育の現場では、アクティブラーニングの一環で、伝え方に力を入れていると聞いているので、その点でも役に立つ番組だった。

○　１０月１８日(水)の「ＧＯ！ＧＯ！フィルムタウン～北九州発地域ドラマ～」(BSﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後10:00～10:59)を見た。地方局がドラマを作るのはいいことなので、今後も続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

「地域発ドラマ」は地方局から提案して制作している。地元の風土や地域の活性化がテーマになることが多い。東北では、平成２６年に秋田局が「ザ・ラスト・ショット」、平成２７年に仙台局の「独眼竜　花嫁道中」と山形局の、「わたしの青おに」、平成２８年は青森局が「進め！青函連絡船」を制作した。

○　今回の衆議院議員選挙について、「失望の連続」と言う人がいる。選挙の劇場化が進んだ結果、政治家が選挙に勝つために手段を選ばず右に行ったり左に行ったりすることが、有権者の不信を招いている。ＮＨＫはその中でも冷静に報道していると感じているが、マスコミ全体に劇場型選挙を加速させた責任の一端があるのではないか。関連して、今回の開票速報をどう行っていくのかについてもお尋ねしたい。

（ＮＨＫ側）

開票速報は、基本的には全国放送だが、地域の選挙結果を伝える放送枠が設定されている。あらかじめ設定された時間帯のほかでも、当選確実が出た場合など、各放送局の判断で全国放送を中断して地域の結果を伝えていく。特に宮城県の場合は県知事選挙も同日に投開票が行われるので、その結果も伝える予定だ。

○　日頃から、土曜日と日曜日のニュース番組が少ないと不思議に感じている。土日の午後９時台にニュース番組を開始した民放局もある。働き方も多様化し、サービス業を中心に土日や祝日が休日とならない人も増えている。ニュースはその日１日を振り返り、自分にけじめを付ける役割もあると思っているので、ニュース番組の編成については今後さらに検討を進めてほしい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成２９年９月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成２９年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成３０年度の番組改定について意見交換を行った。視聴番組のみちたん～ああ！すばらしきセカイ～「爆笑！涙ポロリの１７回目」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役人事部長)
副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜平成３０年度の番組改定について＞

○　これまでもスポーツ中継を数多く放送しているが、テニス、ゴルフ、野球、バドミントン、卓球など、世界レベルで活躍する日本人選手も増えているため、さらに力を入れて放送して欲しい。早朝の時間帯であっても、ＢＳで放送するなどして今後もぜひ継続してほしい。

○　「ブラタモリ」で、７月８日には弘前を、９月２日には十和田湖・奥入瀬の話題を取り上げていた。このような形で、東北をアピールする番組をできるだけ多く放送していただきたい。

＜みちたん～ああ！すばらしきセカイ～「爆笑！涙ポロリの１７回目」
（９月１４日(木)放送）について＞

○　一般的に東北の人には、堅苦しいイメージがあると思うが、それを覆すような人が次々に登場し、笑いと驚きの番組だった。今回は４つの話題を取り上げていたが、その中でも「みちのくワッショイ！」宮城県塩竈市浦戸野々島の「野々島の花火大会」は、島民のご祝儀で花火を購入し、打ち上げも資格を取った島民が行うという手づくりの大会で、ほのぼのとした本当にいい内容だった。花火の郷愁を誘うような情景を非常に美しい映像で切り取っていて、映像もすばらしかった。取材対象を探す苦労が感じられるが、東北の隠れた魅力とパワーをこれからも紹介していってほしいと思う。

○　野々島の花火大会以外の話題については、取材が浅いのではないかと感じた。コンセプトや取材対象の選択方法にもう少し統一感が必要ではないだろうか。特に「みちのくディープグルメ」で紹介したたこ焼き移動販売の話題と「みちのくディープピープル」で紹介した十和田湖のルパン三世こと菅原定春さんについては、取り上げる意味をもっと明確にして欲しかった。地域への波及効果を考慮して取材対象を選ぶべきだと考える。

○　菅原さんについては、観光客とのやりとりをうまく撮影していた。一度通り過ぎた観光客が菅原さんに会うために戻ってくるシーンがあり、菅原さんを象徴する場面をよく捉えていた。

野々島の花火大会は非常に感動的だった。島の人たちが、自ら花火を上げるための資格を取ったり、子どもたちがちょうちんの準備をしていたり、伝統を守る島の暮らしが紹介されていてとてもよかった。

また、ナレーションは、田中要次さんが担当している。東北地方向けの番組なので、地元密着という点では、東北出身の方がよいのではないかと思った。

○　ことし１月１３日（金）のみちたん「温泉スペシャルで１０回目」（総合 後 7:30～8:43 東北ﾌﾞﾛｯｸ）は、東北には探せばたくさんの魅力があるということが番組のメッセージとして伝わってきた。しかし、今回はコンセプトがよく分からず、メッセージも伝わってこなかった。実際に制作に携わっている方に何を伝える番組なのかお聞きしたい。今回は、人物の紹介が多く、実際に紹介された場所に行ってみたいと思わせる内容ではないと感じた。ただ、見ていると癒やされる部分があり、また見たいと癖

になる人もいるのではないかと思う。

また、９月２日（土）みちたん５ｍｉｎ～大好き東北～「ディープミュージアム　秋田　田んぼの中の怪しいギャラリー」（総合 前10:50～10:55 東北ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。「みちたん」に出てきた話題の一つをコンパクトにまとめて紹介してある５分番組だった。おもしろい部分を切り取って分かりやすくまとまっていて見やすかった。

「みちたん」で取り上げる話題を探すのは、苦労が多いのではないかと感じた。

○　全体を通して、のんびりしたトーンで、夜に見る番組としては見やすいという印象を受けた。野々島の花火大会は、大会運営のまとめ役を先輩から若い世代に引き継ぐシーンがとてもよかった。多くの地方で地元の伝統継承が課題になっている中、共感できる話題の取り上げ方だったと思う。今回は、土地に愛情がある人物を中心に取り上げていたが、人を取り上げることで、その土地に親近感やふるさとへの郷愁を誘うことにうまくつながっていた。

ナレーションは田中要次さんと山家美枝子さんの２人が担当している。読み手が変わることで雰囲気が変わり飽きずに見られるいい演出だと思った。

また、小さな子どもがいる家庭では、夜、音量を大きくできないため、字幕があるとより見やすくなるのではないだろうか。

○　４つの話題の中で「野々島の花火大会」は、とても素晴らしい内容だった。もう少し長く時間をとって内容を深めてもよかったと感じた。

時間帯について、午後１０時２５分から１０時５０分は非常に見づらい時間だと思う。「ニュース７」の後に編成した方が見てもらいやすいのではないかと考える。

○　「みちたん」は平成２８年４月２３日に番組が始まり、今回が１７回目。当初はガイドブックに掲載されていないあまり知られていない場所を取り上げていて、ぜひ行ってみたいと思わせる内容だった。今回は人物を中心に紹介していて、その場所に行ってみたいと思わせる内容ではなかったように思う。

「みちのくトワイライトゾーン」で通称かっぱおじさんの運萬治男さんが登場したときには、あまりにも有名な人なので、紹介する話題がなくなってしまったのかと心配になったが、そのあとにかっぱのオブジェが置いてある「蓮池の丘」が紹介されて安どした。ネタを探す苦労が感じられた。

野々島の花火大会は、島民がご祝儀を持って見に行くという手作りで温かい話題で、涙しながら見た。「みちたん」ではない番組で取り上げてもよかったのではないかと感じた。

本放送が木曜の午後１０時２５分から、再放送は土曜の午前１０時５分からだが、どちらの視聴率がいいのか。夜間の放送であれば、もう少し遅い時間にして、もっとディープな深みのある内容にすることもできるのではないだろうか。

○　安心して構えないでゆったりとした気持ちで視聴できる番組だった。普通の番組ではなかなか取り上げないような場所や人を取り上げていて、独特の雰囲気を感じた。通常の紀行番組はタレントやアナウンサーが各地を訪問し、人や文化を伝えているが、この番組の登場人物は基本的に地元の方々のみ。そこにスタッフがその場所を訪ねる場面が入ったり、インタビューの問いかけの声が入るなど、スタッフの存在が非常にいいアクセントになっていた。

野々島の花火大会は、懐かしさと郷愁を感じさせる内容だった。誰しも心のどこかにふるさとへの思いを抱いていると思うが、野々島の人たちが一体感を持って花火大会を行っていることが非常にうらやましいなと感じた。新会長と前会長が握手するシーンがあったが、非常にほほえましかった

また、菅原さんについては、職業人意識というかプロ意識が強くて、十和田湖に行ったら会ってみたいと思うほど興味を引かれた。

この番組は東北のディープな場所や人を紹介する番組だが、最終的にはそこに生きる人にスポットを当てている。魅力ある人を紹介することで東北のよさが伝わる番組になっている。次回も期待したい。

（ＮＨＫ側）

以前にも仙台局で勤務した経験があるが、今回「みちたん」という番組に関わり、まだまだ知られていないものがたくさんあることを痛感した。そういった面を番組を通して発信していきたいと考えている。

取り上げるネタについて、一般的な紀行番組では取り上げない場所や人を紹介しているので、見る人によっては共感できない、別に行きたくないと思うことは当然あると理解している。しかし、共感されないから取り上げないとなると、ＮＨＫの従来型の番組と同じになってしまう。共感できる人が仮に少なくても、その土地で愛されている人の魅力を伝えることに意味はあると思っている。

何を伝えたいのかという部分について。野々島の花火大会については、皆様が感じてくださったとおり、私たち制作側もいい話になると考えていたので、見た人と同じ様に感じていただけたと思う。遠野のかっぱの彫刻については、私も最初ディレクターから相談を受けたときに、これはどうやって見たらいいのだろうかと正直思った。それでも紹介しようと思った

のは、農家の方が作った彫刻でも、近所の人が見に来るという話があった。観光客がたくさん来る場所ではないが、地元の人に認知されていて、少数であっても支持されている場所だと分かったので、取り上げた。「みちたん」で取り上げる場所はＮＨＫの番組に普通出てこない場所が多いが、それを積み重ねていくことで、東北のある種全体像を番組を通して描いていきたいと考えている。回数を重ねるごとにネタ探しが難しくなってきているが、視聴者から情報提供をもらい、そこから番組に発展させることもある。今後もインタラクティブなところはどんどん取り入れて番組をよりよくしていきたいと考えている。

視聴率について、今回は本放送と再放送はほぼ変わらない数字だった。これまでを相対的にみると、木曜の夜間のほうがいい数字が出ている。やはり夜の方が番組のトーンに合っていると考えている。

＜放送番組一般について＞

○　９月１日(金)のクローズアップ東北「台風１０号から１年」はすばらしかった。昨年の台風１０号で大きな被害を受けた岩手県岩泉町の復興に向けた動きを、丁寧に取り上げていた。一軒ごとの注意点を示した防災マニュアルの作成といった、地域の防災意識を高める取り組みは、全国で参考にできるのではないか。また、産業やコミュニティーの再生についても詳しく取り上げていた。防災と過疎、高齢化は全国共通の課題だ。こうした番組を全国で放送することで、各地の課題解決をサポートできるのではないか。

○　９月１５日(金)のクローズアップ東北　震災ドキュメント「今こそ“言葉”を」には感銘を受けた。震災後の苦しみ、葛藤を言葉にして伝えていこうとする仙台短編文学賞の呼びかけには、今だからこそ共感できる。一方で、芥川賞を受賞した盛岡市の沼田真佑さんのインタビューは、震災の話題につなげるために一部分だけ抜き取った印象を受けた。東北を見渡すと、岩手県の作家たちが刊行した「１２の贈り物」や、震災を扱った短編集「あの日から」、柏葉幸子氏の「岬のマヨイガ」、和合亮一氏の「詩の礫（つぶて）」など、優れた作品が多くあるので、この番組が宮城や仙台に固執しすぎたかもしれない。東北が経験してきた災いの歴史が、文学にどう表されてきたかを考察し、総体としての東北文学を示すことができれば、より普遍性のある番組になったのではないか。

○　９月１５日(金)の「クローズアップ東北」を見て、被災者の心の復興のために、寄り添うこと、共感することが大切だと感じた。震災の記憶を未来に残す方法はいくつ

かあるが、被災地の人々が何を思ったのかを伝える方法としては、文章がもっともふさわしいと思った。作家たちが、時間の経過とともに“思い”を“言葉”に昇華させていく経緯や、心の移ろいが丁寧に描かれていた。震災を扱った番組を見ると、当時を思い出して心が乱れることもあるが、この番組は穏やかな気持ちで見られた。作家たちの“言葉”によるものなのかもしれない。こうした視点で震災を捉えた番組は初めてだったので、今後も多様な視点から多くの方々の思いを伝えてほしい。

○　７月９日(日)から８月２７日(日)まで放送された「プレミアムドラマ　定年女子」を見た。一般的に映画やドラマ、舞台は、小説と異なり演じている俳優の人生や芸歴が二重写しのように見える部分があり、作品に相乗効果を与えることがある。今回、特に主演の南果歩さんが、役柄にオーバーラップして見えた。５０代が抱える難題が次々に出てきたが、明るくパワフルに解決していく姿は“中高年のトレンディドラマ”とも呼ぶべき内容で、好感を持った。元気づけられた女性も多かったのではないか。その一方で、出てくる男性たちは軽薄な感じがして共感しにくかった。

○　７月１６日(日)の最後の講義「ランディ・パウシュ教授」(ＢＳ１　後10:00～10:49)は、これほど感動したテレビでの講義は初めてだった。カーネギーメロン大学で2007年に行われた講義が紹介されたが、人生をどう生きるかとか、前向きに現実に向き合う姿がすばらしく、いわゆる専門分野以外の一般的な話題についても、基本的な内容だったが心に響いた。百田夏菜子さんのナレーションも優しい感じが出ていてよかった。「スーパープレゼンテーション」にも勉強になる回があるので、こうした番組をこれからもＮＨＫで放送してほしい。

○　７月２３日(日)と３０日(日)の「ＮＨＫスペシャル」は「列島誕生　ジオ・ジャパン」として、大地の動きを取り上げた。東北では、蔵王山の火山性微動もあることから、地質や地盤に対する関心が高まっており、期待して見た。絶景と呼ばれる各地の美しい映像とすばらしいＣＧはさすがで、ＮＨＫならではだと感心した。和久田麻由子アナウンサーのナレーションも内容の理解を助けていた。番組では「４つの事件」と呼んでテーマを設定していたが、「事件」ということばには犯罪的なニュアンスがあるので、この番組にはそぐわない気がした。また、「ジオ御膳」と呼ぶ定食をそれぞれのテーマの導入部分に使っていたが、ずっとスタジオに置いておくと乾燥してしまうのではないかと気になった。それぞれの事象に「進撃の巨石」「海の果てまでイッテぎゅ～」など、民放の番組や漫画のタイトルをパロディーにしたキーワードが付けられていたが、もっとオリジナリティーのある言い方はできなかっただろうか。大河ドラマ「おんな城主　直虎」のサブタイトルにも言えるが、変にこびることなく、もっときぜんとしてもよい。番組内容がアカデミックだったので、コメンテーターも芸能人で

はなく専門家を多く招いた方がよかった。内容をブラッシュアップして４つのテーマを１本に収めた番組も見てみたい。

○　８月４日(金)と１１日(金)の「奇跡のレッスン」は、女子サッカーがテーマだった。埼玉の公立中学のチームが舞台だったが、こうしたチームをよく見つけてきたと感心した。子どもたちは、カメラの前でものおじすることなく話してくれたが、制作スタッフとの信頼関係があるからだろう。初めは思春期特有の面はゆさや斜に構えた部分もあったが、コーチのモニカ・シュタープさんが、本音をうまく引き出し指導した指導が印象深かった。彼女自身は「自分自身に火が付いて初めて子どもに“熱”が伝わる」と話していたが、サッカーを越えた、人間性についての指導はさすがだとうならされた。大人としてのあり方や身の処し方を考えさせられるすばらしい番組だった。

○　８月１５日(火)のＮＨＫスペシャル「戦慄の記録　インパール」(総合 後7:30～8:43)を見た。平成５年のＮＨＫスペシャル　ドキュメント太平洋戦争　第４集「責任なき戦場～ビルマ・インパール～」と双璧をなす出来で、終戦の日にふさわしい番組だった。補給を軽視して、なせば成るといった精神論に頼り、責任の所在もあいまいだった旧日本陸軍の病巣が招いた最悪の戦いだった。当時少尉だった斎藤博圀さんの日記と回想録を軸に描いていたが、最後に本人が登場したシーンには驚いた。「兵隊の命を軽んじていた。悔しいけれど、その内実を知っちゃったら辛い」ということばが心に残る。

○　８月２０日(日)のＮＨＫスペシャル「戦後ゼロ年　東京ブラックホール　１９４５－１９４６」(総合 後9:00～9:59)は、現代日本の原点を映し出していた。学校で習う歴史は政治史が多いが、この番組は庶民の歴史と呼ぶべき内容で、闇市や浮浪児、ＲＡＡといった当時の生活や風情を印象深く伝えていた。当時の映像に山田孝之さんを違和感なく合成する技術にはうならされた。これから東京オリンピックに向けて盛り上がると思うが、未来を担う若い世代や、外国人旅行客にも東京の歴史を知ってほしい。

○　８月２６日(土)の「秋田大曲　全国花火競技大会２０１７」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後6:50～9:50)は、不必要なアナウンスや音楽を排し、飽きることなくライブ感覚で見られるすばらしい３時間だった。映像も美しく、雲もなくここ数年で一番よかった。今回は、前日までの大雨で開催が危ぶまれていたので、開催にこぎ着けた苦労や意義を、もっと時間を割いて伝えてほしかった。

○　８月２８日(月)から９月１日(金)まで放送された「オトナのストレッチマン」(Ｅテ

レ 後7:55～8:00)は楽しい番組だった。初代のストレッチマンが相変わらずのハイテンションで出演しており、彼の根強い人気をうかがわせる。

○　９月３日(日)の「奇跡のレッスン」(ＢＳ１ 後10:00～10:50、後11:00～11:49)は新体操がテーマだった。ロシアのコーチが連れてきた教え子と、日本の子どもたちのレベル差は歴然としていたが、いい刺激だったと思う。とにかく笑いなさいとか、あなたたちは女優なのよ、といったアドバイスを受け、最後の発表会で明るい笑顔で演技している子どもたちを見て、わずか数日の間にここまで変わるのかと感心した。こうしたチャンスを多くの子どもたちに与えられればいい。

○　９月８日(金)に、秋田県で最大震度５強を観測する地震があった。ＮＨＫでは、秋田駅前のほか、大仙市に向かう車中の映像を迅速に伝えていた。地域の者としては、映像を見るとそれがどこなのか分かるので、被害がないこと、通行できることをすぐに確認できて安心した。

○　９月９日(土)のＮＨＫスペシャル　ＭＥＧＡ　ＣＲＩＳＩＳ　巨大危機Ⅱ～脅威と闘う者たち～　第２集「異常気象・スーパー台風　予測不能の恐怖」では、東京にスーパー台風が上陸する最悪のシナリオをドラマ仕立てで描いていたが、リアルで恐ろしかった。特に、河川の氾濫と高潮で多くの人々が逃げ遅れ孤立する状況が衝撃的だった。人工知能による台風の進路予想も取り上げられたが、気象予測の分野にもＡＩが進出していることを改めて感じた。

○　９月１０日(土)のＮＨＫスペシャル「スクープドキュメント　沖縄と核」には驚いた。核弾頭を搭載したミサイルが誤って水平発射され海に落下した衝撃的な事故は、放送後に新聞各社が「ＮＨＫ報道に波紋広がる」といった記事を掲載するなど、世の中の関心も高かった。冷戦の激化や核開発競争を背景として、米国の戦略上、沖縄がどんな位置に置かれていたかを、歴史の経過を丹念にたどり、説得力を持って分かりやすく伝えていた。今の沖縄の問題をどう読み解くべきか、歴史的な視点を視聴者に与えてくれた。

○　９月１５日(金)の新日本風土記「鳥海山」は、美しさに見とれた。鳥海山は眺めが富士山に似ていることから、山形県側から取り上げられることが多いが、この番組では秋田県側についてもしっかり触れられていた。山の東西南北それぞれの方角で地域に愛され、自然の恵みをもたらしていることが伝わるすばらしい番組だった。きれいな映像で永遠に残る番組作りをこれからも期待している。

○　９月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「黒潮～世界最大　渦巻く不思議の海～」は、映像の美しさに目を奪われた。一本釣りで釣り上げられるカツオの目線で海の中を見られた点が興味深かった。制作に長期間を要し、費用も相当かかっていることがうかがえる。民放にはなかなかできないことなので、ＮＨＫならではの番組だ。一度の放送で終わらせるのはもったいないので、さらなる展開を期待したい。

○　９月１８日(月)の「ＮＨＫニュース７」は、各地に被害をもたらした台風１８号について詳しく伝えていた。小さい子どもが家にいて、テレビを付けっぱなしにできないので、キーワードや地図を効果的に用い、短い時間で全体の被害を分かりやすくまとめたこのニュースは見やすかった。「スクープＢＯＸ」に寄せられる映像には迫力があったが、本来であれば避難を優先すべきところを、テレビで取り上げられるために危険を冒しているのではないかと思われる映像も中にはあった。投稿を呼びかける際に、もっと注意喚起があってもいい。このほか、衆議院議員選挙に向けた動きを伝える項目では、安倍首相の発言が時系列で整理されていて、これまでの流れが把握しやすかった。また、無人コンビニの本格参入に関する項目では、賞味期限切れの商品の扱いについても触れられており、視聴者の関心に応えていた。

○　「きこえタマゴ！」はおもしろい番組だ。出演する子どもは小学３、４年生が多く、彼らがこの時間帯にラジオを聞いていることに驚いている。回文や後出しじゃんけんのコーナーも中身が濃くておもしろい。司会者のかもめんたるの２人が、上から目線でなく、子どもたちと対等に会話をしている点が成功の秘けつだと感じている。「夏休み子ども科学電話相談」とはまた違った魅力のある番組だ。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成２９年７月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２０日(木)、パレス宮城野において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、視聴番組の「どんとこい！人口減少～仕事がないってホント？～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、８月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	伊藤　一弘	(ＮＰＯ法人かなぎ元気倶楽部　専務理事)
副委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役人事部長)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	西内みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜どんとこい！人口減少～仕事がないってホント？～(総合　７月１４日(金))について＞

○　人手確保がうまくいっている会社とそうでない会社を対比するように紹介されたが、困難に直面している会社の方がスタジオに招かれていたのは少し気の毒に感じた。新人に「お世話係」を設けることは根本的な解決策にはなっていない気がする。仕事のやりがいは、夜中まで働いて完成させた達成感や、チームの結束力などからも得られるので、ワークライフバランスの実現のみが唯一の解決策ではないと考える。

一方で、地域に貢献できる喜びや、競争が少なくやりたいことができる環境は、地方ならではと言える。若い人がその意識を持つことが大切だと示された点がよかった。

番組の最後で、昨年１２月２日(金)に放送された、「どんとこい！人口減少～おらほの村は何守る？」に登場した青森放送局の藤原悠紀ディレクターが登場したが、今回の番組テーマが持つ重い雰囲気を和らげる効果があった。

○　人手が確保できない要因について、採用側と学生側の双方に意識の隔たりがあると、

事例を基に分かりやすく示していた。根本的な解決策がある問題ではないので、もどかしく思いながら番組を見た。最後に、コンサルタントの大塚万紀子さんが、「企業も学生も変わらざるをえない」とコメントしていたが、言うは易（やす）く行うは難しであり、やや現実離れしていると感じた。地域に貢献できると言われても、都会に暮らす若者がふるさとに戻りバスの運転手になることは簡単ではないし、専門知識を生かせる仕事が地方にあるとも限らない。東北においては、企業と若者のミスマッチはもはや解消できないほど厳しい状況にある。さらに、実際の仕事を経験したことがない学生に、何がしたいのか問うことも酷ではないか。

新しいことにチャレンジする中小企業の事例が取り上げられた点はよかった。多様な職種を経験させ新人の定着率を上げる岩手県北上市の建設会社の取り組みや、女性社員を大事にする青森市の自動車販売店の取り組みはとてもよい。ワークライフバランスについては、長時間労働の是正など、課題解決を目的に始める企業が多いが、本来的には休みの質を上げて仕事の質も高める前向きな取り組みだと理解している。番組はその事例を丁寧に示し、うまくまとめていた。

○　日本創成会議が出したいわゆる「増田レポート」を受けて、地方自治体の消滅が広く議論されるようになったが、東北では以前から過疎と人口流出が課題だった。事態を打開する有効な解決策はいまだ見いだされていないが、番組はその難しいテーマに挑んでいた。

取り上げられた事例のうち、建設会社と食品商社の取り組みは、地元企業の新しい可能性を示すモデルケースだ。食品商社の、社員の能力を生かして新たな仕事を作っていく取り組みは、考えてみれば当たり前だが、優秀な社員を集め個性と能力を生かすことが成功への鍵になると再認識できた。

企業側の意識改革なくして人手不足は解消できないと番組は主張したかったのだと理解しているが、それがうまく伝わる作りになっていた。ワークライフバランスに関して、コンサルタントの大塚さんが、経営側も働く側も変わることが必要だと指摘していたが、適切で説得力があった。地方の企業は従来のあり方を変えなくては、ますます厳しい状況に追い込まれる。今回紹介された例のほかにも、挑戦している企業の事例を機会を捉えて取り上げることで、首都圏も含めた学生達に東北をアピールできるのではないか。

○　事例と課題、問題点とその答えと、番組はきれいにまとめられていた。重いテーマで解決は難しいが、入りやすい内容だった。秋田県大館市の路線バス会社では若い運転手が少なく、地元住民の大切な足を今後も維持していくことが切実な問題だ。同じ秋田県で魅力的なデザインを手掛ける食品商社が取り上げられたが、番組を縁に、例えば採用のホームページやＤＶＤ制作などの面で連携するといった動きが出てくれ

ばおもしろい。

会社が人を選ぶ側から、人から選ばれる側に変わってきていることを痛感した。応募がなかなか来ないのは、会社に魅力が少ないからなのかもしれない。女性の活躍に取り組む企業も紹介されたが、職場外でメールやＳＮＳなどを扱うことで、家庭にしわ寄せが及ばないだろうかと疑問を抱いた。コンサルタントの大塚さんは、「仕事の量をこなすよりも、アイデアの質を高めるために私生活を充実させることが必要」と述べていたが、精力的に働く男性はどういった感想を持ったのか聞いてみたい。

秋田県は人口減少のモデル県のようなイメージがあるが、これからも番組を通じて生の声を取り上げ続けてほしい。秋田の活性化がひいては東北全体の活気につながればいい。

○　番組の最後に、藤原ディレクターが自らの体験と思いを語る場面があったが、企業と学生との関係は、都会とふるさととの関係に帰結するのではないかと感じた。それを踏まえて改めて番組を見たが、若者が故郷を出る理由として示された働き口や仕事の少なさ、町の活気や魅力の少なさ、子育てや教育の環境の３点のほかに、なぜ都会を目指すのかという視点が欠けていたように思える。都会に行って得るものと失うもの、ふるさとにいて得るものと失うもの、その視点を持たないと、なぜ人口減少なのかというテーマに入り込めないのではないか。企業の事例は、ふるさとに定住させるためのものではなく、全国どこの企業でも取り組むべき課題だ。藤原ディレクターは都会とふるさとの生活をどう両立させるかという視点からコメントしていた。難しい課題だが、それを聞いて安心できた。石川啄木は「田園と思慕」というエッセイで、「思慕すべき田園を喪ふと同時にその美しき良心をも失つてゐるのである」と書いた。番組を通じて、人間の生き方としてのふるさととは一体何なのかという問題を浮かび上がらせてほしかった。

○　出演していたのは、ほとんどが四年制大学の学生だった。東北では短大や専門学校に通う学生も多いので、彼らの思いや状況も取り上げてほしかった。また、地元に残ることを選んだ若者たちの思いも知りたかった。紹介された企業経営者には男性が多かったが、女性の事例も見てみたかった。

人口減少がもたらす最も大きな課題は、生産人口の減少だ。バス運転手の高齢化が例として挙げられたが、将来的な技術革新により、高齢者でも運転できる車両が開発されたら、課題解決の一助になるかもしれない。

いまや日本全体の課題である人口減少に関して、東北から継続的に問題を提起していくことで、働き方改革が進み、女性や高齢者の労働環境が整備されるよう期待する。同時に、地元に魅力的な企業があることを若者にもっと知ってほしい。

○　東北の企業の現状や問題点を浮き彫りにした興味深い番組だった。取り上げられた３社の事例は参考になる。人手不足から新規採用、雇用の維持、女性の活躍など、雇用関係全般のテーマを扱ったが、やや総花的にも思えた。一つのテーマに絞って掘り下げる構成でもよかったのではないか。コンサルタントの大塚さんの話は的確だったが、ワークライフバランスの本質について、もう少し詳しく聞きたかった。

会社に入って、自分がやりたいと思っていた仕事ができるとは限らない。その現実を伝えてほしかった。番組で紹介された、さまざまな職種を担当させ経験を積ませる建設会社の取り組みは興味深いが、現実的には余裕のある企業にしかできない取り組みだ。

番組の後半では、出演者が議論から気付いたことをボードに書いて掲げたが、放送で取り上げられたのは一部の人だけだったので、全員が何を書いたのか紹介してほしかった。

最近話題になった、経済産業省の次官・若手プロジェクトの資料「不安な個人、立ちすくむ国家～モデル無き時代をどう前向きに生き抜くか～」の中では、人生100年という言葉が使われた。そうした時代にあって、人口減少や雇用の問題、ワークライフバランス実現などの課題にどう切り込んでいくべきなのか、今後の番組でも積極的に取り上げてほしい。

○　若者を地方に引き留めるためには、業務改革や働き方改革が必要だと検証された。働く人にとって魅力ある企業にすることが、人材難の解消にもつながる。中小企業の経営者にとっては、人材の確保が最大の課題だと捉えられており、その解決策を具体的かつ的確に示していた。これまで従業員が抱えていた問題に対して、経営者も目線を合わせて改革に取り組み、納得できる働き方を実現していくことが大切だ。重いテーマだったが、若者の本音を引き出すソフトな番組作りだったと思う。彼らの意見に戸惑いやもどかしさを覚える企業側の反応が、現実の厳しさを表しており、番組構成の妙を感じた。

○　夢を持って専門分野を学んでも、必ずしもそれを生かした仕事に就けるとは限らず、固執することで柔軟性がなくなる。コンサルタントの大塚さんが指摘していた、若い人も選択の幅を広げてはどうかという提言は貴重だ。その流れで見ると、秋田市の食品商社の、やりたい仕事がなければスキルを生かして仕事を作り出そうとする取り組みは興味深い。採用活動にあたって企業がアピールしたい部分と学生が求める部分は一致しておらず、双方に努力が必要だと改めて認識した。一方、東北では第一次産業が主力なので、その人材不足は、食料自給率を支える視点からも不安が残る。

「どんとこい！人口減少」シリーズの最終的なねらいについては、消滅の危険が高まっている地域がどう踏みとどまり、それを支えていくのかという点にあると考えて

いる。藤原ディレクターのように、村を出た人が外から見守る意識は大切だ。外にいてもふるさとを愛し、支えていける仕組みを、これからの番組展開の中で、さまざまな視点から紹介してほしい。

（ＮＨＫ側）

地方に仕事がないというテーマは以前から提起されてきたが、誰もが納得できる解決策はないので、取り上げるには勇気が必要だった。ヒントになる企業を紹介する際には、きれいごとで終わらないよう注意したつもりだが、指摘いただいた部分もあったので今後に生かしたい。意見をいただいた「ふるさとを失う」という視点は、人口減少社会というテーマを扱う上で非常に重要だと考えており、これからの番組制作で参考にしたい。うまくいっている企業を見ると元気になるという意見は、制作者にとって励みになるものだ。引き続き、東北の元気につながり、若者が戻ってくるといった事例、ヒントを見つけていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月１６日(金)の再発見いわて　第二回「つなぐ　～北上　青春の鬼剣舞～」(総合後7:30～8:00 岩手県域)は、若者たちの伝統芸能に対する思いがよく描かれていた。部長の小原夏海さんが「かっこいいだけではなく、鬼剣舞の意味、深さを知ってますます好きになった」と話していた部分が特に印象的だった。伝統芸能は高校生たちが取り組むことで、地域の宝として認知されていく。ディレクターのコメントに「聞き慣れない部活動」とあったが、岩手県では高校に伝統芸能の部活動があるのは珍しいことではない。ナレーションは初々しさがあった一方、今後のさらなる成長に期待したい。これは質問だが、各局で採用しているキャスターの指導、育成はどのように行っているのか。

（ＮＨＫ側）

キャスターの指導については、東北各局のキャスターが仙台に集まり、ベテランのアナウンサーによる指導を受ける研修会を開いたり、仙台のアナウンサーが各局を訪ねて指導する場を設けたりしている。東京の放送研修センターでは、全国のキャスターを集めた研修会を定期的に開催し、ＮＨＫの番組のクオリティーを保てるよう努めている。

○　６月２３日(金)のクローズアップ東北「震災を知る～名取北高校演劇部 挑戦の日々～」は、震災と向き合う必要性が伝わってきた。顧問の安保健先生の「宮城県の地で

震災を知らないことはある意味で罪に近い。被災者の気持ちや生き方を考えることが大切だ」という言葉の意味は重い。生徒たちも、現地の方から直接話を聞き震災を疑似体験することで、演技を一層磨こうとしており、その姿に心打たれた。

○　６月２９日(木)の「ひるはぴ」で、台湾の放送局との映像交換によるコーナー「台湾散歩」が放送された。台湾では「おいしい」や「かわいい」といった日本語が発音もそのまま使われており、日本統治時代を知らない世代にも日本語が浸透している点が興味深い。知っているようで知らない互いの日常を知ることで、観光面での交流がより活発化すればいい。月１回程度の放送とのことだが、次回放送日を予告してほしい。また、日本の映像が台湾で放送されていることを、もっとＰＲしてはどうか。

○　６月２９日(木)のみちたん～ああ！すばらしきセカイ～「ゴーイングマイウェイで１５回目」(総合 後10:25～10:50 東北ブロック)は、肩に力を入れることなく自然体で見られる番組だった。仙台市の肉屋さんは、普通に暮らしていれば訪ねようと思うことはなかったが、番組を見て興味がわいた。これもテレビの力だと思う。

○　６月３０日(金)のクローズアップ東北「こどもたちのＳＯＳをつかめ　～“いじめ自殺”をくい止めるために～」では、ゲストの尾木直樹さんが、いじめられる側の目線に立ったコメントを貫いていた点に共感した。厳しい状況から逃げられるよう支援していくことが大切で、内容の濃い番組だった。

○　全国高校野球選手権大会の各県大会が行われているが、ＮＨＫではラジオ放送を行っているところもある。ラジオで野球中継を聴く習慣を持たない視聴者もいると思うので、もっとＰＲしてもいいのではないか。

○　６月１４日(水)のハートネットＴＶ「震災を詠む２０１７」(前編)を見て、いまだ癒えぬ震災の傷の深さを改めて感じた。一方で、著名な歌人が短歌を選び評価する構成にどこかもどかしさを覚えた。むしろ、ゲストの生島ヒロシさんの感想はストレートで好感を持てた。番組で取り上げられたのは女性高齢者の作品が多かったが、独特の感性を持つ若い世代の作品も見てみたかった。

○　７月１６日(日)の明日へ　つなげよう　ふるさとグングン！「おいしい・楽しい・かっこいい！～アイヌ文化で地域おこし～北海道白老町」は、廃れてしまったかつての観光地域を、若い人たちが「あるもの探し」という視点で掘り起こしていく構成だった。熊本県水俣市に視察に行ったときに紹介された、元市長の吉井正澄さんが水俣病慰霊式で読み上げたコメントは、今取り組むべき震災からの復興にも通じるものがあ

り、感動した。番組全体を通して、国や自治体がしてくれることだけに期待せず、地域づくりに自助努力で取り組んでいこうとするメッセージが感じられた。９月１０日(日)まで、放送博物館では「東日本大震災　伝え続けるために」という企画展が開催されていると聞く。現地で取材した方の手記やメモから浮かび上がる衝撃や無念さを実際に感じるために、開催中にぜひ訪れたい。

○　毎年３月１１日が近づくと民放各局でも震災の特集が組まれるが、その時期だけでなく、定期的に福島のことを取り上げ、さまざまな角度から放送しているのはＮＨＫだけだ。震災当時小学６年生だった子どもは今年１８歳になる。地元で進学することを選んだ子どもたちのためにも、安心・安全で居心地のいい生活を守っていきたいと考えている。その点からもＮＨＫでの放送は有意義で、感謝している。

○　６月１１日(日)の小さな旅「緑の里　息吹あふれて～福島県　只見町～」は、美しい風景が取り上げられたすてきな内容だった。現在不通となっているＪＲ只見線は鉄道による復旧の方針が６月に示された。鉄道再開の折には多くの観光客に訪れてほしい。

○　６月２３日(金)のノーナレ「ミアタリ」(総合 後10:50～11:15)は、ナレーションを使わない斬新な手法がテーマに合っており、ドラマを見ているような力強さがあった。何より、主人公の大阪府警の森本等さんには圧倒的な存在感があり、彼の刑事魂を見事に浮かび上がらせた力作だった。スタッフの取材努力も感じられた。画面から人間の底力やプロフェッショナルな執念が伝わってきた。

○　６月２５日(日)の「特別巡回ラジオ体操・みんなの体操会」は、秋田県大潟村からの放送だった。数日前から村民があちこちで練習する姿を目にし、期待の大きさを改めて感じた。

○　６月２５日(日)のＮＨＫスペシャル「人工知能　天使か悪魔か　２０１７」は、広い分野で世界的な取材がなされており、勉強になる番組だった。ナレーションの林原めぐみさんは、過激とも思えるコメントを抑制的な口調で語っており、伝わりやすかった。

○　６月２５日(日)のＮＨＫスペシャルは興味深かった。ＡＩがみずから学習して強くなり、将棋の本質をつかみつつあると紹介されたが、ＡＩの進歩は将棋の世界だけの話ではない。タクシーの乗客予測や、株取引の分野にもＡＩが進出しており、優れたＡＩの開発がマネーゲームを制するとした解説にはうなずいた。これから、ＡＩはま

すます身近なものになるので、進歩のスピードを捉え、引き続き番組で報告してほしい。

○　６月２５日(日)のＮＨＫスペシャルは、将棋の佐藤天彦名人が電王戦で２連敗した衝撃的なニュースを振り返り、進化を続ける人工知能について報告された。他の分野でも、退職の予兆がある人を察知したり、裁判の量刑の参考にしたりするなど驚くべきケースも紹介された。昔の映画で人工知能が人間に反旗を翻すストーリーがあったが、ＳＦの絵空事でなく、現実にそうした時代の到来を予感させる。ＡＩとの共生は避けて通れない難しいテーマだ。これからも取り上げて伝えてほしい。

○　６月２６日(月)から３０日(金)まで「にっぽん縦断　こころ旅」で、山形県内が取り上げられた。ゆったりした進行で、安心して見られる番組でよかった。息を切らして坂道を登る場面が長く感じられた。そうしたシーンを放送するのであれば、もっといろいろな場所を紹介してほしかった。

○　７月３日(月)から７日(金)まで、「にっぽん縦断　こころ旅」は秋田県内の旅を放送した。火野正平さんの口調や言葉は味わい深く、自然の美しさと効果音が相まって、ほのぼのとした番組になり、見ていて温かい気持ちになった。

○　７月２日(日)の日曜美術館「最先端を走った鉄人～萬鉄五郎の格闘～」は、作者の生涯をたどって作品の変遷を見ることができた。作品の理解が深まると同時に、背後にあるドラマも楽しめる。彼の画風が変遷していった背景に、故郷の歴史と風土があるとの解説には説得力があり、地元の毘沙門天像や神楽の面の映像を入れた点も具体的でよかった。どんな芸術家も出身地の影響抜きには語れないと改めて感じた。「日曜美術館」は中高生の美術の授業を補って余りある内容なので、ぜひ薦めたい番組だ。

○　７月３日(月)のクローズアップ現代＋「日本人　迫る“テロリスク”～ダッカ・テロ事件１年～」を見て、もはや日本人もターゲットだという危機感を強く感じた。問題提起はすばらしかったが、安全対策の部分にもっと力を入れて取り上げてほしかった。その点では、２５分の放送時間は短く感じた。例えば、酒を出すレストランは危ないという指摘の後に、現実問題として、食事を取るためにはどこに行けばより安全なのかについて伝えてほしかった。

○　７月４日(火)のクローズアップ現代＋「徹底追跡　“最凶アリ”襲来」は、注意喚起の点でとてもよかった。海外の事例を紹介することで、水際で食い止める重要性がよく分かった。放送後も新たな発見事例が相次ぎ、番組が指摘したとおり重大な事象

になりつつある。今後もＮＨＫならではの追跡取材で、わかりやすく特集してほしい。また、ヒアリの生態について新たな報道が番組放送後に出ているので、更新された情報も広く伝えてほしい。

○　７月８日(土)の連続テレビ小説「ひよっこ」総集編(前編)(総合 後4:30～5:58)は、改めて前半を振り返ることができてよかった。ストーリー展開の中で、さまざまな地方出身者が出てくる点がおもしろい。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」で主人公の叔父の小祝宗男役を演じている峯田和伸さんが頑張っていると感じている。彼は山形県出身なのだが、役で茨城弁を話すときに、素の山形弁で話しているのだろうかと思う時がある。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」は、見れば見るほど味が出てくるドラマだ。登場人物の個性もそれぞれ豊かだし、主人公の独白と増田明美さんのナレーションをうまく組み合わせている点もおもしろい。昭和の古き良き時代を描いており、懐かしさや親近感を覚えながら見ている。

○　７月８日(土)のＮＨＫスペシャル「徹底解剖　藤井聡太～“進化”する１４歳～」は、デビュー戦の前から密着取材を続けてきたとのことで、先見の明に驚かされた。６月２５日(日)の人口知能を取り上げた「ＮＨＫスペシャル」に通じる点もあり、興味深く見た。将棋のルールを知らない人でも見られる番組を作ろうとした意図があるかもしれないが、羽生善治三冠との戦いで、桂馬を敵陣近くに動かしたシーンなどでは、盤面の解説がもっと詳しくてもよかった。

○　７月１０日(月)のクローズアップ現代＋「密着！下請けＧメン　中小企業いじめの深層」は、仕事が来なくなることを恐れて声を上げにくい中小企業の声を拾い上げる活動が紹介された。対面で話を聞いてくれる存在は心強く、よい仕組みだ。一方、番組の取材を受けた中小企業の方が、放送に出たことをきっかけに元請け会社から嫌がらせを受けないかと心配になった。放送後に問題が起こらないか、きちんとフォローしてほしい。

○　７月１０日(月)の「クローズアップ現代＋」は、下請け企業の厳しい実態に驚かされた。プライベートブランドの拡大によって、大量に納入できるメリットはあるものの、価格が安く利益がほとんど出ていない。豆腐に使う豆乳の量を減らすなど、品質の低下も招いている。他の製品でも同じことが起こっていると考えると恐ろしい。

○　７月１３日(木)のＳＯＮＧＳ「エレファントカシマシ」では、現在「みんなのうた」で放送されている「風と共に」を彼らが歌っていることが紹介された。ボーカルの宮本浩次さんがおよそ４０年前にも「みんなのうた」に出ていたエピソードも初めて知り、より深く興味を持つきっかけになった。爆笑問題の太田光さんとのトークも興味深かった。

○　７月１６日(日)のうまいッ！「甘くて赤い！初夏のルビー・さくらんぼ～山形県東根市～」では、現地での取材や、世界に売り出すために果肉を大きくする品種改良の取り組みにも触れられておりよかった。さくらんぼを食べた後、口から種を出すシーンをそのまま見せたシーンは、紙に包んで出すなどの配慮が必要だったのではないか。また、皮の食感を「歯応え」と表現したシーンも、言葉の選び方に違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

食べ物のレポートは特に難しく、見た目の印象や言葉の選び方にも配慮が求められる。タレントにも上手な方がおり、そのＶＴＲを見て研究し、アナウンサーがとっさのコメントや表情の作り方などを勉強する機会を設けるなどして、表現の改善に努めている。

○　７月１６日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　ディープ・オーシャン「南極　深海に巨大生物を見た」を見た。南極の海は寒い氷の下という印象しかなかったが、多様な生物が住んでいることを美しい映像で伝えてくれた。巨大な生物が食物連鎖でつながっていく様子は不思議な世界だった。こうした番組はＮＨＫならではだと思うので、今後も続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

南極では高感度の４Ｋカメラを深海に潜らせる技術開発を行った。特にこの分野では、いい映像だと世界的に評価されていると認識している。

○　７月１７日(月)の「夏バテ予防！スタミナ家族に福きたる！～平野レミの早わざレシピ第４弾～」(総合 前8:15～9:00、前9:05～9:29)は、ドタバタとした進行ながらも、徐々に料理ができ上がる展開がおもしろかった。レシピはホームページで見ることができ、番組を集中して見られた。

○　８月２６日(土)に放送される予定の「秋田大曲花火競技大会２０１７」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ後6:50～9:50)を楽しみにしている。当日現地に行けない方も、テレビを見て楽しめる

し、映像も年を追うごとにきれいになっているように感じる。

○　最近のＮＨＫには、「あさイチ」「ごごナマ」「シブ５時」など、タイトルが４文字の番組が多い。地域放送でも「ひるはぴ」「やまモリ！」「やまます」など、同じ傾向だ。「バクモン」「クロ現」「Ｎスペ」などの愛称もあり、ＮＨＫらしいと言えるかもしれないが、４文字にここまでこだわる理由があるのかと疑問に思うこともある。

○　今のＮＨＫの時代劇の映像はとてもきれいだが、かつてのフィルム制作の作品には独特の味わいがあった、時代劇という作風に映像の美しさが合うのか疑問に思うことがある。これからますます技術が進歩する中で、フィルム映画にあった時代劇の味わいが失われないかと心配になることがある。

（ＮＨＫ側）

国際展開するドキュメンタリー番組などでは、画面への没入感を出すためにあえて映像を少し汚すなどの処理を行うことがある。ＮＨＫでは、かつてフィルムカメラを製造していたメーカーの、大判の撮像板を用いたカメラを導入し、一部の番組で使っている。大河ドラマ「おんな城主　直虎」では、その撮像素子を用いたカメラを使い、適度なぼけ味やフィルムに近い色調を出している。ただ、すべての番組にそうした特殊なカメラを用いることはできないので、通常のカメラで撮影する場合もある。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成２９年６月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、７人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、空席となっている委員長の互選を行い、新しい委員長に伊藤副委員長を選出した。また、新しい副委員長には津田委員を選出した。

会議では、まず、視聴番組のクローズアップ東北「イカ不漁　現場からの報告」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、7月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	伊藤　一弘	(ＮＰＯ法人かなぎ元気倶楽部　専務理事)
副委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役人事部長)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	西内みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	畑中みゆき	(ＮＰＯ法人 High-Five　理事長)

(主な発言)

＜クローズアップ東北「イカ不漁　現場からの報告」(総合　６月２日(金))について＞

○　八戸でイカが取れなくなっていると知り驚いた。データを用いた説明は分かりやすかったし、漁業者と加工業者の嘆きの声も印象的だった。

スルメイカは九州付近の海域で生まれたあと北日本の沿岸まで太平洋側を北上し群れを作り、産卵のために日本海側を通って九州付近に戻ることが紹介された。日本海で他国の漁船に乱獲されている可能性が示されたが、そのことと八戸での漁獲量減少がどう結びついているのかがすぐには理解できず、より分かりやすい説明が必要だった。

イカの生態については、何を食べているのかさえ明らかになっておらず、養殖の実現はまだ困難が多いと感じた。ＡＩを活用した漁場予測の研究が紹介されたが、早く実現してほしい。

番組のまとめとして、専門家として出演した全国いか加工業協同組合の野々山浩

さんから、ＨＡＣＣＰの取得やほかの特産品との組み合わせが提言されたが、不漁そのものへの対策としては、やや的外れのようにも思えた。課題を提示して番組を締めくくるといった構成でもよかったのかもしれない。

○　一消費者としては、スーパーで見かけるイカの値段が少し高いと感じる程度だったが、漁業者だけでなく加工業者も窮状に陥っている実態がよく分かった。取材を担当した八戸支局の髙橋謙吾記者は、タイムリーな話題に鋭く切り込んでいたと思う。

不漁の原因として、海水温の変化と外国船による乱獲が複合しているとした分析が示されたが、分かりやすくて納得した。外国船による乱獲については、イカだけでなくサンマやサケについてもその可能性が指摘されている。水産庁など国の関係省庁が、どういった対策に取り組んでいるのかについても、番組内で触れてほしかった。

ＡＩによる漁場の予測は効率的である反面、持続可能な漁業に対して悪影響が出ることも危惧される。導入にあたっては、漁獲高の制限といった資源管理がより重要になってくるだろう。東北において水産業はすそ野が広い基幹産業なので、これからも大事なテーマとして取材を続けてほしい。

○　スルメイカが日本人の食文化に深く根づいていることを紹介した番組の導入部分は適切だった。海水温をはじめとした環境の変化は、イカに限らず、日本の漁業全体に関わる切実な問題だ。ＡＩを活用した漁場予測の研究が紹介されたが、相手は自然なので、決して楽観はできないのではないかと感じた。

まとめの部分で、地域の特産品と組み合わせるアイデアが挙げられた。解決策を提示して番組を終えたいとする制作側の意図かもしれないが、番組全体の流れの中では、やや唐突にも感じられた。

東北の産業全体を活性化していくためにも、第１次産業を取り巻く諸問題について、積極的に取り上げ続けてほしい。

○　イカの不漁を切り口として、地球環境の問題をはじめ、私たちが考えなければいけない問題を提起するまとめ方をした方がよかったのではないか。問題に広がりを持たせることで、教材としての活用も考えられる。今回は、対策として、６次産業化に落とし込まれていたような気がして残念に感じた。

○　全国紙でもあまり取り上げられない問題を、ＮＨＫが掘り起こして伝えたことに価値がある。制作担当者には、このテーマを取材しようと思ったきっかけをお尋ねしたい。

国が漁獲高の上限を定めていることが紹介されたが、漁獲高の減少に対応して、この規定も変動させているのか、より丁寧な説明が必要だと感じた。もし仮に変動させ

ていないとすれば、イカ漁業自体が負の連鎖に陥ってしまうおそれがある。

他の委員と同じく、番組のまとめ方には違和感を覚えた。また、記者のコメントはキャスターでも言える内容にも思え、両者の立ち位置がよく分からなかった。例えば、専門家の発言に対して、記者が切り込むといった構図であれば、それぞれの立場がより明確になったのではないか。

○　自然を相手にする産業の難しさを改めて感じさせられた番組だった。ＡＩの活用といった、効率的な漁業への対策は示されたものの、養殖が困難であることも含めて、特定の魚を取り続ける漁業は難しい産業だ。スルメイカを毎年一定量確保することが難しい以上、代替品を検討することは大切だ。スルメイカだけではなくサンマやハタハタも漁獲高の減少が伝えられているし、最近ではジャガイモの不足によるポテトチップスの販売休止が報じられた。東北は自然に恵まれた地域であり、漁業や農業と密接に関連している企業が多い。温暖化や天候不順が続く現代にあって、自然を相手にするリスクを減らしていくことが大切だと考えている。番組はそのことに対する警鐘を鳴らした、東北ならではと言えるものだった。

○　スルメイカの不漁が、地域産業にとって大きな打撃であることが、うまく伝えられた番組だった。イカの生態が解明されていないとする説明は意外だった。古くから国民に親しまれる食材でもあり、水産国・日本の技術力をもってしても、イカの減少そのものに対する今後の展望が見えづらかった点が残念だ。ＡＩによる漁場予測については、水産資源の減少に拍車をかけかねないと不安をおぼえた。

平成２６年１０月２６日(日)の小さな旅「イカの終着地で～北海道　羅臼町～」では、北上した海域でスルメイカが命を終えると伝えられた。今回の番組の説明と矛盾しているようにも感じたが、回遊するイカの生態に謎が多いことの表れなのかもしれない。

ＮＨＫには、庶民的な水産資源を守るためにも、より突っ込んだ報道をこれからも期待したい。

（ＮＨＫ側）

番組のまとめに関して多くの委員から指摘を頂いた。準備の段階では、乱獲への対策や輸入の検討､代替魚種の開拓という方向性でも検討したが、イカの不漁で最も大きな打撃を受けたのは水産加工業の現場であることから、その専門家を招いてコメントをしてもらった。付加価値を高める提案の部分が駆け足になってしまった点は反省したい。どういった専門家を招くかという人選の面でも工夫の余地があった。また、ゲストの専門外の分野については記者がコメントする構成にする手もあった。

取材に当たった記者は、八戸で日頃から水産業の取材を続けていたが、イカの不漁により地元では各方面で深刻な影響が出ていることを、広く伝える必要があると考えて取材を続け、今回の番組制作に至った。今回放送した内容は、６月９日(金)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」でも取り上げ、全国に発信した。スルメイカの生態がはっきりしていないことへの対策として挙げられた輸入の活用や代替魚種の開拓についても、それぞれの専門分野を越えて業界全体の課題として検討されているので、そうした動きも伝えたかった。

○　われわれ市民が、食卓を守るために今後どうしていくべきかという視点から、このテーマを発展させることは検討しているのか。

（ＮＨＫ側）

今回の番組では消費者としての視点は割愛したが、重要な視点だ。指摘を受け止め、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　日本の食文化を守っていくうえでは、コストをかけてでも外洋で漁をするか、輸入を増やすことを検討しなくてはならない。そうした観点からも、このテーマは継続的に伝えてほしい。

＜放送番組一般について＞

○　「みちたん～ああ！すばらしきセカイ～」は、田中要次さんのナレーションがよく、ついつい見てしまう番組だ。５月２５日(木)の回に出演していた山形のローカルタレント、ＭＣ　ＧＡＴＡさんが、５月２２日(月)と５月２５日(木)の「天才てれびくんＹＯＵ」の中で全国放送にも登場していたのを見てうれしくなった。

○　６月１１日(日)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で、「東北絆まつり」に取り組む人々が取り上げられた。復興支援の困難さを伝える報道も大切だが、地域の人たちが元気にイベントに取り組む姿を積極的に紹介することは、励みにもなるので今後も続けてほしい。自分が出ていることで、ＮＨＫの番組を見ようと思う若者も増えるのではないか。

○　５月２１日(日)の明日へ つなげよう「よみがえる　わが町の記憶～岩手・陸前高田～」は、津波で水没した博物館がテーマだった。亡くなった人の形見や生活雑貨を博物館に受け入れる取り組みは、震災前の暮らしや文化を次の世代につなげる意義があ

る。すでに撤回されたが、学芸員をおとしめる発言をした政治家がいた。発言は極めて不適切だったが、学芸員という職業に対して、私たちも心のどこかでそれに似た印象を抱いていたのかもしれない。しかしこの番組を通じて、私たちの先入観が変わったと同時に、発言によって傷つけられた方の救いにもなったと感じている。地元出身の村上弘明さんの案内もよかった。また、高田の女歌舞伎で使われていた衣装が復元されたが、学芸員の方と、母が歌舞伎をしていた女性が、「これを残さなければならない」と話していたことが心強かった。

○　６月１１日(日)の明日へ　つなげよう「それでもイナサは吹き続ける～ふるさとを紡ぎ直す人々～」(総合 前10:20～11:08)を見た。きれいな映像で、番組というより作品と言うべき仕上がりだった。三宅民夫アナウンサーのベテランらしい落ち着いた声も番組に合っていた。この番組で取り上げられた仙台市若林区の荒浜地区は、2006年のハイビジョン特集「イナサ　風と向き合う集落の四季」に始まる、息の長いシリーズになっている。地域再生の道のりをこれからも丁寧に記録し続けてほしい。

○　５月２０日(土)のＥＴＶ特集　アンコール「その名は、ギリヤーク尼ヶ崎　職業　大道芸人」を見た。８６歳になってパーキンソン病を患いながらも新宿で公演する様子が伝えられたが、彼の狂気すら感じられる舞踏を取り上げ放送するＮＨＫに寛容さを感じた。「ＥＴＶ特集」は、1985年に始まった「ＥＴＶ８」の流れをくむ番組だが、こうした番組は視聴率にこだわらずに作り続けてほしい。

○　５月２８日(日)のあの日　あのとき　あの番組「集団就職～ひよっこが描く“金の卵”たち～」は、連続テレビ小説「ひよっこ」の放送に合わせた内容でタイムリーだった。東北にとっても、集団就職は忘れてはいけない社会的現象だったのだと再認識した。集団就職はただ悲惨なものではなく、都会への憧れもそこにはあるとしたゲストの上條恒彦さんのコメントも納得できるものだ。番組を見て改めて思ったことは、「東北」という呼称は、中央から見た一方的な呼び方であって、そこに住む自分たちにとっては、決して気分のいいものではないということだ。それらも含めて、ふるさとについて改めて考えさせてくれる番組だった。東京に行った９人の青年たちのうち、６人がふるさとに戻ったが、上條さんが、若いうちにふるさとの良さが分かってよかったと肯定的にコメントしていた点も印象的だった。

○　５月２９日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「猫を知れば、世界が変わる　動物写真家・岩合光昭」(総合 後7:30～8:43)は、猫好きにはとてもいい番組だった。仕事には厳しく臨むが表情が優しいのは、やはり猫好きだからなのかと考えながら見た。主役の猫だけでなく、背景にもこだわっている姿には、必ずしも自然体だけでは仕事

が成り立たない苦労が感じられた。一方、時代の流れでしかたのないことだが、コンピューターを使って画像を加工している場面はあまり見たくなかった。とにかく猫の目線に立って、時間と気持ちを共有するという彼の流儀には、強いこだわりが感じられる。これからは「岩合光昭の世界ネコ歩き」を見る際に、彼の苦労にも思いをはせたい。

○　６月１日(木)のクローズアップ現代＋「会社が社員にしがみつく！？～大量離職時代をどう生きる～」は、勉強になる内容で、周囲にも勧めたい。自分たちの世代には家庭を顧みることなく仕事に突き進んできた人も多いが、それを今の若者世代に押しつけることはできない。過去を振り返って嘆くのではなく、時代が変わっていることを認識することが大切だ。事例として紹介された、残業しなかった人に手当を出す仕組みは目新しかった。ＡＩを活用して離職しそうな人を見つける取り組みも紹介されたが、まずは職場の風通しを良くして、個々のモチベーションを高めることが基本だと考えている。

○　６月３日(土)のＮＨＫスペシャル「祇園　女たちの物語～お茶屋・８代目女将(おかみ)～」では、祇園で働く女性たちが人生を捧げ、運命とプライドの中で切なくも誇り高く生きている姿が描かれた。お茶屋の当主は女性で、結婚しないしきたりが現代まで受け継がれている点にも驚かされた。一見さんお断りというお座敷の雰囲気も含め、われわれが知ることのできない世界を見せてくれた点など、ＮＨＫだからこそ制作できる番組だった。

○　６月４日(日)の「どーも、ＮＨＫ」では、新人アナウンサーの紹介があった。研修の様子も紹介されたが、彼らの成長の過程がよく分かった。また、公金意識研修に取り組む姿も興味深かった。こうした番組を通してＮＨＫのことがより身近に感じられる。

○　６月４日(日)のＮＨＫスペシャル　私たちのこれから「＃子どもたちの未来」(総合後9:00～9:59)は、難しいテーマにも関わらず、スタジオでの討論やデータ放送による視聴者アンケートに生放送で挑んでいた点に驚いた。６月１５日(木)に、子どもの貧困や格差に関するユニセフの報告書が発表されたが、その内容を先取りした番組には感心した。問題の背景には、寄付やボランティアに対する日本人の意識の低さや、若い人たちの諦めの早さがあるのかもしれない。高齢者支援と子供支援に使われる金額の比較が示されたが、スタジオで激しい意見が交わされた。どちらの言い分も納得できるものだが、高齢者ほど投票率が高いことから、選挙対策としての政策の表れなのかもしれない。最後に三宅民夫アナウンサーが「子どもは社会にとっての宝だという

点に皆が合意できるかという点に、日本の未来がかかっている」とコメントして締めくくったが、より断定的なコメントでもよかった。

○　６月４日(日)の「ＮＨＫスペシャル」を見た。貧困の問題は、2008年頃にも社会問題として注目されたが、その後状況が改善したのか悪化したのかを、初めに踏まえた方が分かりやすかった。番組では主に相対的貧困率が紹介されたが、日本のように中間層が厚いと、数値が高めに出るという意見もある。貧困の実態を伝えるためには、もっと具体例を示してほしかった。支援が大切なのは言うまでもないが、スタジオで高齢者と若者を対立させるかのような構図にしていた点は疑問が残る。国立大学の授業料の上昇が例として挙げられていたが、昔は無料と言っていいほど安価だったので、徐々に授業料を上げていった国の政策はあながち的外れだとは思わない。学費が免除される制度などを紹介し、生活が苦しくとも希望は持てると示してほしかった。

○　６月５日(月)の鶴瓶の家族に乾杯「福士蒼汰が鶴瓶になる？秋田県能代市ぶっつけ本番旅」の、秋田県内の視聴率がとても高かったと聞いた。若い人たちは、ＮＨＫを見るという意識よりも、ゲストの若手俳優を見たかったという意識だったのだろう。

○　６月５日(月)のクローズアップ現代＋「人工呼吸器を外すとき～医療現場　新たな選択～」を見た。人工呼吸器を外すことは死を意味する。これまで、人の生と死は議論することすらタブー視されていた雰囲気があるが、番組は重い問題にあえて切り込んでいた。延命措置の中止を望む家族の気持ちや、それを実践する医療スタッフの心中は想像するのも耐えがたいが、誰しもが直面する問題だ。医療は命を救うことを目的に進歩してきたが、これからは、人の最期をどう迎えさせるのかという局面になっていくのではないかと感じた。

○　６月６日(火)と１３日(火)の「梅沢富美男と東野幸治のまんぷく農家メシ！」を見た。２人の絶妙なかけ合いと農家の人たちとのやり取りがおもしろく、引き込まれる番組だった。紹介される料理は、それほど手が込んでおらず、自分でも作ってみようと思わせる点もよい。また、元気な農家や若い後継者が出てきて心強く思う。東北地方でも早くロケが行われることを期待している。

○　５月２４日(水)のガッテン！「筋肉！血管！免疫！あの栄養素で体ごと強くなるＳＰ」は、たんぱく質不足による低栄養への注意を促す内容だった。模型を使ってマクロファージやアルブミンの働きが分かりやすく解説され、楽しく見ることができた。学生など若い世代にも見てもらいたい番組だ。

○　６月８日(木)のクローズアップ現代＋「僕の生みの親はどこに　１０年後の赤ちゃんポスト」では、非常に重い問題が取り上げられた。これまで130人もの命が救われたとのことだが、病院のスタッフが高い意識で働いていることが伝わってきた。驚いたのは、ポストに託され、里親に育てられた少年のインタビューだ。よどみなく信念が語られ、気持ちも整理もされていると感じた。彼がこうした育ち方をしている点に期待感を覚えた。それと同時に、ポストを利用せざるを得ない状況に追い詰められた人々に対して、行政が行う支援のあり方については、不断の検討が必要だと感じた。

○　６月９日(金)の美の壺「Ｆｉｌｅ　４１２　宿の朝食」を見た。日本的な美とＢＧＭで使われるジャズがうまくマッチし不思議な雰囲気が醸し出されている。草刈正雄さんのひょうきんな演技と木村多江さんの味のある語りも番組の魅力だ。今回は旅館の朝食がテーマだったが、たしかに日本の美と呼べるものだった。番組は400回以上続いており、テーマ選びには苦労されていると思うが、スタッフの着眼点がすばらしい。過去には番組の書籍が出版されていた時期もあったが、放送内容を手にとって見られると、喜ぶ世代もいるのではないか。

○　「総合診療医　ドクターG」は、若い研修医たちが病名を推理する構成がおもしろく、勉強になる番組だ。医学に興味のある周囲の学生からの評判もよい。

○　「アニメ　おじゃる丸」「アニメ　忍たま乱太郎」は長く続いており、自分も小学生の頃から見ていた。親子で世代を越えて見ることのできる番組だと思う。「みいつけた！」に登場するサボさんやオフロスキーは個性的なキャラクターで、大人でもおもしろいと思える。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成２９年５月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成２８年度東北地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。続いて、視聴番組のクローズアップ東北「“風評被害”　福島のコメはどこへ？」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、6月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

委 員 長	小林　好雄	((株)出羽庄内地域デザイン　代表取締役)
副委員長	伊藤　一弘	(ＮＰＯ法人かなぎ元気倶楽部　専務理事)
委　　員	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター　理事長)
	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役人事部長)
	寺島　英弥	(河北新報社　編集局編集委員)
	照沼かほる	(福島大学　行政政策学類教授)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	畑中みゆき	(ＮＰＯ法人 High-Five　理事長)
	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
	山田　理恵	(東北電子産業株式会社　代表取締役社長)

(主な発言)

＜クローズアップ東北「“風評被害”　福島のコメはどこへ？」
(総合　５月１２日(金))について＞

○　福島県産米は、風評被害の影響で価格が全国平均より低く、生産量も減少していることを、番組を見て初めて知った。現状を伝える点で意味のある番組だった。風評被害への対策の観点からも、東北だけでなく全国に発信してほしい。スーパーで「福島県産」と表示されている米を目にすることは少ないが、今後見かけたら、買って応援したくなる。番組にはそうした効果もあった。

風評被害をぬぐい去るための抜本的な対策は見いだしにくいが、番組で触れてほしかった。また、国全体の農業政策の問題と、福島の問題とを切り分けて紹介したほうが理解しやすかった。

○　福島の米について、ここまで深く掘り下げた番組はおそらく初めてで、実態が明らかにされたのではないか。構成の点でも、データをそろえて提示した上で、関係者の証言、専門家の解説と続き、わかりやすくまとめられていた。

番組では、福島県産米の価格の低下、生産量の減少、業務用や飼料用に使われる割合の増加といったデータが示され、現状をよく理解することができた。中でも、沖縄で業務用米が多く使われている事実は知らなかった。

最後に、福島大学の小山良太教授が現状の分析と今後に向けた提案を述べていたが、日本の米作り全体が抱える問題と、風評被害がもたらした福島の問題とがやや混在している印象を受けたので、両者を切り分けたほうがよかった。市場ニーズへの適合と業務用米へのシフトは納得できる提言だったが、表面的な対策に過ぎないとも感じられた。もっと根本的な対策はないのだろうか。

○　農家にとってつらい現実を描いていた番組だった。自分は福島県産米を食べるが子どもには食べさせたくないという消費者もおり、風評被害は本当に根の深い問題だ。

米の産地表記について、ブレンドした場合は生産県を明示せずに国内産と表記すればよいとする現在のルールは、消費者にとってはあいまいに感じるのではないだろうか。また、業務用米としての利用拡大が、福島の米づくりを本当に支えることになるのだろうかと疑問に感じた。

福島県と県農協中央会は、「ふくしま。ＧＡＰチャレンジ宣言」を先日発表し、東京オリンピック・パラリンピックのある2020年度までに、農産物の安全性に関する認証制度である農業生産工程管理(ＧＡＰ)の取得日本一を目指すと打ち出した。福島県産米の安全性に着目した番組を今後も放送するなど、広くアピールしてほしい。

○　分かりやすくていい番組だった。見ていてつらく感じたが、こうした番組こそ全国に発信していくべきだ。

同じ被災地の岩手や宮城と比較した情報も知りたくなった。例えとして適切かどうかは分からないが、水俣のことが思い浮かんだ。現地の生産者は、水俣だからこそ安全・安心なものを作って売り出していると聞く。福島だからこそ安全・安心、そして産地を堂々と出せる日が一日も早く来てほしい。

真下貴キャスターが番組の冒頭で風評被害とは何かと説明していた点がよかった。ＢＧＭの使われ方も、曲調や使うタイミングに配慮が感じられて好ましかった。ＶＴＲ中のナレーションを担当した福島局の荒響子さんも、声がしっかりしていてよかった。

○　震災から６年が経過したが、あらためて原発事故による風評被害の深刻さを見せつ

けられた。以前はブランド米として高値で取引されていた米が、今は福島の名前を出せなくなっている。東京電力福島第一原子力発電所の廃炉作業は３０年もの時を要するとも言われているが、風評被害の中、農家が生きていくための対策が喫緊の課題だ。農家の方の「一生懸命作っている。それでも売れない」という話や、東京のイベントで販売した際に「なぜ東京に福島の物を売りに来るのか」といった声を浴びせられたエピソードを聞くと、やり切れない思いがする。

震災によって家族を亡くしたつらさや悲しみを伝えることはもちろん大切だが、被害を受けた方が生活していくうえで苦労している点を伝え、その中で見えてきた問題を提起することもメディアの大切な役割だ。

食用米を飼料用として販売せざるをえない状況について、県の担当者は「農家とすれば経営の選択肢のひとつ」と説明していたが、現実的にはその方法しかないわけで、選択肢という言葉はふさわしくないと感じた。また、米の全量全袋検査の結果について、「2015年以降は基準を超えたものが出ていない」と紹介していたが、その前はどうだったのかと連想することで、かえって不安を招きかねない側面もあった。食に関する報道は大変デリケートな問題なので、細心の注意が求められる。

○　福島県産米がどこでどのように消費されているのかを知ることができ、とても勉強になった。福島県内のスーパーでは福島県産の米が売られているものの、県内産と県外産、また会津産とそれ以外の扱い方に差があるようにも感じられる。震災前は、地元産の誇りがあったはずなのに、こうした現状が大変悲しい。県内の農家や米卸業者のコメントを聞いて、彼らの抱える切なさやつらさが伝わってきた。福島県の担当者は、業務用米のメリットとして安定した取引による安定した生産を挙げた。保守的にも感じたが、これが現実なのかもしれない。

スタジオ出演した専門家の指摘は一般的には合っているものの、福島県産米について伝えるこの番組の趣旨からは、やや外れてしまっていると感じられた。

冒頭で風評の定義を紹介したうえで内容に入っていった点は適切だった。販売用のパッケージをぼかしていたが、画面全体にぼかしがかかっている場面は、なにか嫌な物を見せられている気持ちになった。

○　この番組は、筋書きが整理された解説番組と言うよりは、関係者の生々しい証言による放談とも呼ぶべきものだった。福島県が安全でうまい米をアピールしている一方で、市場では安く使える米だと冷徹に位置づけて流通させている構造があること、業務用米やブレンド米、飼料米としてしか出荷できないことに農家が悔しい思いを抱いていること、そうした実態をありのままに見せた点に意義がある。３０分には収まらないほどの情報量があった。生産地と消費地を個別に取材したニュースはこれまでにもあったが、双方を突き合わせて全体像を示した意欲的な試みだ。こうした番組制作

は地元メディアにはできず、ＮＨＫにしかできないと感じた。また、福島からの視点が貫かれていた点もよかった。制作したスタッフの方へ敬意を表したい。

○　これまでの報道では避難した方の生活を取り上げたものが多かったが、この番組の切り口は目新しかった。問題の根底には、福島に対する偏見があり、現在問題になっている避難者へのいじめにも通じている。そうした問題をこれからどのように払拭（ふっしょく）していくか、国や行政には積極的な取り組みが求められている。グローバルＧＡＰの取得による安全性のアピールも一つの例として挙げられる。

福島県産米の価格の推移を示すグラフを見ると、事故後に全国平均の８０％ほどにまで下落した価格が、今は９０％ほどにまで回復した。全国平均との間にある１０％の隔たりは、農家がいくら頑張っても結果が出ない部分だと感じる。また、業務用米の価格の変化を示したグラフを見て、市場の構造の変化を強く感じた。グラフには青森県産米も示されていたが、福島県産以外であっても価格が下がっている。そこには消費者全体の米離れがあり、そこに風評被害が追い打ちをかけたものだと理解している。

消費者から「被ばくした米をなぜ売るのか」といった生々しい声が寄せられた例も紹介されたが、偏見をなくしていくためにはテレビの果たす役割が大きいと感じている。インターネット上にあるうわべだけの情報に惑わされないよう、ＮＨＫには積極的な情報発信を今後も期待したい。

○　消費者や卸売業者、農家、行政、専門家など、さまざまな立場の方を丁寧に取材した番組だった。その一方、風評被害の根本的な原因だと考えられる消費者の受け止め方については、文字だけではなく直接生の声を取材するべきだった。食の安全は極めてデリケートな問題で、偏った見方をなくしていくためには何が必要なのか、深い取材と対策の提示が必要だった。

専門家のコメントについては、番組のテーマからずれているという指摘が複数の委員からあったが、風評被害は簡単には払しょくできないことを踏まえ、福島では用途や機能に特化した米の生産を行うという戦略を取らざるをえないことを示唆するものだったと理解している。

原発事故がもたらした問題は極めて大きく、やり切れなさや無念さが強い。その怒りをどこに向ければいいのかということも含め、根本的な対策はどうあるべきか深く考えさせられた。

○　長い年月をかけて開発された新品種の「天のつぶ」が飼料米として使われている実態を知り、やるせない思いだ。米は産地間の競争が激しいゆえにこのような実態になっているのかもしれない。米の機能性を高める生産戦略について触れられていたが、

各地には米粉などに加工する６次産業化の取り組みもある。福島から明るい話題が聞こえてくることを心待ちにしたい。

（ＮＨＫ側）

風評の影響はこれまでも語られてきたが、知っているようで知らなかった事実を示すことができた。福島県では風評対策のために全量全袋検査を行い、巨額を投じてＰＲをしているが、消費者は福島県産米と知らずに口にしている現実がある。そこにはずれがあると考え、これからの風評対策を検討していくうえでの提言ができたと考えている。

専門家のコメントは、風評を空気として捉えるだけではなく、生産、流通、消費に至るまでの構造的な問題として捉えたものだと理解している。伝わりづらかった点は反省し、次に生かしたい。

このテーマに限らず福島の問題は、立場によって見え方が全く異なる。その点では、農家の方にとって厳しい番組に見えてしまったかもしれない。今は、農業が置かれた厳しさを語ること、風評を空気としてではなく現実として見ることのほうが大切な時期だと考えている。

このテーマは５月２４日(水)に「クローズアップ現代＋」で放送する予定だ。頂いたご意見を踏まえつつ、全国のみなさんにとって大きな問題だという気持ちで制作にあたりたい。

○　福島の農家の中には、水田が除染されても風評を気にして米作りをあきらめてしまう方も多い。結果として、耕作放棄地が増えてしまうことは大きな懸念だ。その現実を踏まえれば、飼料米であれ何であれ、販売できる可能性を示すことは、若い世代の希望につながる。小山さんのコメントにはそうした示唆が含まれていたように感じる。

○　現状を理解している方から見ると、福島の問題と日本全体の問題が関連し合っていることが分かるが、知らない方にとっては混乱する内容だったかもしれない。番組を２つに分けるなどの配慮も必要だったのではないか。

○　この番組では、スタッフ名の表示がなかった。表示の有無は番組によって違うのか、放送局によって違うのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

スタッフ名の表示に関しては、ＮＨＫ全体で一定の基準を設けたうえで、番組ごとに基準を定めている。「クローズアップ東北」は表示しないことにしている番組だ。

＜放送番組一般について＞

○　４月２７日(木)のみちたん～ああ！すばらしきセカイ～「なんとも言えん感じで１３回目」(総合 後10:25～10:50 東北ブロック)はおもしろかった。視聴者から100通ものお便りが届いていることに驚いたし、寄せられた情報に基づいて取り上げるテーマを決めている点もよい。東北にはまだまだ知らない所がたくさんあると感じながら番組を見た。

○　４月２８日(金)のクローズアップ東北「忘れられた被災者～台風と震災　支援制度の死角～」は、内容が充実しており、これまで知らなかった情報を知ることができてよかった。身近には、かさ上げ工事が終わらないため、まだ仮設住宅に入ったままの方もおり、復興への道のりはまだまだ遠いと感じさせられた番組だった。

○　５月１２日(金)のウォッチＡ「人口９０万人台へ・・・あきた未来塾　～考えよう！秋田でできること～」①(総合 後7:30～8:00 秋田単)は、秋田県の人口が８７年ぶりに100万人を割ったタイミングを捉えた放送だった。ゲストの壇蜜さんのコメントは、穏やかな口調ながらも的確なものだったが、それだけに地元のトップランナーと呼ばれる方々のコメントが薄いようにも感じられた。スタジオには若者たちも多く集まっていたが、彼らの表情に未来への希望が感じられなかった点が気がかりだ。そうした中でも、彼らへのアンケートで、地元への愛が強いことが分かったことが救いであり、今後の番組でそうした部分を取り上げてみてはどうか。

○　５月１７日(水)の「てれまさむね」では、気象庁がその日から情報提供を開始した、気象警報等の「危険度を色分けした時系列」について紹介があった。危険度やその切迫度が分かりやすくなると感じたので、積極的に活用してほしい。

○　「クローズアップ東北」は、一家団らんの時間の放送だが、社会で起こっている問題について、家族で話し合える機会を提供しており、この時間帯に放送される意義は大きい。テレビ離れが叫ばれ、見たい番組は録画して後から見る傾向が強まる今の時代にあっても、このように家族で一緒に見る番組は必要だし、今後にも期待したい。

○　３月２０日(月)の１００年インタビュー　時は待ってくれない「アーティスト　小田和正」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後9:00～10:29)はいい番組だった。彼は大成功を重ねてきた天才ではなく、挫折や失敗を経て素直な生き方を見つけてきた人だということがよく分かった。特に東日本大震災から２年後に、被災地の人に向けて書いた「その日がくる

まで」という曲は、真に寄り添うとはどういうことなのかと考えさせられた。私の周囲には、みんなで頑張ろうと遠くで合唱されることでかえって孤立感を覚えるとして、「花は咲く」を聞きたくないという人もいる。番組を見て、誰に向けて歌を届けるのかについて、問いかけられる思いがした。

○　「福島をずっと見ているＴＶ」は、長く続いている番組でいつも大切に見ている。昨年度の月１回の放送から、今年度は不定期に変わったが、番組をなくさないでほしいと切に願っている。

○　３月３１日(金)の「未来へ　伝統×最先端が挑む日本最古の舞　～狂言師・野村萬斎×メディアアーティスト・真鍋大度の挑戦～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後10:00～10:59)はすばらしかった。映像技術の進歩により、伝統芸能が持つ身体性が分かりやすく伝えられ、表現の新しい可能性を見た思いがする。観客の反応も取り上げられていたが、単におもしろかった、すごかったという感想にとどまることなく、より深い切り口からのコメントがほしかった。東北は民俗芸能が盛んな地域だ。単に地域のお祭りや芸能としてだけではなく、農耕の祈りや死者への思いも込められた表現という側面からも、いっそう掘り下げて伝えてほしい。

○　４月６日(木)の「人名探究バラエティー　日本人のおなまえっ！【さいとう】」は、古舘伊知郎さんが１４年ぶりにＮＨＫにレギュラー出演されるということで期待して見た。名前のルーツを知ることに加え、この回を見て「さいとう」の「さい」の字が書けるようになりよかった。

○　４月２４日(月)と２７日(木)のクローズアップ現代＋で、「アメリカに監視される日本　～スノーデン“未公開ファイル”の衝撃～」と「プライバシーか？セキュリティーか？　～スノーデン“日本ファイル”の衝撃～」として、極秘ファイルについて取り上げられた。アメリカのＮＰＯとの共同取材や、スノーデン氏の独占インタビューがとてもよかった。一般市民のプライバシーが暴露されるおそれのあるプログラムが日本に持ち込まれている可能性も示唆され、今後国民的な議論へと発展する可能性を感じた。そうした時に、ＮＨＫの果たすべき役割はますます大きくなっていくと考えているので、しっかりした報道をお願いしたい。「クローズアップ現代＋」は、意欲的に課題を取り上げており、武田真一キャスターも冷静なコメントと鋭い分析をしていると感じている。

○　４月３０日(日)のＮＨＫスペシャル「憲法７０年　“平和国家”はこうして生まれた」(総合 後9:00～9:58)はとてもいい番組だった。過去の資料をひもといていく中で、

憲法９条がアメリカによる押しつけではなく、超党派の小委員会の議論から生まれた点が提示されていた点は興味深い。現在、改憲に関する議論がされている中で、この番組が放送されたことは意義深い。

○　５月１日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「１アウトの意味～メジャーリーガー投手・田中将大～」(総合 後7:30～8:43)は、震災後の東北を盛り上げた選手でもあり、野球ファン以外の方も見たのではないかと思っている。彼の野球に対するストイックな姿勢を、プライベートも含めて丁寧に伝えていた。彼の言葉は、とても２８歳の若者とは思えないもので、プロフェッショナルになるには年齢や経験ばかりではなく、仕事に真正面から向き合い、考え、努力することが大切なのだと改めて感じた。活躍、成功した人々が考えていることを知ることで、どのように仕事に取り組んでいくのか、ヒントを得た視聴者も多いのではないか。

○　５月２日(火)の「第５５回　歌謡チャリティーコンサート」(総合 後7:30～8:43)は、フルオーケストラに乗せて東北ゆかりの歌手や作曲家の歌が放送され、とても印象に残った。地元のオーケストラが起用された点もよく、番組の後半で会場の心が一つになっていると感じさせられた。

○　５月３日(水)の「究極のおもてなし～天下を動かした一服の茶～」(総合 前8:15～9:00)や、５月７日(日)の日曜美術館「器のむこうに人がいる～茶の湯が生んだ至高の美～」は、茶の湯を取り上げた番組だ。ＩＴ化が進む現代、こうした日本文化に光を当てる番組がより求められていると感じた。ＮＨＫにはこれからもこうした取り組みを続けてほしい。

○　５月３日(水)のニッポンアニメ１００「発表！あなたが選ぶアニメベスト１００」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 午後8:00～11:00)では、ついに結果が発表されるので期待して見た。ゲスト出演者の人選や、声優さんによる生放送のアフレコは、アニメが好きな広い世代を意識したものだった。発表された結果を見て、個人的には意外に感じて驚いたが、１人何票でも投票できるシステムが影響した部分もあったのではないか。上位作品は「ベストセレクション」として放送されたが、必ずしも順位が高い作品ばかりではなかった。ＮＨＫのアニメをいつも楽しく見ているが、作品自体に攻めの姿勢が感じられるものもある。一方で、民放では放送しないような、過去の優れた作品を再放送する放送枠をもっと設けてほしいと思うこともある。

○　５月４日(木)の＃ジューダイ　ガチ旅　浅草「なぜ昭和レトロにひかれる？」はとてもおもしろかった。過去に流行したものに再び注目が集まる現象を見て、一周回っ

て新しく受け止められるおもしろさを感じた。音楽にしても、当時はことばを大切にして間接的な表現をする作品が多かったが、最近は歌詞の意味が理解しづらい曲が多い傾向があり、昭和という時代が見直されることがあってもいい。フィルムカメラを扱う少年が、手がかかるからこそやりがいを感じると話していた部分を見て、最近の若い人も捨てたものではないと思った。

○　「＃ジューダイ」は、前身の「オトナへのトビラＴＶ」から見ているが、１０代向けの番組でありながら、親世代にとっても子ども世代を理解するために役立つ番組だ。ＭＣのぺえさんのキャラクターかもしれないが、番組ではジェンダーに関する話題を取り上げることが多いと感じているので、今後はより幅広い話題を扱ってみてはどうか。ＳＮＳなどを見ていると、番組をリアルタイムで視聴している若者が一定数いることがうかがえる。

○　５月４日(木)の「おげんさんといっしょ」(総合 後10:50～11:50)は、話題になった番組だ。音楽番組と言いながらも、伸び伸びした雰囲気があり、まとまりがない中で最後はまとまる、画期的な番組だったと思う。星野源さんは今人気の方なので、彼を起用できた点にも驚いた。

○　５月５日(金)の香川照之の昆虫すごいぜ！「２時間目　モンシロチョウ」(Ｅテレ 前9:00～9:30)は、２回目を放送してくれてよかった。外でモンシロチョウを捕まえようとする場面は、なぜはじめから網を使わなかったのか疑問に感じたが、おかしかった。人間にモンシロチョウの羽を付けて大きさを確かめる場面では、クレーンまで持ち出しおり、そこまでするのかと驚いた。香川さんは笑わせるつもりなく力説していても、見ていて笑ってしまった。虫が嫌いな人でも思わず見てしまう番組で、３回目にもぜひ期待したい。

○　５月６日(土)の「探検！世界の動物園の舞台裏～ドイツ・ライプチヒ動物園～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後8:00～9:29)はとてもおもしろかった。日本では北海道旭川市の旭山動物園が話題になっているが、世界にもそうした動物園があると知り、ぜひ一度訪れたい。今まであるものの見方を変えて示すことで、来園者が増えたこの動物園の例は、ビジネスの上でも参考になるものだ。

○　５月６日(土)のＮＨＫスペシャル「日本国憲法　７０年の潮流～その時、人々は～」(総合 後9:00～9:58)は、憲法に対して国民的な注目が集まっている中での放送だった。番組は、憲法施行以降の時代背景と国民の考え方の変遷を４つの時代に分類し、人々の考えの背景を分かりやすく伝えていた。現在、平和主義の根幹たる憲法９条の改正

に反対の意見を持つ人も多いが、議論すること自体をタブー視する雰囲気ではない。今後、この議論はますます盛んになると見込まれるが、これまで日本人が憲法にどう向き合い、考えてきたのかがすべての土台となる。護憲、改憲のいずれにも偏らず正しく伝えることはＮＨＫにしかできないことなので、今後もさまざまな観点から伝えてほしいテーマだ。

○　５月１０日(水)の探検バクモン「日本一の巨大郵便局」を見た。取扱量と処理の速さに舌を巻いた。ただ、宅配便の業界で労働力不足による問題が大きく報じられる中、郵便会社の頼もしさをことさらに伝えたことには、やや違和感を覚えた。はがきの宛名面に、特殊な光を当てることでしか読み取れないバーコードが印刷されていた点は、技術の進歩に驚くとともに、そこまでするのかと少し恐ろしく感じた。一方、小包の仕分けは、完全なアナログ作業で、５０画面のモニターを監視する人も含めて、いくら技術が発展しても、こうした業務は残るのだと考えさせられた。翌日配達などサービスは向上したが、それを生んだのは我々の欲なのかもしれない。

○　５月１０日(水)のクローズアップ現代＋「相次ぐ“墓トラブル”　死の準備の落とし穴」は考えさせられる番組だった。神奈川県横須賀市では、身寄りの無い方のお骨を市役所が納骨堂に保管し、一定期間が過ぎたらまとめて無縁墓地に納めるという実態が紹介されたが、「墓じまい」という単語も含めて、今はそうした時代になってきているのかと感じた。

○　５月１１日(木)のドキュランドへ　ようこそ！～Ｗｅｌｃｏｍｅ・ｔｏ・Ｔｈｅ・Ｗｏｎｄｅｒｆｕｌ　Ｗｏｒｌｄ・ｏｆ・Ｄｏｃｕｍｅｎｔａｒｉｅｓ～「ルーブル美術館を救った男」(Ｅテレ 後10:00～10:44)はいい番組だった。ヒトラーのパリ入城を前に、ルーブルの美術品を避難させた話は聞いたことがあったが、目録を渡されたドイツ軍の美術管理者が、ルーブルがもぬけの殻になっている点を追求しなかったエピソードを初めて知り、興味深く感じた。国としては敵対しながらも、美術品に対する価値観を共有し、守ろうとする思いは、ヨーロッパ特有のものなのかもしれない。

○　５月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「和食　ふたりの神様　最後の約束」は、すし職人の二郎さんと天ぷら職人の早乙女さんの間に交わされた約束について、それを成し遂げようとする二郎さんの人柄と、いつまでも二郎さんを奮い立たせようとする早乙女さんの優しさが強く感じられた。道を極めることのすごさと大変さが伝わってきた。

○　５月１４日(日)の「ＮＨＫスペシャル」は、二人の秘め事とも呼ぶべき約束と、そ

れを追い続けたＮＨＫのすごさに驚いた。ドラマのような映像で描かれる物語に感動した。体調の都合で昼の営業に出ないことを決めたが、早乙女さんと会った後に、それでも板場に立つ二郎さんと、そのすしを食べたあとに男泣きする早乙女さんの姿には胸を打たれた。

○　５月１７日(水)のガッテン！「これが世界最先端！“認知症”予防ＳＰ」では、認知症予防のためには睡眠、運動、減塩が大事だと紹介された。中でも、筋肉である血管を動かし続けることでリスクを減らせることと、減塩の重要性が分かりやすく伝えられていた。

○　「ガッテン！」を毎回楽しく見ているが、副題に「ＳＰ」は不要ではないか。毎回１つのテーマを深掘りしており、取り立ててスペシャルと呼ぶべき理由はないと感じている。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」は、最近徐々におもしろくなってきた。キャストも個性豊かでみな明るい。このあと会社が倒産するストーリーが待っているとも聞いているが、それも含めてどのように描かれるのかが楽しみだ。

○　大河ドラマ「おんな城主　直虎」に対しての見方が変わってきた。まず、壮大な合戦がたびたび起こるわけではないが、さまざまな陰謀や裏切りがヒロインを毎回苦しめる展開は、韓流時代劇に通じるものがあると感じている。脚本の森下佳子さんの個性によるものなのかもしれないが、それを踏まえるとよりおもしろく見られる気がする。次に、今川氏の崩壊や武田氏との断絶が迫る中、我々の知る戦国時代の歴史の中で、どのように小豪族が生き残るかがテーマとして浮かび上がってきた。ストーリー上はこれからがドラマの本番なので、期待して見たい。

○　ドラマ１０「ツバキ文具店～鎌倉代書屋物語～」は、とてもいい番組だ。感動するストーリーなのはあらかじめ分かっているが、押しつけがましくなく描かれている。原作を大切にドラマ化していることが伝わってくる。深夜に再放送されているが、その時間帯に見たほうが心に迫ることが多い。

○　「ハートネットＴＶ」は、見ているこちらがつらくなる内容の回もあるが、勉強になるのでいつも見ている。「反響編」がときどき放送されるが、視聴者のそのテーマに対する受け止めがよく分かるので、もっと増やしてほしい。

○　「超入門！落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」が、始まったときは驚いたが、何度か見る

うちに魅力が伝わってきた。今はＥテレで放送されているが、新シーズンが始まらないかと期待しているところだ。

○　「ＳＷＩＴＣＨインタビュー　達人達(たち)」は、毎回意外なゲストの組み合わせを楽しんでおり、今後にも期待している。

○　「笑う洋楽展」は、定時番組化されて３年が経ったが、まだまだおもしろい切り口が出てきて、いつも楽しく見ている。スタッフの努力がうかがえる。

○　プレミアムドラマ「ＰＴＡグランパ！」を共感しながら見ている。自分自身も、子ども１人につき１回は必ず役員をしてくれと言われて役員をした経験があり、会議の効率の悪さなどがリアルに描かれていると感じる。脚本も変なところがなく、素直に見られる印象だ。ただ、定年退職後の男性のパートや、認知症の家族の介護、痴漢のえん罪など、タイムリーな話題をストーリーに詰め込みすぎているようにも思う。

○　総合テレビの深夜などで、「水・族・館」という番組が放送されているのを見ることがあるが、ナレーションもなくほとんど音楽だけの美しくシンプルな番組で、視聴率にとらわれないＮＨＫならではの番組だと思う。８Ｋスーパーハイビジョンでこの番組をぜひ見てみたい。

○　「クローズアップ現代＋」は、テーマも内容もとてもいい番組だと思っているので、ぜひ再放送をお願いしたい。リアルタイムで見られない方に加え、周囲で話題になった回を見たい方もいるだろう。定時枠を設けなくてもいいので、これという回についてはぜひ再放送してほしい。また、この番組に限ったことではないが、定時枠ではないところで再放送する番組については、もっとＰＲをしてもいい。再放送を決める背景には、視聴者からの反響や、ＮＨＫとしてお勧めしたい事情があると推測している。番組への新たなファンを獲得する手段としてぜひ検討してほしい。

○　ＮＨＫと民放との間で、ニュース番組の放送時間帯がほぼ重なっているように感じる。これをあえてずらすことで、異なるジャンルの番組を見たい視聴者も喜ぶのではないだろうか。

○　震災のとき、ＮＨＫは地域の民放ラジオ局の後じんを拝した印象があるが、全体としてラジオの力が見直された。その時に立ち上げられたコミュニティＦＭ局は、現在経営難などで岐路に立っている。そこでＮＨＫには、改めてラジオの有用性と魅力を伝える番組を期待したい。アナウンサーの豊かな個性を生かした放送や、各局が制作

した番組をほかの県でも聞ける環境、地域を取り上げたラジオドラマの制作状況についてお尋ねしたい。

（ＮＨＫ側）

東北各局では、仙台と盛岡と福島では平日の午後５時から１時間、秋田と山形と青森では金曜の午後０時台に３０分程度の番組を放送している。文化をはじめとした地域の方に多く出演していただくほか、アナウンサーの音声表現を鍛える場にもなっている。「ながらメディア」として視聴者に喜ばれる放送、そして災害時に役に立つ点を踏まえて、生放送や双方向性の高い番組に力を入れている。パソコンとスマートフォンの「らじる★らじる」では、全国８か所の拠点局と呼ばれる放送局の放送をリアルタイムで聞くことができるほか、そのほかの地域放送局の夕方の番組などを聞き逃し配信している。音声表現のスキル向上に向けては、全国放送番組の中継に若手を参加させ、ベテランによる指導を受けさせるといった取り組みを、東北地方でも通年で行っている。

（ＮＨＫ側）

東北地方向け放送としては、月曜日から土曜日までの午前７時台に「マイあさラジオ東北」という２０分の番組を放送している。また、金曜日の午後０時台には「民謡をどうぞ」を放送している。

（ＮＨＫ側）

ラジオドラマについては、「ＦＭシアター」の放送枠で、東北でも年に１～２本を制作している。昨年は、仙台空港にある航空大学校でパイロットを目指す若者を描いた番組を制作した。ラジオ番組に関するご意見や感想についても、ぜひ承りたい。

○　先日、秋田県大潟村の美しい菜の花畑や、青森県深浦町の温泉を訪ね、日本海に沈む夕日を見た。同じ東北地方でも、太平洋側にいると見られない景色ばかりで、話題になった「東北でよかった」というハッシュタグが思い起こされた。番組でも、こうした東北の魅力をどんどん取り上げてほしい。

○　かねてより、東北の価値や魅力を大事にしてほしいと申し上げてきたが、これからもＮＨＫ東北として、掘り下げて発信してほしい。

平成２９年４月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、5月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出 席 委 員)

委 員 長	小林　好雄	((株)出羽庄内地域デザイン　代表取締役)
副委員長	伊藤　一弘	(ＮＰＯ法人かなぎ元気倶楽部　専務理事)
委　　員	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役人事部長)
	寺島　英弥	(河北新報社　編集局編集委員)
	照沼かほる	(福島大学　行政政策学類教授)
	畑中みゆき	(ＮＰＯ法人 High-Five　理事長)
	藤沢　清美	((一社)岩手県芸術文化協会理事)
	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
	山田　理恵	(東北電子産業株式会社　代表取締役社長)

(主な発言)

＜放送番組一般について＞

○　４月７日(金)のクローズアップ東北「いつもそばに～震災６年　母親の日々～」は、いい番組だった。震災から６年がたち、被災地の風景が変わっていったとしても、身内を亡くした心の傷口は開いたままだ。それが見えなくなっていることがまさに風化なのだと思う。今回の番組で取り上げられた、娘と孫が津波に巻き込まれた菊池真智子さんは、「もういいんじゃないか」、「もう悲しまないで楽しめば」といった他人からの言葉に傷つけられてきたと聞く。彼女は、愛情が消えないから悲しみも消えないとする結論にたどり着いた。東北には、子どもを亡くした母親が地蔵を建立して、季節の服を着せたり化粧をしたりすることで一緒に生きていこうとする信仰の形があり、今回の番組のねらいも受け入れやすかったのではないか。身内を亡くした人にとっては、勇気と励ましを与え、悲しみ続けていいのだと背中を押してくれるメッセージがあった。

○　４月７日(金)「クローズアップ東北」は感動的だった。亡くなった娘さんの同級生たちも母親になり、子を思う母の気持ちが分かり合えるようになった点が、番組ではよく描かれていた。地蔵信仰をはじめ、生きている者も亡くなった者も同じ人生を生きていくと考える、東北人の心の中にある死生観が現代にも息づいていることが伝わってきた。

○　４月９日(日)に秋田県知事選や秋田市長選をはじめ、県内で多くの選挙が行われた。「サンデースポーツ」を中断する形で開票速報が放送されたが、番組が突然始まって驚いた一方、素早い対応に感心した。当選を確実にしたばかりの候補者が出演していた点もよく、アナウンサーによるインタビューも配慮が行き届いていた。１０代が選挙権を得てから大きな選挙は２度目だったが、その投票率を速やかに伝えていた点もよかった。

○　４月１１日(火)の「おはよう秋田」で、八戸市に２１年ぶりに小学校が新設されたリポートが放送された。地元産の木材がたくさん使われていた校舎がすばらしかった。東北全体で人口が減る中で、地域の人口が増えているこの事例は興味深い。背景も含めて、特集番組などで詳しく知りたくなった。

○　４月１５日(土)のやまがたリアル「“蔵王”わが人生　～魅力を伝え続けて～」(総合 前10:55～11:25 東北ブロック)は、蔵王の冬を舞台にした、数々の人間模様を見ることができた。樹氷を撮り続けるカメラマンや９１歳のスキーインストラクター、外国人に愛されるロッジなど、冬の蔵王の魅力を長年にわたって伝えてきた人々の姿を見ることができてよかった。

○　「おはよう秋田」で仙台から天気予報を伝えている竹下愛実さんがとてもよい。画面に向かって、一人一人に向けて丁寧に語りかけるような伝え方がすばらしい。最近では、仙台でサクラが開花した４月７日(金)に、ご自身もピンクの衣装で出演されており、そうした配慮にも感心した。４月から、秋田放送局では、番組の末尾で「ニュースこまち」の予告を放送するようになった。関心のある話題を事前に知ることができて助かる。最後にアナウンサーが、「すてきな一日をお過ごしください」や「今日も一日お元気で」とコメントしている点も温かさが感じられる。

○　４月から始まった、山形放送局の夕方のニュース・情報番組「やまます」は、「あさイチ」に出演していた中谷文彦アナウンサーをキャスターに迎え、新しい風が吹き込まれた印象を受ける。話題の本について書店の方にインタビューするなど、新しいコーナーも始まり楽しみだ。やや硬さもあるが、これから落ち着いていく中で、より

個性が発揮されるだろうと期待している。

○　１月２９日(日)の「綾瀬はるかのふくしまに恋して　２０１６年の旅」(総合 後11:55～前0:00)は、何度も繰り返し放送してほしい番組だ。綾瀬さんは2014年から福島を旅し、伝統に触れる出会いなど、福島の魅力を発信し続けている。今後の旅にも期待したい。

○　４月８日(土)のＥＴＶ特集「境界の家　沖縄から福島へ・ある原発技術者の半生」では、東京電力福島第一原子力発電所ができた当時から福島に赴任し、ともに歩んできた名嘉幸照さんの、技術者としての思いが伝わるいい番組だった。技術は人を幸せにするという信念を持って取り組んできたが、事故によってそれが裏切られた心中を察すると痛ましい。それでもなお、廃炉に向けた作業を通じて、福島とともに生きていこうとする強い覚悟には胸を打たれた。

○　４月１３日(木)の「時論公論」では、「原発廃炉・安全担う　人材育成急げ」と題して、水野倫之解説委員が解説したが、時宜を得たテーマだったし、まさに同感だ。この先原子力政策がどうなろうと、廃炉も含めてその安全を守る人材が必要だ。事故の影響もあり、原子力を学ぼうという若者が減少している現状を危惧している。

○　４月１５日(土)のＮＨＫスペシャル　廃炉への道２０１７「核燃料デブリ　見えてきた“壁”」は、廃炉に向けた技術開発の現場がよく分かる番組だった。技術者たちは進歩を信じて、困難に直面しながらも実験と改良を繰り返し、廃炉という一大プロジェクトに貢献しようとしている。東京電力福島第一原子力発電所の視察を通じて、現場の方々のつらさに触れた後に見たので、そうした思いも重なり、番組はより印象深かった。

○　４月１５日(土)の「ＮＨＫスペシャル」は分かりやすかった。映像やＣＧ、模型を活用して、デブリが散らばっている可能性や、謎の堆積物がデブリではないかとする推定、高線量の原因がスチームだと考えられる理由が分かりやすく説明されていた。廃炉の事業は世界で誰もやったことがない。事故をきっかけとして、研究開発が進み、大きな目で見ると技術が発展する原動力になっていると感じたが、その一方、今はまだ途中経過であって、このあとにも長い道が待っている。

○　４月１５日(土)の「ＮＨＫスペシャル」を見て、まず、廃炉は本当に実現できるだろうかと不安を覚えた。世代を超える長い時間と膨大な費用、新たな技術開発が必要とされるが、それらをもってしても、デブリの取り出しは途方もない作業だ。しかし、

福島はもとより、日本のためにも必ず成し遂げるべき事業だ。福島や東北の人たち、国、東京電力、そして実際の作業員の方々も同じ思いだろう。番組での説明は分かりやすく、作業の重要性と難しさが十分理解できた。今でも高い放射線や汚染水の問題に加え、これから作業が進むにつれて、新たな問題が出てくることは容易に想像できる。そして、人間の作ったものに完璧なものがない以上、いつか別の事故が起こる可能性も否定できない。現在日本では、原子力発電所の再稼働の是非について盛んに議論されている。事故が起きてからの廃炉作業の困難さは、この番組を見るまでもなく明らかだ。一方、化石燃料に代わるエネルギーの確保も重要な課題だ。マスコミには、今後もこの問題を継続して検証する役割があると考える。国民が原子力発電所の問題をどう考え、どう対処すべきなのか、その答えを導き出すための事実と問題点を深く探り、正しく偏りなく伝え続けてほしい。民放では難しい番組だからこそ、ＮＨＫには期待したい。

○　４月１５日(土)の「ＮＨＫスペシャル」はわかりやすく丁寧に構成されたいい番組だった。模型を駆使してメルトダウンの様子を分かりやすく伝えていた。放射線の障壁を乗り越えて事故の核心部分を映像に捉えたことは大きな一歩で、技術者の努力のたまものだ。一方、増え続ける汚染水について、水の注入にはデブリが乾いて飛散するリスクを抑える役割もあると聞いているが、今も１日３０トンずつ増えており、廃炉事業においてはこれも大きな課題だ。番組では、伊東敏恵キャスターが発電所構内を歩く姿が映し出されたが、これまでのイメージから変わってきていると感じた。廃炉に向けては、すでに国と東京電力合わせて１兆円が投じられ、最終的には８兆円とも言われる費用が見込まれている。費用は国民も負担するので、国にはきちんと説明する義務があるだろう。また、廃炉を福島だけの問題とせず、国全体で見続けていかなければならないとする締めくくりも印象的だった。

○　４月１５日(土)の「ＮＨＫスペシャル」を見た。人類がかつて経験したことのない廃炉に向けた遠大なプロセスは世界から注目されている。技術者の熱意による工法の進歩に期待しているものの、この事業は自分たちの世代では決して終わらず、世代替わりが必ずある。困難な作業を監視し続け、情報の透明性を維持する点で、マスコミが果たすべき役割も大きい。また、困難な作業ゆえに、ずさんな処理が起こらないかとも危惧している。作業自体が後ろ向きであり、次代を担う人材が原子力工学を志してくれるか心配している。国が覚悟を決めて方針を示すことが必要だとも思った。そうした難しい状況の中で、技術者たちの高いモチベーションは前向きな材料だ。

○　１月７日(土)のアニメ　クラシカロイド(１３)「ます」の後に、ねほりんぱほりん「ナンパ教室に通う男」の予告が放送された。子どもが多く見る時間帯の番組に続け

て、大人向けと思われる番組の予告を放送することに違和感を覚えた。予告を放送する時間帯についても配慮が必要ではないか。

○　３月１１日(土)のアスリートの魂・選「羽生結弦　“絶対王者”がめざす頂」を見た。羽生選手の苦悩やジャンプにこだわる姿、そのこだわりを捨てた勇気と葛藤がよく伝わってきた。彼の鋭いまなざしを見て、胸が苦しくなるほどだった。

○　３月１１日(土)の「アスリートの魂・選」は、天才が努力するとここまですばらしい選手になるのだと感心した。宮城県出身であることを誇りに思うし、尊敬する。

○　３月２０日(月)の「春は別れの季節…今日は一日“失恋ソング”三昧」(ＦＭ 後0:15～10:45)は大変おもしろかった。幸せな歌ではなく、失恋の歌を集める番組の着眼点もよかった。有働由美子アナウンサーの司会は、自身の話に踏み込みすぎた部分も一部にはあったものの、彼女の個性が出ていてよかった。４０代から６０代の方に喜んでもらえる番組として、タモリさんと有働さんを起用し、土曜の夜間などに放送するおしゃれで自由な番組を企画してみてはどうか。

○　３月２７日(月)のノーナレ「諦めない男　棋士　加藤一二三」(総合 後10:00～10:25)は新鮮だった。ナレーションを使わず、羽生善治三冠や内藤國雄九段といった棋士の言葉で構成されている点が興味深く、次回作にも期待したい。

○　３月３０日(木)のＳＯＮＧＳ「松田聖子　ＳＥＩＫＯのＪＡＺＺワンダーランド」を見た。チャップリンの「スマイル」に期待していたが、ジャズバーにいるような雰囲気で見せてくれてよかった。また、４月１３日(木)の「尾崎裕哉～父の影　息子の光」も、父に対する葛藤を乗り越えてその作品を歌う彼の姿に胸を打たれた。「ＳＯＮＧＳ」には、歌手の「生の歌」にいつも期待している。

○　４月１日(土)に最終回を迎えた「べっぴんさん」は好きなドラマだった。連続テレビ小説は１人の女性主人公を描く作品が多かったが、「べっぴんさん」では、４人の女性の半生を大事に描いており、これまでと異なる試みだと思った。日本ではこうしたドラマは少なく、独特だ。実在の人物をモデルにしたり、昭和の流れを追ったりする側面のほか、少女マンガのような描き方もあり、自分としては見やすかった。夫の紀夫がぐだぐだする姿や、娘のさくらの反抗期にいらいらさせられる場面もあったが、総じて楽しめる作品だった。

○　４月２日(日)から始まったプレミアムドラマ「ＰＴＡグランパ！」は、ＰＴＡが抱

える問題を取り上げており、多くの人が感じるであろう現実的な悩みが描かれている。今後の展開に期待している。

○　４月３日(月)のクローズアップ現代＋「稀勢の里優勝　知られざる最後の３日間」はとてもよかった。ぜひ勝ってほしい一番で彼が勝ったことは喜ばしいが、モンゴルの人は複雑な心境だったかもしれない。番組は、そうした点にも配慮し、紳士的に取り上げていた。

○　４月６日(木)のクローズアップ現代＋「新証言　自衛隊“日報問題”」は、踏み込んだ内容だと思った。武田真一キャスターが、「なぜ文書が消去されたのか」、「誰が指示したのか」といった、国民が知りたい目線から発言していた点がよかった。メディアが国家機関をきちんとチェックするという姿勢が大切だ。武田キャスターは、「ＮＨＫニュース７」に出演している時と違った雰囲気で、鎌倉千秋キャスターとのかけ合いにも好感を持った。

○　「クローズアップ現代＋」は、これまで複数人で担当していたメインキャスターが１人になったことで、より落ち着いて見られる気がする。

○　４月７日(金)の「国際報道２０１７」は、シリア攻撃のあった日の放送だったが、新年度から担当している花澤雄一郎キャスターのコメントの歯切れがよかった。その前の週には「花澤キャスターが見たアメリカ」と題した特集がシリーズで放送され、踏み込んだ現地取材がなされていた。

○　４月７日(金)と１４日(金)に再放送された奇跡のレッスン～世界の最強コーチと子どもたち～「野球編」は、ボビー・バレンタインさんが子どもたちの可能性を引き出していてよかった。野球の一つ一つの動きに意味があると伝え、細かいところを意識することで子どもたちが変わっていく様子が感動的だった。世界を代表する指導者はさすがだとうならされた。

○　４月９日(日)の着信御礼！ケータイ大喜利「最終回スペシャル」(総合 前0:05～0:49)は、深夜に見て素直に笑えるいい番組が終わってしまい残念だ。これまで１２年間にわたってのべ4303万通を超える投稿があったことにも驚いた。不定期であっても特集として放送されることを期待したい。

○　４月９日(日)のＮＨＫスペシャル「大地震　あなたの家はどうなる？～見えてきた“地盤リスク”～」は画期的な内容だった。地盤にある粘土層が揺れを増幅させると

した研究成果を取り上げ、従来のハザードマップや被害想定が一変する可能性が示された。これまで行政や共同体に委ねざるをえなかったリスクの評価についても、個人で行う方法が示され、よりきめ細かな対策に向けた可能性が広がった。すぐれたドキュメンタリー番組は、旧来の見方や視点を変えてくれるものだと考えており、この番組はまさにそれだった。

○　４月９日(日)のＢＳ１スペシャル「ハミルトン　大ヒットミュージカルが問うアメリカ」(ＢＳ１　後10:00～10:49)は、強いメッセージが伝わってくるとてもいい番組だった。このミュージカルは、アメリカ建国の物語を、若者にも親しみのあるヒップホップやラップも用いて、分かりやすく伝えた作品だった。トランプ大統領が就任してから、移民問題をはじめ国内での意見の対立が表面化しているが、リベラルこそが不可能だとする意見も一方にはあり、自分が正しいと思うことで、かえって相手の理解が難しくなる場合もあるのだと考えさせられた。

○　４月９日(日)のサイエンスＺＥＲＯ「ゲームの最新技術　異世界が現実に！？」では、バーチャルリアリティの技術がもたらす高い臨場感に驚かされた。特に、筋変位センサーを用いて弱い電流を筋肉に伝え、実際に物に触れているかのような感覚を起こさせる技術が印象的だった。老人や寝たきりの方が外に出たり、手足を動かせない方がスポーツを楽しんだりする疑似体験を作り出せる可能性は興味深い。ＮＨＫでもさまざまな放送技術を開発しているが、各放送局でのデモンストレーションなどを通じて、実際に体感してみたい。

○　４月１２日(水)のオイコノミア「世界が注目！ＢＯＮＳＡＩ(盆栽)の経済学」は、着眼点がユニークだった。有名な人が所有することで価値が上がる「ハロー効果」や、自分で手をかけることで価値が上がる「イケア効果」が紹介されたが、経済の話と盆栽をつなげて説明したことが興味深く、また又吉直樹さんの質問の切り口や、説明もよかった。

○　４月１３日(木)のクローズアップ現代＋「熊本地震　知られざる“情報爆発”　～追跡・ＳＮＳ２６００万件～」では、災害時におけるＳＮＳの効果と課題がよく理解できた。地図上に情報を表示させ、食い違っている情報を判断する助けにするなど、ＳＮＳを生かす研究が進んでいることは心強い。東日本大震災のときにも、ＳＮＳの威力を体感したが、当時と比較してスマートフォンの普及台数が３倍になった現状を踏まえると、災害時の救援や被災者支援に向けた活用方法の検討を加速させる必要がある。番組は、熊本県益城町でキャスターとゲストが立って進行していたが、ずっと立っているのがつらそうに見えたし、タブレット端末による説明も見にくく感じた。図表

をパターンで示すなどの工夫があってもよかった。

○　４月１５日(土)の「たっぷり見せます！浅田真央　永久保存版」(ＢＳ１　後9:00～9:50)は、タイトルどおり、彼女の活躍を満喫できる番組でまさに永久保存版だった。幼い頃からの活躍や成長も見せてもらい、彼女への感謝の思いを新たにした。

○　４月１５日(土)の「たっぷり見せます！浅田真央　永久保存版」を、彼女も肩の荷が下りたのではないかと思いながら見た。長く続ければ続けるほど、自分の弱点が審査員に知られて減点につながるといった、採点競技特有の厳しさの中で彼女が戦ってきたことが推察され、オリンピックの映像を見て感動を新たにした。

○　４月１５日(土)に始まった、アニメ　アトム　ザ・ビギニング(総合 後11:00～11:27)は、楽しい番組だった。民放でも、懐かしいアニメのリメイクやリニューアルが見受けられ、そういった流れを捉えた作品ではないかとも思った。放送時間帯が夜遅く、子どもにも見てほしい番組だとすれば、もっと早い時間の方が見やすいのではないか。

○　４月１６日(日)のあの日　あのとき　あの番組「転勤　そのとき家族は」(総合 後1:50～2:55)では、1989年に放送されたＮＨＫスペシャル「幕末転勤物語」が取り上げられた。番組では、江戸時代の再現ドラマとその子孫のドキュメンタリーを並列的に描いていたが、現代社会にもそのまま受け入れられるものだ。転勤は今も昔も変わることなく、本人の人生のみならず、その家族の人生にも大きく影響する。働き方改革やダイバーシティーが叫ばれる昨今、個人の意志を尊重し、納得できる仕事環境で成果を上げさせる仕組みは、以前に比べて整ってきたと捉えているが、それでもなお、転勤はサラリーマンにとっては大きい問題だと改めて考えさせられた。

○　４月１６日(日)のＮＨＫスペシャル「熊本城　再建　“サムライの英知”を未来へ」には感心した。今回の地震で崩れた石垣の９割が明治以後に改修されたもので、加藤清正が築城した時代の技術力の高さにはうならされた。そこから私たちが学ぶべきことは、災害の経験を踏まえて、たゆまぬ技術革新を続けていく点だ。これから取り組む熊本城の再建でも、清正の精神を踏まえながら、それをさらに発展させる技術が取り入れられると紹介され、心強く感じた。

○　４月１７日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「独り、山の王者に挑む～猟師・久保俊治～」は印象深い番組だった。シカ狩りのシーンは緊迫感と迫力があり、しとめた後にすぐ解体する姿にも驚いた。東北にはマタギがいるが、久保さんは集団ではなく一人で行動する点がマタギとは異なる。「五感で動物の気配を読む」、「自然を恐

れかつ戦う」といった言葉はまさにプロフェッショナルと呼ぶべきものだ。

○　４月１７日(月)の「プロフェッショナル　仕事の流儀」を見た。頭を射ぬき、すぐ血抜きをした鹿の肉がおいしいという話を思い出し、こうした猟師さんが現場におられるのかと驚いた。命に対する畏敬の念や、つい先ほどまで生きていたものが食べ物になるという彼のことばには重みがあった。

○　４月１８日(火)のＪａｐａｎｏｌｏｇｙ　Ｐｌｕｓ「自動車教習所」はテーマ選定がすばらしく、きわめて日本的な施設なのだと改めて気付かされた。合宿免許の施設や、教官が測定器を使って笑顔の練習をしている点には驚いた。自動運転技術への対応や、高齢ドライバー増加への対応が挙げられていたのが今の時代に合っていた。

○　４月１８日(火)の「ＮＨＫニュース７」では、アメリカのペンス副大統領の来日が伝えられた。キャスターの問いかけに応えて、女性記者の方が解説していたが、キャスターの方を向かず、ある一点を見つめているように話していた部分が気になった。途中でカメラを切り替えるなどして対応した方がよかったのではないか。

○　４月１９日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で、フリースタイルスキー・モーグルの堀島行真選手のインタビューが放送され、ピョンチャンオリンピックに向けた意気込みを聞くことができた。興味深かったのは、集中力を高めるためにけん玉を続けているというエピソードだ。2020年の東京大会に向け、堀島選手も含めたスポーツ界の明るい話題が多く放送されることはいいことだ。

○　４月１９日(水)のガッテン！「ＳＴＯＰ突然死！強い心臓をめざせＳＰ」では、運動により心臓の機能が改善することが楽しく紹介された。ミトコンドリアをキャラクターに例えた演出も効果的だった。

○　「ひよっこ」は、岡田惠和さんの安定感ある脚本で、いつもの連続テレビ小説を見ている気持ちになれる。桑田佳祐さんの主題歌にも昭和の雰囲気があって心地よい。今は全体に緩さのようなものが感じられるが、主人公が東京に行ったあと、どう変わるのか楽しみだ。お父さんがとても愛されており、うらやましく感じている視聴者も多いのではないだろうか。

○　「あさが来た」と「べっぴんさん」は、女性起業家を描いた部分で共通しており、自立する女性の姿が見られてよかった。「べっぴんさん」は、じっくり考えさせられる展開もあり、やや暗い印象があった。一方で「ひよっこ」は、気楽に見られ、１話

見逃してもストーリーに付いていけるドラマだと思っている。今後にも期待したい。

○　「あさが来た」、「とと姉ちゃん」、「べっぴんさん」と企業創始者を主人公にした作品から、「ひよっこ」は一般庶民を主人公にした作品に戻った印象があり、親しみが感じられる作品だ。1960年代が舞台だが、セットや小道具、衣装には懐かしさがあり、スタッフのこだわりが感じられる。当時は東北からも多くの若者が集団就職で東京に向かっており、ごく身近な題材を取り上げたドラマだ。場面転換の際に、音楽や風の音が効果的に使われることで、見る側が次の展開を想像できる。連続テレビ小説では、ストーリーのテンポ、わかりやすい展開、明るさの３つがポイントだと考えているが、「ひよっこ」はいずれも兼ね備えており、今後も楽しみにしたい。

○　「ひよっこ」は、連続テレビ小説にふさわしい脚本で、悪い人がおらず、人間の温かさ、日本人の人のよさ、ひと昔前のよさが描かれており安心して見ていられる。ストーリー展開も素直で自然だ。主演の有村架純さんの演技もうまく、好感が持てる。

○　４月１９日(水)の連続テレビ小説「ひよっこ(１５)」では、昭和３９年１０月４日の設定で、奥茨城村での聖火リレーが描かれた。この場面で使われていた和太鼓はボルト締めのタイプだったが、この時代にはまだ登場していないもので、惜しいと感じた。翌２０日(木)のテレビ放送のシーンでは、アナウンサーがずけずけと言いたい放題で、ドラマだから笑えるおかしさがあった。

○　「おんな城主　直虎」は原作がなく、史実もよく分からない中で制作しているドラマだ。大河ドラマとしてのリアリティーを持たせる点では、脚本や役者の力量によるところが大きく、これまでのところ、まだそれが引き出せていない印象がある。これまでは、三浦春馬さんの熱演や、高橋一生さんのクールな演技が見どころとなっていたが、これからは主演の柴咲コウさんにかかっている部分が大きいと感じている。役者としての成長にも期待したい。

○　「おんな城主　直虎」は、若手の俳優を多く起用することによって生じる軽やかな雰囲気が、３０代や４０代の視聴者には合っているように思い、楽しんで見ている。

○　「ニュースウオッチ９」がリニューアルした。見慣れていないからかもしれないが、個人的には以前の方がよかった。堅苦しさをなくし、よりなじみやすくするねらいがうかがえるが、以前の重厚感が薄くなった印象がある。この時間帯のニュース番組は、その日起こったことを振り返り、視聴者が頭を整理するためのものだと考えている。そうしたニーズも捉えた番組作りをお願いしたい。

○　「ニュースウオッチ９」の出演者が代わった。有馬嘉男キャスターは、歯切れよく論点に踏み込んだコメントがいい。４月７日(金)には、国際政治学の五百旗頭真氏にインタビューしている最中にシリア攻撃の一報が入ったが、その対応も適切だった。桑子真帆キャスターは、柔らかさと明るさがあり、視聴者の目線からのコメントに好感が持てる。一方で、スタジオで二人が座る位置が近すぎる印象も受けた。若い人にＮＨＫに親しんでもらおうとする取り組みと、伝統ある落ち着いた報道番組の良さを守ること、どちらも大事にしてほしい。

○　「あさイチ」の出演者が一部入れ替わった。「ピカピカ☆日本」のリポーターに起用された藤原薫さんは初々しく、スタジオのみなさんが保護者のように見守る姿がほほえましい。「スゴ技Ｑ」のプレゼンターに起用された副島淳さんは人柄がよく頼もしい印象を受ける。

○　ニュース番組も含めて、音楽やテロップがより民放に近づいていると感じている。一目見てＮＨＫの番組だと分かりにくくなった一方、より多くの視聴者層に見てもらうために必要な取り組みだと理解している。「ガッテン！」で、観客の拍手や声が聞こえる演出があるが、スタジオで番組の収録と同時に収録した音声なのか、編集の際に追加した音声なのかをお尋ねしたい。

（ＮＨＫ側）

観客にはスタジオに入ってもらい、番組収録と同時に収録した音声を使用している。

○　ＮＨＫには「地域の文化財」とも呼ぶべき民俗芸能を取り上げてほしいとかねてより申し上げてきた。民俗芸能には娯楽の側面だけでなく、五穀豊じょうや地域の繁栄、火防、安産といった祈りが込められており、だからこそ現代まで受け継がれている。そうした本質に加え、芸術性の高い民俗芸能も多く、放送で取り上げることで、視聴者の感動につながると考えている。昨年１０月７日(金)のシリーズいわて「獅子がくれたふるさと」(総合 後7:30～7:58 岩手県域)や、同じく昨年１１月６日(日)明日へつなげよう　花は咲く　あなたに咲く「響け！未来への“鼓動”～岩手・陸前高田～」(総合 前10:20～11:08)は、そうした考え方の上にあるものだと捉えている。さらに、盛岡局では、今年度から「再発見いわて」で郷土芸能に関する番組を放送すると聞いており、視聴者も喜ぶだろうと期待しているところだ。

豊洲市場の問題や、森友学園の問題に関する各社の報道を見ていると、誰かをやり玉に上げて徹底的に叩くといった、よくない風潮があるように思える。その中で、Ｎ

ＨＫの報道は公正だといつも感心している。テレビは民主主義を守るためにあると考えており、今後も公共放送の役割を担い、国民に喜ばれる放送を出し続けてほしい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局